ド根性（ドスケベ）忍伝

身勝手の極意

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エロスは世界を救う。

目次

ド根性（ドスケベ）忍伝　第一章 …… 1
ド根性（ドスケベ）忍伝　第二章 …… 6
ド根性（ドスケベ）忍伝　第三章 …… 12
ド根性（ドスケベ）忍伝　第四章 …… 18
ド根性（ドスケベ）　波の国編
ド根性（ドスケベ）忍伝　第五章 …… 25
ド根性（ドスケベ）忍伝　第六章 …… 33
ド根性（ドスケベ）忍伝　第七章 …… 41
ド根性（ドスケベ）忍伝　第八章 …… 49
ド根性（ドスケベ）　中忍試験編
ド根性（ドスケベ）忍伝　第九章 …… 58
ド根性（ドスケベ）忍伝　第十章 …… 67
ド根性（ドスケベ）忍伝　第十一章 …… 76
ド根性（ドスケベ）忍伝　第十二章 …… 85
ド根性（ドスケベ）忍伝　第十三章 …… 94
ド根性（ドスケベ）忍伝　第十四章 …… 102
ド根性（ドスケベ）忍伝　第十五章 …… 111
ド根性（ドスケベ）忍伝　第十六章 …… 122
ド根性（ドスケベ）忍伝　第十七章 …… 133
ド根性（ドスケベ）忍伝　第十八章 …… 144

ド根性（ドスケベ）忍伝　第一章

誰もが振り向き、振り返るであろう美貌。
刺々しくも長く美しい白髪。
「つ…氷麗(つらら)？」
そんな……誰もが振り向き、振り返るであろう美貌の持ち主に向け、〝氷麗〟という名を呟いたのは、その美貌の持ち主とそっくりな髪型、髪色の持ち主――自来也。この世界に、星の数程存在する忍の頂点と呼ぶに相応しい実力者の1人である。
だが、自来也が氷麗と呼んだその者は、氷麗ではない。
「氷麗は僕の母です。
そして、僕の名は氷也(ひょうや)。お会いできて光栄です、自来也さん…いえ、父さんと呼ぶべきでしょうか？」
しかも、驚くべきことに女性(美少女)ではなく男性(美男子)である。
しかし、氷也という名の絶世の美貌を持つ者が女ではなく男だったことなど、自来也にとって些細な問題だ。些細どころか、どうでもいい問題だろう。
何故なら、自来也は〝父さん〟と呼ばれたのだ。
「お…お前は…まさか…」
「母――氷麗と最後に過ごした晩のことを…あなたは覚えておられますか？」
そして、氷也の言葉で自来也は己の人生最大の……血の気が引く思いを味わったそうな。

??

かつて、自来也が一途に想い続ける女以外で唯一、心を突き動かされた女が存在した。
その女に瓜二つの少年――氷也との劇的な出会いから数ヶ月…。
「氷也、お前はどうだ？

お前にとっての真のエロとは何だ？」
「僕は、見えそうで見えない”チラリズム”にこそ、真のエロを見出だしています」
氷也と自来也は真剣な表情で大切な会話をしている。
ただ、本人達にとって大切な話なだけで、他の者達からしたらどうしよもなく、ろくでもなく、馬鹿な話でしかない。
「チラリズムか…さすがは儂の息子だのォ。
うむ、次の作品のコンセプトは”チラリズム”にするぞ！タイトルも”イチャイチャチラリズム”に決定だ！」
「お褒めに預かり光栄だ父さん！」
劇的な出会いから数ヶ月経過した現在、端から見たら氷也と自来也は仲睦まじい親子の関係を築き上げているようだ。
己の息子だと聞かされた際の自来也は珍しく動揺していたが、数日間共に行動をする内に、氷也が己が今も想い続ける女以外で唯一愛した女の息子であることを確信し、そこからさらに時間が経ち、己の息子であることも受け入れ、今では己の助手としてそばに置いているようだ。
しかし、この親子には問題がある。
それは、この親子がとてつもなくスケベで女好きということだ。たった今の会話の内容も、自来也が執筆するエロ小説についてなのである。
しかも、ついさっきまで女風呂を親子揃って覗いていた。小説のネタを求めて……仕事の一環なのだそうだ。
自来也はともかく、氷也は絶世の美貌を持つ母親似の美男子で、女風呂を覗くなど誰が想像できようか…。想像できないが、氷也の覗き癖は間違いなく自来也譲りだろう。
この親子は女の敵だ。
「氷也、儂と共にエロ道を極めるぞ！」
「ああ！」
氷也と自来也が親子など、その事実を知りたいと思う者は恐らくいない。寧ろ、親子であってほしくないと思う者の方が大多数なのでは

ないだろうか…。
だが、これは偽りようのない事実。氷也と自来也も、己達の意思で遺伝子検査を行い確認済みだ。そして、これがまた厄介なことなのだが、自来也は忍界最高峰の忍で、氷也は自来也と才色兼備だった母親の良いところを多く受け継いでおり、忍としての才能にも恵まれているのである。
自来也も氷也の才能に気付き、これまで何もしてやれなかった埋め合わせとして鍛え始めたようだ。
今のところ、氷也は忍としての才能を覗(エロ)きの為に使っているが、これは自来也の悪い遺伝だ。
忍としての才能の高さはピカ一。その反面、人間としては破綻している。
両親の良いところも悪いところも、ここまで完璧に近く受け継いだ子はなかなか存在しないだろう。
忍としては欲しいが、人間としては……悩ましい限りである。
「もちろん、儂の息子なら忍道も極めてもらうがな！」
良くも悪くも、忍界で有名な自来也だ。その息子であることは遅かれ早かれ発覚し、大きな話題を呼ぶはず。氷也の成長がこれから先、忍界に与える影響は少なくはないだろう。
そして、これより数年後――氷也の名は全世界に響き渡ることになる。

??

自来也の故郷は、忍び五大国の一つに数えられる火の国の隠れ里――”木ノ葉隠れの里”だ。
そして、五大国最強の忍びの隠れ里と謳われる木ノ葉隠れの里の現在の里長は、自来也の師匠である三代目火影・猿飛ヒルゼンである。
その三代目火影・猿飛ヒルゼンは現在、どこか呆れ果てたような……それでいて諦めたかのような、何とも言い難い表情を浮かべ、久々に里に帰郷した自来也に視線を向けていた。

「いつかは…このような日が来るのではないかと考えたこともあった。それと同時に、無類の女好きのお主であっても…このようなことはしないだろうと信じていた」
　三代目は自来也に向けてそのように口を開くと、続いて自来也の隣に立つ美男子へと視線を移す。自来也そっくりの長い白髪を後ろで一本に束ねた美男子は、自来也の息子である。
「儂は氷也が生まれてから１０年以上…氷也の存在を認知すらしておらず、何一つしてやることができなかった。本当に申し訳ないと反省しておる。しかし、あの子との…氷也の母…氷麗（つらら）と過ごした時間には…後悔など何一つない」
　自来也が今も秘かに想い続ける女以外で唯一、心を突き動かされた氷麗という美しい女。そして自来也にとって、氷也という存在は氷麗との愛の結晶なのだ。
「無類の女好きでありながら、実は綱手一筋でもあったお前がそこまで言うとはな…。
　おっと…息子…氷也の前でする話ではなかったな、すまぬ」
「いえ、俺のことはお気になさらず。
　父さんの母に対する想いを知ってますので」
　無類の女好きとして有名で、世界各地を旅する自来也は、各地至る所に隠し子がいるのではないかと噂されることも多々あるが、そこに関しては徹底的に気を付けていたようで、このような事態を経験するのは初めてのようである。
　だが、自来也の氷麗に対する想いは本物であり、今では父親として氷也を育て、接している。一緒に女風呂を覗いたり、エロ小説の執筆を手伝わせたりなど、父親以前に大人としてどうなのかという部分も多々見受けられるが、そこは自来也だから仕方ないかもしれない。寧ろ、さすがは自来也の息子というべきか、氷也も自来也の期待に応えている。
　息子としても、忍としても……そして、エロスを追究する男として、氷也は自来也に鍛え上げられ、立派に成長している。
「うほん！

それでだが…猿飛先生。氷也を木ノ葉の忍として迎え入れてほしいんだが…どうかのォ？」

だからこそ、自来也は氷也の更なる成長を考え、己の手元から放すことを決意した。

自来也はこの数年、氷也と共に世界各地を旅しながら、忍の技術、知識を教え込んだ。氷也も、自来也（父親）と過ごす時間が嬉しく、自来也の教えたことを恐るべき早さで学び、習得し、昇華していった。

「息子自慢にとられるかもしれんが、氷也の才能はとんでもない。妙木山の蝦蟇と契約も結び気に入られておる。儂と、雪一族出身の氷麗の影響もあってチャクラ量も多く、手札も多彩だ。並の中忍ではどんだけ束になろうと勝てんだろうのォ」

あとは、自来也から叩き込まれ、身に付け、昇華したものを実戦で十全に使いこなせるかどうか…。

自来也はその為に、氷也を木ノ葉の忍にどうかと三代目火影に勧めるのである。

「ミナトを超える才能を秘めておる」

「それほどか…」

かつて、里の狂気と恐れられた自来也。

その自来也の息子であり、弟子でもある氷也は、木ノ葉隠れの里でどのような伝説を残すのか…。

新たな物語が始まりを迎える。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第二章

”伝説の三忍”と謳われる自来也に息子がいた。
それは衝撃的な一報……のはずなのだが、木ノ葉隠れの里では極一部の者にしか知らされてはいない。本人達があまり公にしたくないとのことだ。
「いいか、ナルト。
ただ裸になればいいってもんじゃない。真のエロというものは、見えそうで見えない（チラリズム）…そこがなによりも重要だ」
「お、おう」
もっとも、気付く者はすぐに気付くだろう。
何故なら、自来也の息子だからだ。自来也の息子ならば、間違いなく自来也の血を色濃く継いでおり、無類の女好きでドスケベなはずだからである。血は争えない。この親にして、この子ありなのである。
「これが…”真のお色気の術”だ」
「な、何か…どう言ったらいいかわかんねェけど…ヤバいってばよ…」
現に、変化の術を駆使して裸ワイシャツの女に変化するという禁断のエロ忍術で金髪碧眼の少年を興奮させていた。
シャツの裾から見える白く細い太もも。見え隠れする女の秘密の花園。ボタンの隙間から見え隠れする乳房に、強調された胸の突起。
女の裸だけで興奮できる幼い少年でも、チラリズムの破壊力がどれ程のものか自然と理解できてしまう。氷也は今、女の神秘と真のエロを同じ歳の少年に教え込んでいる。
「な、何の修業をしてんだエロガキどもがァァァ!!」
自来也の息子――氷也が木ノ葉隠れの里にやって来てから早いことで数ヶ月。
氷也は現在、木ノ葉の忍者養成学校、通称”忍者学校（アカデミー）”に通っている。
「あ、イルカ先生だってばよ」
「イイ機会だ。

ナルト、この術の賢い使い方も教えてやる…よく見ておけ」
氷也程の実力者ならば、すでに忍になっていてもいいはずだが、今は戦時下でもないこともあり、12歳までは忍者学校に通うことが義務化されていた為、氷也も忍者学校に通うことになったようだ。
ただ、かつて里の狂気と恐れられた自来也の息子である氷也は自来也と同じく狂気であり、入校から数ヶ月で優秀すぎる大問題児として、教師達に認定され、恐れられてしまっているようだ。
「きゃ！
ボ、ボタンがッ――ひゃ！イ、イルカ先生のエッチ！」
「ふッぐおォォォ！」
授業が退屈だからと、忍者学校で知り合った金髪碧眼の悪友――うずまきナルトと抜け出し、真のエロの追究をしているのだから、問題児認定されて当然だろう。しかも、氷也にとってナルトは波長がとても合うようで、すでに親友と呼ぶに等しく、忍者学校創設以来、最悪の問題児認定されているナルトと氷也が手を組んでしまっては手に負えない。
そして、今日もまた真のエロの被害者が出た。
おっぱいの大きさに耐えかねたボタンがはち切れ、ボタンの隙間から見え隠れしていたおっぱいが完全に露になりかける様を演出した氷也の魔の手にかかってしまったのである。
「イ…イルカ先生がイチコロだってばよ」
失血死してもおかしくないおびただしい量の鼻血を吹き出し、気を失ったのは忍者学校の教師で、氷也とナルトの担任である海野イルカだ。
「チラリズムは奥が深い。
そして、チラリズムはおっぱいや太もも、下着、体毛、さらには陰部！隠している部位が偶然または故意によってさらけ出されることこそが何よりも重要だ。
人は羞恥心を感じる生き物だ。それを隠そうとする仕草に萌え、さらに隠されているものが見えたというラッキーな感覚によりそれが増幅される。これこそがチラリズムだ！」

氷也は、ナルトに真のエロ（チラリズム）を力説する。
母親に似て、絶世の美貌を持つ美男子でありながら、その内に秘めた想いは真性のドスケベ。
「勉強になるってばよ！・さすがは先生!!」
「わっはっは！・もっと俺を崇め讃えるといい！」
長い白髪を後ろで一本に束ねた長身の美男子――氷也は近い将来、里の狂気の後継者として恐れられる。

??

氷也が木ノ葉隠れの里にやって来て数ヶ月――氷也は新たな素晴らしい発見をした。
そして今、その素晴らしい発見を目の当たりにし、歓喜していた。
当然、氷也の新たな素晴らしい発見とはエロいことであり、エロに付き合わされる被害者もいる。
「ね、ねェ…は、恥ずかしいんだけど…ほ、ホントに…これ着てないとダメなの？」
氷也と同じ歳頃のお団子頭の美少女が、恥ずかしがりながら氷也に向かってそう口にしているが、チャイナドレスの虜になってしまった氷也は真剣な表情で聞く耳を持っていない。
彼女は氷也の一期上で、すでに忍者学校を卒業してくノ一として活動しているテンテンという名の将来有望な美少女だ。
「素晴らしい。
深いスリットから見え隠れする太もも。ピッチリしたサイズを着ることで、将来が楽しみすぎる発展途上のおっぱいも強調され、袖がない型なのもあって、腕を動かす度に露になる脇もイイ、たまらない！」
テンテンは1ヶ月程前、幸か不幸か……木ノ葉の街中で氷也と遭遇し、目をつけられてしまったそうだ。
真性のドスケベ、女好きである氷也に目をつけられたことを喜ぶべきか悲しむべきなのか…。

「とはいえ、テンテンだからこその素晴らしい出来具合だ。君は本当に素晴らしいな、テンテン」
「も、もう…恥ずかしいのに嬉しくなっちゃって複雑だよ…」
普通、出会って1ヶ月そこらで、ここまで恥ずかしい格好をわざわざ見せてくれる女子はなかなかいないだろう。
それでも恥を忍んでくれたのは、氷也の持って生まれた快活で爽快な人柄とエロさ故か…。
もっとも、テンテンが氷也と親しくなったきっかけは目をつけられた以外にも、氷也が自来也の息子だと知ったからなのもあるようだ。とはいえ、今では氷也の人柄にテンテンは完全に惚れ込み、ろくでもないお願いをほぼ何でも聞いてあげており、かなり毒されてしまっているようだ。
「よし、今日はチャイナドレスのまま修業だ」
自来也の英才教育のおかげもあり、術が多彩な氷也に修業をつけてもらうのがテンテンの最初の狙いだったのだが……悲しいかな、氷也のエロの追究が優先で、テンテンの修業は二の次。
「ええ!?
は、恥ずかしいんだけど!」
「今日は剣術と体術の修業だ」
「こ、この格好で剣術と体術の修業したら動きが激しくて下着が見えちゃうってば!!」
氷也にとって第一優先はエロなのだ。それは決して変わることはなく、絶対に譲らない。
「このように…刀やクナイに性質変化を纏わせる戦法――”チャクラ流し”を伝授してやろう」
「よ、よろしくお願いします!!」
主導権を握っているのは氷也。
氷也に目をつけられたのがテンテンの運の尽きであり、それと同時に運のつきはじめでもある。
どうやら、氷也は指導力も自来也から受け継いでいるようだ。無類の女好きとして知られる自来也だが、指導力にも定評があり、四代目

火影を育て上げたことは有名な話である。
氷也は、テンテンを超一流のくノ一に育て上げると同時に、エロくて美しい女に育て上げるつもりなのだろう。
己の手でエロくてイイ女を育て上げるなど、まさに無類の女好きでドスケベだ。
氷也は今日もエロをとことん追究する。
「お、今日は赤…俺が好きな色の一つだ。背伸びしてるみたいなところがまたイイ」
「あ、赤が好きって言ってたし…って、言わせないでよォ！」
氷也はドスケベでろくでもない。その反面、指導力も優れており、忍としての才能も高い。
これ程、質が悪い有望株はなかなかいない。

??

「猿飛先生…氷也はどうですかな？」
「何だかんだで父親をやっておるんじゃな」
氷也が忍者学校に通い始め数ヶ月……いつもなら数年単位でしか里に戻ってこない自来也が、今回は珍しく数ヶ月で戻ってきていた。
その理由は、愛息子の氷也が気になってのことなのだろう。
無類の女好きなだけに、息子には放任主義を貫きそうな自来也だが、母親似なのもあってか気になって仕方がないようだ。ただ、そんな姿を見せたくないのもあるのか、氷也本人の前に姿を見せることはなく、三代目火影・猿飛ヒルゼンに様子を聞くに止まっているようだ。
「で…どうなんです？」
「はあ…あの子は間違いなくおぬしの息子じゃ。
立派に…傍迷惑に…〝里の狂気〟を受け継いでおる」
そんな弟子の様子に、三代目火影は深いため息を吐く。そして、憂鬱そうに氷也の様子を語る。
「ハッハッハ！さすがは儂の息子ですのォ！」
「まったくじゃ。この親にしてこの子ありじゃ」

三代目はまったく褒めてはいない。だが、自来也は息子が自分に似ているのが実に嬉しそうである。
「しかも、ナルトや一期上の女の子を弟子にしておる」
「！
まさか…ふふ、それは嬉しいもんですのォ。
儂の息子がミナトの息子を弟子にするとは」
自来也は心から、氷也の木ノ葉隠れの里での様子を喜んでいる。そして、強い血の繋がりを感じている。
「おぬしに似て、指導力も高い。立派な息子じゃな…自来也」
「猿飛先生、照れるからやめろってのォ！」
我がことのように嬉しそうだ。
どんな人物も、子供を持つと変わるのだろう。自来也の場合、己が今も想い続ける女以外に唯一愛した女との子だけに尚更にだ。
「とはいえ、問題行動が多すぎる。〝お色気の術〟…アレだけは危険すぎて禁術指定してやめさせねばならん」
「〝お色気の術〟!?聞いただけでエロを刺激されるその術はいったいどんなものですかのォ!?」
５０歳なのに少年のように瞳を輝かせる自来也の様子に、三代目火影は本日何度目かの深いため息を吐くと同時に、自来也が氷也の父親であることを改めて実感する。
「やめておけ…儂はあの術で三途の川を渡りかけてしまった」
もっとも、全ての始まりは何だかんだで三代目火影にあるのかもしれない。
何故なら、三代目火影は自来也の師なのだから。
「…猿飛先生は相変わらずのムッツリスケベだのォ」
「馬鹿者!〝チラリズム〟の破壊力を甘くみるでない!!」
この師にして、この弟子あり。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第三章

満を持して発売された最新作――”イチャイチャチラリズム”は、空前絶後の大ヒットと呼ぶに相応しい社会現象を巻き起こした。主に、幾つになろうと心は常に青少年な男達の間のみではあるが…。

それでも、前作”イチャイチャパラダイス”上中下巻の総売上数に一気に迫り、上回るのも時間の問題だ。

自来也の文才は前作にも増して素晴らしいもので、”チラリズム”の素晴らしさと奥深さが十二分に作中で語られており、今作は間違いなく今年度の官能文学大賞を受賞するはずである。

しかし、イチャイチャチラリズムが何故ここまで爆発的に大ヒットしたのか……もちろん自来也の文才もあるが、その最たる理由は、前作にはなく今作に導入されたエロすぎる”挿絵”だろう。自来也の文才をもう一段階上のものへと押し上げるエロすぎる挿絵に誰もが唖然とし、虜となった。世界に名を轟かせる画家ですらも、感動を覚えたそうだ。

ただ、その挿絵を描いたのがいったい誰なのか……読者達は挿絵も自来也が描いたのだろうと思っていたようだが、実は別の人物が描いたと知り、衝撃を受けたことだろう。

”氷也”という名前だけが明らかになっただけだ。

もっとも、エロすぎる挿絵を描いたのが未成年だったなど公にできるはずもなく、氷也が自来也の息子だと知っているのは読者の中でも2人のみである。もちろん、自来也の担当編集者と、出版社の社員達は真実を知っているが…。

とにもかくにも、氷也はエロ絵画に新たな息吹を吹き込んだのである。まったく大したヤツである。

瞬く間に天才挿絵画家として話題となった氷也は今日もまた新たなエロを求め、追究しており、その隣にチャイナドレスを着用した美少女をつれている。

「ん？」

そんな氷也は、ここ最近……新たな能力（エロ）に目覚めたそうだ。
それは、幸運な偶発イベントである。
「きゃッ！」
氷也のお気に入りであり、チャイナドレスを着た将来有望な美少女テンテンが、本来なら躓かないような場所で躓いてしまう。
「？
あ、あれ？　痛くな…ッ!?　ひゃあァァァ！
ご、ごめん氷也!!」
そして、テンテンが躓いて顔から倒れてしまった先にあったのは、氷也……というより男の大切な場所であり急所。男にあり、女にはないモノだった。
衣服越しとはいえ、テンテンは氷也の大切な場所に口付けをしてしまった状況である。
「気にしなくていい。
それよりも大丈夫か？　怪我は…してないようだな」
「ほ、本当にごめんなさいィ！
（うぅ…ど、どどど、どうしよう!?
氷也のアソコに口から突っ込んじゃったよォ！）」
これは、”ラッキースケベ”と呼ばれる現象で、年頃の男性が女性とちょっとエッチな接触、または光景を目の当たりにするという大変幸運な現象であり、氷也の父親である自来也が喉から手が出るほど欲しいと口にする稀少な能力（エロ）だ。
ただ、氷也の場合は少しばかり違う。
躓いたのが氷也で、躓いた氷也が顔から倒れた先がテンテンの秘密の花園だったならばラッキースケベになるが、躓いたのは氷也ではなくテンテンだ。
これはラッキースケベの逆。年頃の女性が男性とちょっとエッチな接触をする現象で、逆ラッキースケベと呼ばれるものだ。
つまりこの場合、テンテンが逆ラッキースケベの能力を持っているということになるのだが……実は違う。
「今日は俺に股がってくれないんだな…残念だ」

「あ、あれは忘れてってば！」
テンテンは普段、躓かないような場所で躓いたりなどはしない。そもそも、成り立てとはいえテンテンはくノ一なのだ。常人よりも身体能力が高い。ならば何故……テンテンが躓くのは、何故だか常に氷也の前だけなのである。
数日前、テンテンはどのような転け方をしたのか、チャイナドレス姿で氷也を巻き込んで倒れてしまった挙げ句に、氷也の顔面に股がってしまっていた。氷也は、黒いレースの下着越しにテンテンの秘密の花園の香りを堪能したことだろう。
さらにその数日前は、テンテンが躓いて氷也の方に倒れ、テンテンを支えようとした氷也の手がテンテンのチャイナドレスの脇部分から入り込み、下着すらも通りすぎ、おっぱいを直にお触りしていた。
そう…この現象はただの逆ラッキースケベではない。テンテンは氷也によって逆ラッキースケベを誘発されたのである。
これが、氷也が目覚めた能力なのだ。
意中、お気に入りの女性に対して逆ラッキースケベ能力を誘発させ、氷也が大変幸運なエロを堪能するも。
エロを追究する男ならば、何としても手に入れたい神がかり的なこの能力はこう呼ばれている。
”ラッキースケベ・トリガー”
「他の男には触らせるなよ？」
「さ、触っていいのは氷也だけだよ！　あ！
ち、違ッ、そういう意味というか、違わなくはないけどッ、じゃなく…ああ、もう！氷也のエッチ！」
このように、赤裸々な告白をさせるのも、ラッキースケベ・トリガーの神がかり的な能力の一つなのだろう。
「ふッ、俺はドスケベだからな。
いつもどんな時もテンテンを想い、淫らな妄想をしているくらいだ」
「も、もう…氷也ったら。
普通は怒るか、ドン引きするかのどっちかなんだろうけど…私で淫

らな妄想してるのも恥ずかしいのに…氷也にそんなこと言われたら嬉しくなってきたじゃん」
ドスケベを受け入れられ、寧ろドスケベなところに好意を持たれる男だからこそ得ることができる神がかり的なエロ。
まだ幼い少年がとんでもない能力を得てしまった。
ちなみに、氷也は自身がラッキースケベ・トリガーの能力を持っていることに気付いてはいない。幸い、今の段階ではテンテンが逆ラッキースケベの能力を持っているのではないかと思っているようだ。
氷也がもし、自身がラッキースケベ・トリガーの能力を持っていることに気付いてしまったらどうなるか…。木ノ葉隠れの里がたちまちエロい里へと大変貌を遂げてしまう。
氷也には絶対に知られてはいけない。
しかし、知ろうが知るまいが、あまり関係ないかもしれない。
何故なら、氷也はドスケベで女好きだが、理想が高い。氷也の見初められる女性が、テンテンの他にどれだけいるか…。
氷也が木ノ葉隠れの里にやって来て数ヶ月……テンテン以外には、まだ見つけられていないようだ。
「テンテン。
今からチャイナドレスを新調しに行くぞ」
「こ、今度はどんなの着せるつもりなの!?
も、もしかしてミニ丈!?それとも背中開き!?
そ、それに、私にどれだけ服買うの!?　お金大丈夫!?」
もっとも、氷也のラッキースケベ・トリガーに誘発されているとはいえ、テンテンが氷也が喜ぶ言葉を赤裸々ながらも口にしてしまうのもあり、テンテンを超えるお気に入りを氷也が見つけ出すのはなかなか難儀なことかもしれない。
テンテンが発展途上の美少女で、この先どこまで美しくエロく成長するのか……氷也自身がテンテンの成長をプロデュースできるのも、テンテンに対する氷也のお気に入り度により拍車をかけている。
ドスケベで無類の女好きな親子――氷也と自来也に違いがあるとしたら、恐らくこれだろう。

氷也は己の手で、エロくて美しい女を育て上げることに重きを置いている節がある。テンテンへの接し方がそれを証明しているのではないだろうか…。
「安心しろ。こう見えて、収入(印税)はたんまりと得ている」
テンテンが着ているチャイナドレスや、他にも氷也から贈られたチラリズム要素満載な服はどれも高級品だ。
「仕事してるの!?」
「最近、父さんの小説限定だが、挿絵画家としてデビューしてな。
実は、漫画家としてデビューしてみないかという話が出ていてる。父さん(自来也)が脚本を担当し、俺が漫画担当で…ふむ、イイことを思い付いた。テンテンと俺をモデルにして、2人のエッチでトラブルな日常を題材にしてみるのはどうだろうか！」
イチャイチャチラリズムの空前絶後の大ヒットによって、氷也の懐にもとんでもない額の収入(印税)が入っているようだ。
さらに驚くべきは、氷也の漫画家デビューの話である。
ただ、氷也が描くとしたら年齢指定のある漫画。出版社も血迷ったことを考えるのものである。
「タイトルは…そうだな――”イチャイチャトラブル”！」
「まだ未成年だよね!?」
世の男達を虜にする漫画家が誕生するかもしれない。
「氷也は忍になるんじゃないの!?」
改めて言っておくが、氷也は忍者学校に通う未成年である。
氷也にとって、どちらが本業でどちらが副業なのか…。
”里の狂気”の後継者は、やはり何を仕出かすか未知である。

??

木ノ葉隠れの里の三代目火影・猿飛ヒルゼンは、人生史上最大の選択を迫られていた。
「どうする…どのような編成にする…どの選択が正しいんじゃ!?」
三代目が執務を行う火影執務室の机の上に並ぶ三枚の忍者登録証。

右から、うちはサスケ、うずまきナルトと続き、氷也の順に置かれており、三代目はその３人の少年の忍者登録証を前に激しく思い悩んでいる。

昨日、忍者学校（アカデミー）にて卒業試験と題した下忍選抜試験の一次試験が執り行われた。

そして、一次試験を突破した下忍候補生達は、明日執り行われる二次試験に望み、合格することで木ノ葉隠れの里の新たな下忍となる。本来なら、里を支える新たな忍達の誕生に喜ぶべきところなのだが、三代目を思い悩ませるのは忍者学校きっての問題児達のようだ。

二次試験では、３人１組（スリーマンセル）の班を作り、各班ごとに付いた担当上忍から課せられた試験を合格することで、下忍になれるわけだが、三代目はこの３人を同じ班にしていいものか、それとも別々にするかで大きく悩んでいる。

一緒にしても問題があり、別々にしても問題がある……問題児と呼ぶに相応しい少年達だ。

三代目は今、究極の選択を迫られているようなものなのである。ただ、三代目がここまで思い悩んでしまうのも仕方ない。寧ろ、正しいと言うべきだろうか…。

何故なら、三代目の選択が、この里だけではなく、忍界全体に影響を及ぼすことになるのだから…。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第四章

風の音を鳴らす刀と刀が衝突し、突風が発生する。
「！　これは…風(風チラリズム)のイタズラか…。素晴らしいものだな」
「も、もう！　私のパンツ見る為の修業じゃないんですけど!?　まさかこの為だけに、私にこの術を習得させたの!?」
朝から精が出る２人。
ただ、双方の修業目的は同じではないかもしれない。
「風チラ最高だ」
テンテンは強さを追い求め、片や氷也はエロを追究する。
チャイナドレスの裾が突風でめくれ、下着が露になる為に片手で必死に隠そうとしながら戦うテンテンだが、氷也を相手にそれは無駄な足掻きでしかない。
「まさかこのような効果(エロ)が発生するとは。我ながらイイ術を開発したものだ…」
――風遁・風籟(ふうらい)――
この術は氷也がテンテンの為に開発したもので、本来は刀やクナイなどに風遁チャクラを纏わせ、斬れ味を向上させるものだ。しかも、習得難易度Ａの超高等忍術である。
しかし、この術同士がぶつかり合うことで突風が発生し、テンテンのパンツが露になる現象は偶発的なもの。本日も、テンテンは氷也のラッキースケベ・トリガーによって逆ラッキースケベを誘発され、氷也を満足させているようだ。
「ああッもう！
ここまで来ちゃったらいくらでも見せてあげるわよ！　氷也は私のパンツだけを見てればいいんだから！」
しかも、テンテンは今日もまた氷也が喜ぶ大胆なエロい言葉まで堂々と口にしてしまっている。
「あ！」
失言だと思ったところで後の祭りだ。

「なら、もっと見せてもらおうかな」
「わ、忘れッ――きゃあァァァ！」
　そして、テンテンは慌てた後にまた、奇跡的な転け方をしてしまう。お互いに刀を持った状態で非常に危険ではあるが、幸運なことに互いの体に傷を与えることは一切なく…。それでも、天は常に氷也に優しく、氷也の刀がチャイナドレスの深いスリット部分から見えているテンテンのパンツの紐を斬ってしまっていた。
「あいたたた…ご、ごめん…氷…也…あ…」
　さらに、転けたテンテンはまたしても氷也を巻き込んでしまっており、氷也を仰向けに押し倒し、テンテンは仰向けになってしまった氷也に股がってしまっている。数字で例えたならば、6と9に見えてしまうような過激な体勢だ。
「テンテン…俺に秘密の花園を主張しているということは、先を求めているということでいいんだな？」
「い、いやあァァァァ！
（み、見られちゃった！　い、いつかは絶対に見られることになると思ってたけどッ…氷也に性器見られちゃったよォ!?）」
　テンテンはついに、氷也にもっとも大切な部分を直に見せてしまった。もっとも、遅かれ早かれこうなっていただろう。
「これから下忍になる俺への最高のプレゼントだ。　ありがとう、テンテン」
「ひゃあん!?
　ま、間近で喋らないでェェェ!!
（プ、プレゼントなら…わ、私を――んんッ！　ダ、ダメェ）」
　朝早くから修業する氷也とテンテン……精が漲っている。

??

　先日、忍者学校（アカデミー）にて、卒業試験と題した下忍選抜試験第一の試験が執り行われた。
　そして今日、第一の試験を突破した下忍候補生達が教室内に集めら

れており、これから下忍としてどのように行動するのかを説明されているところである。
今朝、いつも以上に美味しい思いを味わった氷也も気分良くその場におり、己の配属先の発表を待っている。
本来、新米下忍達は”３人１組（スリーマンセル）”の班で任務に当たることになっており、各班ごとに担当上忍が付く。班は力のバランスが均等になるように編成されるのが通例だ。
だが、今期は訳あって異例の班編成が為されることとなった。その訳……とは、忍者学校（アカデミー）始まって以来の超問題児の２人にある。
その超問題児とは、氷也とうずまきナルトのことだ。
三代目火影・猿飛ヒルゼンはこの２人に、かつてないほど頭を悩まされたのだそうだ。氷也とナルトをどのように振り分けるべきか、苦渋の選択だっただろう。
「次…第７班。
この班は人数の都合上で、２人１組（ツーマンセル）編成になっている」
いよいよ、三代目の苦渋の選択がうみのイルカの口から告げられる。
「うずまきナルト。
そしてもう１人…」
――――――　氷也
三代目が下した選択は、悪童という言葉が生易しくすら感じさせられてしまう忍者学校始まって以来の超問題児の２人を同じ班にするという力のバランスを無視した……正気の沙汰とは思えぬものであった。
「よっしゃあァァァ！
氷也と同じ班だってばよ!!」
とはいえ、ナルトと組める者が氷也しかいなかったのは事実。他の者には、ナルトの重荷を共に背負うことはできないと、三代目は考えたのだ。
三代目の選択は一見、正気の沙汰とは思えぬ選択のように思われるかもしれないが、氷也の実力を踏まえたならば、これ以上ないほどに

正しい選択だろう。
その上、氷也とナルトの担当上忍に任命される人物は並の実力者ではないはずだ。今の氷也とナルトでは、その人物を相手に優位に立てないかもしれない。そもそも、”伝説の三忍”と謳われる自来也の息子で雪一族の末裔の氷也と、素性に訳ありのナルトは何かと背中に気を付けて生きていかなければならず、並程度の上忍に任せられるはずがないのである。
訳ありの超問題児2人を別々にし、貴重な木ノ葉の戦力上忍を割くのも労力の無駄遣いになる。ならば、氷也とナルトを別々にするよりも、一緒にする方が賢明な判断のはずだ。
もっとも、担当上忍が如何に凄い忍だろうと、氷也とナルトが大人しく従うはずがない。担当上忍になる者はこれから大変な思いを味わい、手を焼かされることになるはずだ。
ちなみに、2人1組の班はもう一班あり、どちらも1人少ないこともあってか、合同任務になる場合が多いかもしれないとのことである。ただ、氷也とナルトは一切興味を示してはいないようだ。

??

第7班の担当上忍になり、氷也とうずまきナルトを受け持つことになった上忍――ヤマト。
彼は、木ノ葉屈指の実力を持つ上忍で、初代火影・千手柱間のみが使用できたとされる”木遁忍術”を使用することができる稀少な存在である。
そのヤマトは現在、受け持つことになった氷也とナルトの実力を確かめるべく、下忍昇格試験と題したサバイバル演習を行っているところだ。
「ナルト！　お前は火遁だ！」
「おう！」
「俺とナルトの連携術…とくとご覧あれ！」
――火遁・蝦蟇油炎弾――

ヤマトは今、氷也とナルトの忍としての実力の高さと、彼らの連携能力の高さを目の当たりにしている。
氷也が放つのは口寄せ契約を交わす”妙木山”秘伝の術で、チャクラを変換した油の玉だ。そして、ナルトがその油に火遁で点火することで、巨大な火炎へと変貌する。
２人がヤマトに向けて放った火遁の連携術は、明らかに敵を殲滅する威力を持っており、相手がヤマトでなければ間違いなく焼き殺しているほどだ。
ヤマトも、氷也とナルトの連携能力の高さに驚愕すると同時に、様子見などしている場合ではないと判断し、使うつもりのなかった木遁忍術を行使する。
「！
（こ、この子達ッ――とんでもないな!!）」
――木遁秘術・樹海降誕――
氷也とナルトの広範囲、高威力の火遁に対し、ヤマトは樹海を作りだし応戦した。
木ノ葉隠れの里の演習場で繰り広げられる激しい攻防は、とてもではないが下忍昇格試験とは思えるものではない。
「す、凄ェ…いきなり森ができたってばよ」
「これは…木遁？　初代火影にしか扱えないと聞いてたが…まァどちらにしろ、さすがは上忍ってところか。ナルト、もう一段階上の術で攻めるぞ！」
ただ、氷也とナルトの実力を確かめる立場のヤマトは、さらに驚愕することとなる。
そもそも木とは燃えにくいもので、枝程度ならまだしもヤマトが操る木遁は巨木で物量もある。しかし、氷也とナルトの火遁連携術は全てではないが木遁を燃やしてしまう威力だ。その更に上の火遁連携術があるなど……ヤマトが冷や汗を流しながら色々と考えている間に、氷也が”影分身”を一体作り出し、ナルトに指示を出す。
「風チラの必要は一切ない。
遠慮なくド派手な風遁を頼むぜ…相棒」

「任せとけってばよ相棒！」
しかも今度は、ナルトが火遁ではなく風遁を行使する模様だ。
ヤマトが得た情報では、ナルトが二つの性質変化を扱えるなどなかった。ナルトは忍者学校（アカデミー）始まって以来の落ちこぼれと蔑まれ、分身の術すらまともにできずにいたのだ。
そのナルトが、氷也と出会ったことで見違えるほどに成長した。しかも短期間でだ。本来なら、習得するまでに数年単位の時間を要すると言われる性質変化の習得を数ヶ月単位で……驚くべき、目覚ましい成長だ。
そして何よりも驚くべきは、忍者学校始まって以来の落ちこぼれに、チャクラコントロールを一から叩き込み、性質変化まで習得させた氷也である。
素行に問題あり。去勢が必要。忍としての能力の高さ――計測不可。これが、ヤマトが得た氷也の情報だ。
ヤマトは今、〝伝説の三忍〟と謳われる自来也の息子が、父親に似て忍としての能力の高さだけではなく、指導能力にも長けていることを知ることとなった。
前日の自己紹介で、氷也とナルトの素行の悪さには納得し、教育が必要だと判断したヤマトだが、それと同時に忍としては教育するべき点が自身にあるのだろうかと思い至ることとなってしまった。
一つだけ言えることは……この２人を合格させないという選択肢はないということだけだ。
ナルトが強力な風遁忍術を…。
影分身の氷也が再び油を吐き出し、そして本体が強大な火遁を放つ。
――灼遁・五右衛門　燎原――
その威力は防ぎ止めようがなく、辺り一面を草木も残らぬ焼け野原にしてしまうほどの威力を持った灼熱の火遁である。
木遁ですら焼き尽くしてしまいそうな火遁を目にしたヤマトは、氷也とナルトの担当上忍の命を受ける際に、三代目火影から言われた言葉を思い出す。

――――心してかかれ

今改めて、その言葉の真意を身を持って知ってしまった。

氷也、うずまきナルト……下忍昇格。

ド根性（ドスケベ）波の国編
ド根性（ドスケベ）忍伝　第五章

木ノ葉隠れの里に、また新しい戦力(下忍)が加わり数週間が経過したある日のこと……木ノ葉屈指の実力者(上忍)2人がたまたま居合わせ軽く挨拶を交わす。

ただ、里内外で有名すぎる2人故に、この2人が顔を合わせている光景を目にした者は変な憶測を立ててしまう可能性がある。もっとも、この2人が顔を合わせるのは久しぶりのようだが…。

「テンゾウじゃないの」

「お久しぶりですね…カカシ先輩。

ちなみに、今は”ヤマト”と名乗ってますので、そこのところ気を付けてください」

この2人は顔見知り――それも、かなりの知己のようだ。”コピー忍者(はたけカカシ)”と”木遁(ヤマト)のテンゾウ”は、暗部時代に先輩と後輩の間柄だったようである。

もっとも、暗部時代に先輩と後輩の間柄だった2人だが、今はお互いに新米下忍を受け持つ担当上忍であり同僚。

「はいはい。

それにしても、まさかお前が担当上忍になるとはね。しかも――ナルトの担当上忍だなんて…」

「まあ、ナルトの担当上忍に選ばれるとしたら、僕かカカシ先輩の可能性が元々高かったですから」

ヤマトは第7班の担当上忍を務め、カカシは第9班の担当上忍を務めており、お互いにこれから里を担う若者達を育て上げなければならない責任ある立場だ。

「確かにな」

「それよりも、カカシ先輩はこれから任務じゃないんですか？担当上忍なのにまさか…遅刻したりしてませんよね？」

久しぶりに顔を合わせたヤマトとカカシだが、彼らが優先すべきは教え子達であり、己のことは二の次。久しぶりの再会の余韻に浸ってる暇などない。
「では、僕は行きます」
ヤマトはそれ以上、油を売ることなくカカシのもとから去って行く。
そんなヤマトの背中を眺めながら、カカシはため息を吐きながら言葉を漏らすのである。
「はあ…しばらく会わない間に、可愛げがなくなっちゃってまあ…。
(まあ、テンゾウは俺よりも大変ってことかな?
ナルトだけじゃなく、自来也様の息子まで担当してるんじゃ仕方ないか)」
しかし、カカシはこの数時間後にヤマトの大変さを身に染みて理解することになるだろう。

??

ほんの少し時間は進み…。
第7班の片割れであるうずまきナルトは現在、忍者学校(アカデミー)の同期の1人と修業していた。
師であり、親友でもある氷也以外とナルトが修業するのは珍しいことだが、ナルトにとってそれだけ大切な相手なのだろう。その相手……ナルトが共に修業するのは、同期の新米下忍(くノ一)の1人であり、木ノ葉の忍一族の名門――”日向一族”の日向ヒナタである。
もっとも、ナルトがその相手と修業するようになったのは氷也がきっかけであり、氷也のおかげだ。
「ナ、ナルトくん…す、凄い。
(は、速い。まるで…黄色い閃光が走ったみたいな…)」
「氷也に比べたらまだまだってばよ」
ナルトが氷也と親睦を深め、弟子となり、鍛え始められてからしばらく経った時のことなのだそうだが、氷也はナルトとの修業の際に、

常に誰かからの視線を感じていたのだそうだ。内容からして、その視線の主が誰なのか明白だと思うが、その視線の主とは日向ヒナタである。

日向ヒナタは、ナルトが氷也と出会い弟子入りするよりも前から、ナルトのことを一途に想い続け、ナルトが修業している姿を影から眺めていたのだそうだ。時には、一族の能力（血継限界）まで使い…。

ただ、ヒナタはあと一歩を踏み出すことができず、ナルトが修業する姿を眺めていることしかできずにいた。

彼女はこう思っていたそうだ……眺めているだけでも十分。これ以上を望むなど、自分如きには烏滸がましいと…。

「そうだね。　氷也くんは本当に凄い」

そんなもどかしい日々をヒナタが送り続けていたある日、彼女は短い人生のなかで生まれて初めて嫉妬を覚えたそうだ。彼女が嫉妬した相手はもちろん氷也である。

いつもは1人で修業しているはずのナルトの隣に、出会って間もないはずの氷也が居り、共に修業していたそうだ。

ヒナタはその光景を目の当たりにし、後悔もしたそうだ。もし、勇気を出してナルトに声をかけていたら、自分も一緒に修業できていたのではないだろうかと…。

だが、引っ込み思案なヒナタは、あと一歩を踏み出す勇気が出せずにいた。

そんな状況で、ヒナタに声をかけてきたのが氷也だったのである。ヒナタにとって、それはまさに青天の霹靂だっただろう。嫉妬していた相手から声をかけられるなど…。

しかも、氷也はすぐにヒナタがナルトに恋をしていることに気付いたのだそうだ。彼女にとって一生の不覚だそうだが、氷也からしたら気付かぬのは本人達のみで丸分かりである。

ともかく、それをきっかけにヒナタも修業に加わることとなり、氷也のおかげもあってヒナタはナルトと接点を築き、修業できるようになったというわけだ。

その結果、最初こそヒナタは修業に加わることにも消極的で、自身

を卑下するあまり場違いだとまで思っていたそうだが、教え上手な氷也に導かれ、彼女も次第に自信を持つことができるようになり、ナルトが好きすぎるあまりナルト限定で発症していた”あがり症”も改善され、今では問題なくナルトと2人きりで修業できるようにまで進歩したようである。

「けど、ナルトくんならいつか絶対に氷也くんを超えられると私は思う。そう信じてる」

「ヒナタ…へへ、ヒナタにそう言われっと、本当に超えられる気がするってばよ！

ありがとな、ヒナタ」

そして、ヒナタのナルトへの想いはどんどん増していく。昨日よりも、ヒナタはナルトのことが大好きだ。

「ナ、ナルトくん…」

「ヒナタ？　顔が赤いけど大丈夫か？　もしかして熱でも…」

もっとも、ナルトはヒナタの想いにはまったく気付いていない。これほど分かりやすい少女はいないだろうに……鈍感にも程がある。しかも、ナルトはヒナタに対しての距離感が無意識的に近いこともあって質が悪い。

「ひゃ！」

ヒナタを心配し、熱がないか確かめる為とはいえ、普通は額に額を当てて熱を確かめたりはしないだろう。

うずまきナルトは生粋の天然無自覚の持ち主のようだ。

「はうぅぅ…」

「ヒ、ヒナタ!?

ちょッ、え!?　ど、どうしたんだってばよォ!?」

修業から一転。

ナルトとヒナタは甘酸っぱい青春を送っている。

「ねェ…あれってわざと？　狙って？　それとも本当に無意識的に？」
「無意識的だな。
ナルトはヒナタに対してとにかく距離が近い。無意識だが、本能が求めてんだろうな。それに多分…アイツらメチャクチャ相性イイぞ。互いにフェロモン垂れ流しまくってる」
そんな甘酸っぱい青春を送るナルトとヒナタを隠れて観察する美男子と美少女がいた。
黒い忍装束に雪模様の入った白い羽織を羽織った氷也と、裾が短くスカート風になった着物を着せられたテンテンである。ちなみに、今回はエロい花魁をイメージしているらしい。甘酸っぱさとは無縁の2人である。
「ヒナタも大変ね。
まあ、相思相愛？　みたいだから安心ね」
「ナルトにはヒナタがお似合いだ。というより、それ以外は認めん」
どうやら、氷也とテンテンはナルトとヒナタの恋路を見守り、応援しているようだ。
師としてだけではなく、親友としても氷也はナルトの幸せを願っている。だからこそ、ナルトを一途に想い続けているヒナタに、ナルトを支えてほしいのだろう。
ナルトを支え続けることはきっと氷也ですらできない。ヒナタにしかできないことなのだ。
適材適所。男にできて女にはできず、男にできず女にはできる。そういうことだ。
ただ、そんな2人を眺めながらテンテンは2人を羨ましく思っているようだ。己達はナルトとヒナタのように対等な存在ではなく、一生かかっても対等になれず、支えになれないと思っているのかもしれない。
「ね、ねェ…なら、氷也には誰がお似合いなの？」
だからこそ、少し弱気になり、このように聞いてしまうのだろう。
「ふ…エロくて美しい女だ」

もっとも、氷也の答えは決まっている。一生変わることはないのだろう。氷也のドスケベは一生治ることはないのだ。
「氷也…わ、私は…エロい？」
その答えに、テンテンは元気を取り戻し、氷也へと迫る。
それはさながら、狙った獲物（男）を絶対に逃がさない狩人――女豹のようだ。
だが悲しいかな…。
テンテンが氷也の前で少しでも行動を起こそうとすると、氷也のラッキースケベトリガーが発動してしまう。
「ひゃ!?」
一歩ずつ女豹のように迫るテンテンは落ち葉で手が滑り、顔から氷也の大切な部分へと突っ込んでしまうのである。そして、氷也のラッキースケベトリガーによる逆ラッキースケベ誘発現象は日に日に進化しており、テンテンは氷也の忍装束の下をパンツごと脱がし、氷也の大切な部分を露にさせ、露になったそれを頬にすり寄せた状態になってしまう。
今日もまた、神がかっている。
「あ…あ…
（う、う…そ…初めて…生で…こ、この硬くて大きいのが氷也の…はわわわ…）」
「生暖かいがアイスキャンディでも舐めるつもりで…遠慮せずどうぞ」
とはいえ、氷也とテンテンはここから先になかなか進めない焦れったい２人だ。
「君達…公然わいせつ罪で牢屋にぶち込むよ」
――木遁・四柱牢の術――
この２人も、何だかんだであと一歩を踏み出せずにいる。この２人の場合はヒナタとは違い、踏み出す気満々な気がしないでもないが…。
「チッ…ヤマト先生、また邪魔を」
「担当上忍に舌打ちしない。

まったく…これから至急、増援任務に向かう。その無駄にデカい有害物質をしまって、さっさと行くよ」
お楽しみはまたの機会…。

??

深い霧の中、木ノ葉隠れの里の忍が1人……絶体絶命の窮地に立たされていた。
水の牢に捕らえられ身動きが取れず、部下達は忍との戦闘経験がない新米下忍で明らかに実力に不釣り合いな任務だ。自ら殺してくださいと言っているようなものだろう。
「！　増援か…ふん、片手が封じられているとはいえ、手裏剣などオレに通用しな――ッ、こ、これは”影手裏剣”！　…だが、甘いな…ッ!?」
ただ、部下達が敵の殺気に怯え、何もできない危機的状況のなかで、一筋の光が差し込んだ。
影手裏剣の術とは、手裏剣を二枚重ねて投げ、敵の死角……つまりは手裏剣による影から二枚目の手裏剣で攻撃する手裏剣術だ。その二枚目の手裏剣を敵は飛び上がり躱したが、躱された手裏剣が背後で白煙をあげて金髪碧眼の少年へと姿を変える。
「なん…だと!?」
二枚目の手裏剣は変化の術で化けていたものであり、空中で身動きが取れない状態の敵へと向けて金髪碧眼の少年が”風遁チャクラ”を纏わせることで斬れ味を上げたクナイを投擲した。
これを躱すには、体の一部を触れさせておかなければ維持できない水牢から腕を放すしかないだろう。そして、躱さなければ風遁チャクラを纏ったクナイは体を貫通し、重傷は免れない。
「くッ！」
当然、体に風穴を開けたくない敵は水牢から腕を放しクナイを躱す選択をした。
「よっしゃあァァァ！
あとは任せたってばよ氷也!!」

「よくやったナルト。
それにしても…だらしないですよカカシ先輩」
「テ、テンゾウ!?」
すると、クナイを躱わされるのも作戦の内だったのか、このタイミングでヤマトが姿を現し、水牢から解放されたカカシをヤマトが抱え、ナルトと共にその場から退散する。危機的状況から救出されたカカシが急展開に驚いているのもお構い無しに、次の手が放たれる。
「作戦通り…よくやった相棒！
ド派手に行くぜ！」
──火遁・蝦蟇油火龍炎弾──
同じく新米下忍でも、彼らならこの任務は見合っている。だからこそ、彼ら──第7班が増援にやって来た。
ここに、木ノ葉の狂気の再来が参上。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第六章

目の前で繰り広げられる激しすぎる攻防を、瞳を紅く染め……うちは一族の血継限界”写輪眼”を発動した状態で観察する黒髪の少年――うちはサスケ。

写輪眼は動体視力に秀でた瞳術。ただ、動体視力に秀でた写輪眼ですら、その激しすぎる攻防を完全に捉えることができず、うちはサスケは奥歯を噛みしめ、血が滲み出るほどに手を強く握り締め、己の無力さを痛感させられてしまっていた。

「氷也…ッ…

（これが…氷也の本気なのか!?）」

水遁で打ち消せない程の威力を持った火遁を放ち、自身の担当上忍であるはたけカカシを捕らえた”鬼人”桃地再不斬を相手に渡り合う身体能力の高さ。

同じ新米下忍でも、氷也とうちはサスケの実力には天と地の差があることが証明されてしまった。

「とんでもない子だな。

（しかも…サスケが写輪眼を開眼してしまったか…。状況的にあまり良い傾向ではないな）」

里内外で有名なカカシですら、氷也の下忍離れした実力の高さに感嘆の声を漏らしている。その一方で、サスケが氷也の戦闘を目の当たりにしたことをきっかけに写輪眼を開眼してしまったことを不安視していた。

サスケは氷也という存在が決して乗り越えることのできない壁のようにすら感じ、無力感に苛まれ、失意に暮れた結果、脳内に吹き出した特殊なチャクラが視神経に反応し……写輪眼を開眼したのである。

負の感情による開眼。サスケの精神は今、非常に不安定な状態だろう。

うちは一族の代名詞であり、うちは一族がエリート忍者一族として

恐れられた所以でもある写輪眼。サスケはその写輪眼をようやく開眼できたわけだが、あまり喜ばしい状況ではない。
「くそッ…
(どうやったら…オレは強くなれる！
アイツに復讐する為に…オレは強くならないといけないんだ!!)」
サスケは、写輪眼を開眼したことで強い復讐心に駆られ、力を追い求めるあまり周りが見えない状態に陥っている。
「チィ！　ガキがッ…
(な、何なんだこのガキはッ！)
水遁・大ば――ッ!?」
「遅い…」
――水遁・荒海(あるみ)――
一方で、サスケの焦る気持ちなど知らず、それどころか興味も示さないだろう氷也は、水面に手を突いてチャクラを流し込み、自身の意のままに水を操るのである。
氷也に支配された水は激しく荒れ狂い、大津波となり鬼人を呑み込む。
圧倒的だ。
その圧倒的な光景に、サスケの表情はさらに険しくなってしまう。滲み出る激しい怒りは、弱い己と圧倒的な強さを持つ氷也に向けて放たれている。
「ぐはッ!!」
鬼人の殺気に怯え、サスケは何一つできなかった。だが、氷也は違う。鬼人の殺気に怯えることもなく圧倒すらしている。大津波に呑み込まれ押し流された鬼人は大木へと激突すると悶絶しながら水を吐き出し咳き込んでしまっていた。
今のサスケでは、ここまでの圧倒的な光景を決して再現することなどできない。
「さて…トドメと逝こうか」
――風遁・風籟――
サスケでは、間違いなく瞬殺されていたはずだ。

だが、クナイに高密度な風遁チャクラを纏わせ殺傷能力を高めた氷也は、鬼人にトドメを刺すつもりだ。殺す以外の選択肢はなく、氷也には戸惑いが一切見られない。
「はあ…はあ…まさか…生温い木ノ葉に…テメエのようなガキがいるとはな…」
サスケは考える。
己と氷也はいったい何が違うのか…。
どうすれば、氷也のように強くなれるのか…。
「！
（震えて…いる？　オレは恐れているのか？
敵だけじゃなく、氷也の殺気にも…。オレは…復讐することにも…本当は怯えているのか。覚悟が足りないのか…）」
ゆっくりとだが、迷いなど一切なく、鬼人の命を奪う為に歩みを進める氷也に、己の覚悟の足りなさを実感したサスケは、かってある人物から言われたことを思い出す。
――――このオレを殺したくば恨め！憎め！
「憎しみ…」
そして、サスケは己の忍道を見つける。
目の前に広がる道は暗闇。その暗闇を照らすのは紅く染まりし瞳のみ。
”憎しみ”が、うちはサスケの支えであり、最大の武器だ。

??

”鬼人”桃地再不斬との死闘から数時間後。
「最新作は”イチャイチャソレイス”…決まりだな。
（未亡人…世紀の大発見をした気分だ。　素晴らしい）」
死闘を繰り広げた当の本人――氷也の今の様子を見ると、あの死闘は幻術だったのではないかと思わされてしまう。
氷也は現在、鬼人の魔の手から救い出した波の国の橋職人の自宅にて、美しいバツイチ未亡人に夢中になっている。

「食事の支度まで手伝ってもらってごめんなさいね。
それにしても、手際がいいわね。ふふ、きっと素敵な旦那様になりそう」
「いえいえこれくらい。
まあ、結婚についてはまだよく分かりませんけど…ツナミさんみたいな美しい女性だったら幸せでしょうね」
今回、第7班が与えられた任務は、Bランクの護衛、討伐任務だ。
「まァ！　本気にしちゃうわよ？」
本来、新米の下忍にBランク以上の高難度任務を与えるなどほぼあり得ない。
ただ、この任務に同じく新米下忍の班が関わってしまっていたこともあり、三代目火影・猿飛ヒルゼンは第7班に任せることにしたのである。
それでも、新米下忍に任せるのは異例だろうが…。恐らく、第7班の担当上忍のヤマトと、第9班の担当上忍のはたけカカシが暗部時代に組んでいたこともあり、連携が取りやすいと判断したのだろう。ヤマトもカカシも里屈指の上忍で、どのような事態にも対応できる力を持っている。その上、第7班の新米下忍の2人は戦力としても申し分なしどころか、この4人が揃えばお釣りがくる。そう判断したのだ。
残りの2人は、橋の建設の方にのみ集中してくれてればいい。
第9班は元々、波の国の橋建設のお手伝い任務というDランクの任務を与えられていた。依頼主の橋職人が第9班を現地へと案内し、数週間かけて橋を完成させるという内容のものである。
波の国は忍の隠れ里すらなく、国を治める大名ですらお金を待っていない貧しい国なのだそうだ。そこで、現状を打破するべく、波の国は橋の建設に乗り出たのである。
波の国は周囲を海に囲まれた島国だ。橋が完成し陸路が開通すれば、波の国は物資と人の交流を得ることができ、経済も回復する。この橋はまさしく、波の国の希望の架け橋になるだろう。
これは、波の国にとって国家事業のようなものだ。
とはいえ、忍の隠れ里もない貧しい波の国は、圧倒的な人手不足。

そこで、忍の手まで借りることにしたのである。
しかし、波の国には他にも……いや、何よりも大きな問題を抱えていた。
大富豪ガトー。
1年程前に、財力と暴力を盾に波の国に入り込み、島の全ての海上交通・運搬を牛耳った男……”海運会社ガトーカンパニー”を運営する世界有数の大金持ち。
ガトーは表向きこそ世界有数の大金持ちだが、裏では麻薬や武器その他もろもろの禁制品の密売、果ては企業や国の乗っ取りといったあくどい商売を生業とする男。
ガトーは、島国である波の国にとっての交通の要である海上のルートを独占することで、国の全ての富を独占。
経済的に波の国を乗っ取ってしまったのだそうだ。
だからこそ、そのガトーに対抗するべく、波の国の者達は橋の建設に乗り出したのである。
海上が駄目なら陸路。波の国にとって、橋を完成させることが如何に大切なのかは明白。国家を建て直す為の唯一の希望だ。
だが、波の国の完全支配を目論むガトーにとって、橋の完成は断固阻止すべき事態。
しかし、表立って暴力沙汰を起こせば大問題になる。一応、表向きは真っ当な海運会社なのだ。
そこで、ガトーは正規の忍ではなく、抜け忍を秘密裏に雇い、橋職人達の始末に乗り出したのである。
そしてその情報を得た波の国の大名の1人が、三代目火影へと書面を送り、その結果……第7班が抜擢された。
これが、第9班が波の国へと向かう道中で”鬼人”桃地再不斬に襲撃され、第7班が増援に駆けつけ、氷也が鬼人と死闘を繰り広げることになった事の顛末である。
「氷也くん。
父から聞いたわ。あなた達が増援で派遣されなければ殺されてたって…ありがとう、父を助けてくれて」

「いえ…これが俺達、忍の仕事ですから」
もっとも、世界に名を轟かせる鬼人が雇われていたのは、三代目にとっても想定外の事態で、少しでも駆けつけるのが遅ければ、第９班もろとも始末されていた。
波の国の良心的な大名が希望を途絶えさせない為に、なけなしの金を叩きＢランク任務の依頼をしてきたが、これは間違いなくＡランク任務。
本来なら、ここで任務は中断するべきところ。
「まあ、色々と心配でしょうが、安心してください。ツナミさん…あなた方は俺達が必ず守り抜きます」
「！　ふふ、頼りにしてるわ…木ノ葉の素敵な忍さん」
続行するのは、大国の隠れ里として抜け忍を雇う危険な輩を野放しにしておくわけにはいかないからなのだろう。
そして、波の国に対する未来への投資だ。
「氷也くん、味見してくれる？　あーん」
現場の忍の１人である氷也からしたら、美しい未亡人と仲良くできる機会を与えてもらえたのだから感謝の気持ちが強いだろう。
味見をしてもらおうと身を寄せてくるツナミ。彼女から放たれる魅惑的な未亡人の香りと強調された豊満な胸の谷間……氷也は、今度こそ鬼人を討伐し、ガトーカンパニーを滅ぼすことを心に誓うのである。
エロい美女を悲しませる輩を氷也は決して赦しはしない。

??

その日の夜遅く……場所は変わり…。
「あのクソガキ…次は必ず殺す」
増援に駆けつけた氷也と死闘を繰り広げるも、危なく殺されかける寸前だった”鬼人”桃地再不斬だが、彼もまた仲間のおかげで窮地を脱していた。
もっとも、再不斬の場合はその仲間が再不斬を追う忍として現れた

こともあり、仮死状態にされてしまうという、かなり荒っぽい手段である。
高密度な風遁チャクラを纏ったクナイでトドメを刺されそうになった再不斬を、彼の仲間は首の仮死のツボを千本で突くことで仮死状態にし、どうにかその場を乗り切ったようだ。
ただ、第7班の担当上忍で元暗部の”木遁のテンゾウ”ことヤマトは、去り際の行動でその者が再不斬の仲間であることに気付いており、再び襲撃があることを理解しているだろう。
もちろん、再不斬側も気付かれていることは百も承知。
そして、再不斬は先の死闘を経て、氷也を絶対に殺すべき敵に認定している。はたけカカシよりも厄介な敵として認識されているはずだ。
鬼人に強敵認定されるとは……恐ろしい下忍である。
「やはり…あの子は女性ではなく男性なのですね」
「あ？　んなもん、見ただけで分かんだろ…が、どこかお前に似た雰囲気を持ってやがったな。
もしかしたら、お前と同じ雪一族の血を引いてる可能性もあるかもしれねェ。もしそうなら、白…本気を出せ」
それにしても、再不斬はたった一度の戦闘で、氷也が美少女ではなく美少年であることによく気付けたものである。大抵の者は間違えるのだが…。
再不斬が見分けられたのは、恐らく彼の仲間が氷也と同じ雪一族の血を引く人物だったからなのだろう。雪一族の血を引く者達は、容姿がかなり整っているどころか、男女揃って儚く美しすぎるのが特徴なのである。
氷也の場合、儚く美しく見えるのは容姿のみで、中身は超問題児のドスケベ。見た目に騙されてはいけない。
「はい。再不斬さんがそう仰るなら…全力で行きます」
再不斬にとって見た目など、まったくもってどうでもいいことなのだろう。
氷也を殺すことにのみ集中している。

今度の戦いは、より厳しいものとなるはずだ。

一方その頃、橋職人の自宅に滞在する氷也はというと…。

「ひょ、氷也くん…ご、ごめんね、こんなおばさんの体なんて見せちゃって」

「とんでもない。

ツナミさん、あなたはとても美しい」

お風呂を借りようと向かった先にて、お風呂上がりでタオルを巻いただけの状態の美しい未亡人ツナミとラッキースケベタイムのようだ。

お風呂上がり特有の艶っぽさ。体に巻いたタオルから見え隠れする白く美しい肌。強調された谷間。見え隠れする整えられた秘密の花園を覆う野原。

どれもが美しくエロい。

氷也は今、ツナミのタオルになりたいとすら思っているはずだ。

「もう…氷也くんは本当におませさんね。

けど、ありがとう。嬉しいわ。

あ、氷也くんもお風呂に入るのよね？　ゆっくりと疲れを癒――あ…」

そして、未亡人のエロさに魅せられた氷也は、ラッキースケベトリガーを発動する。

はらり……巻いていただけのタオルが床に落ち、露になる未亡人の全貌。

お風呂上がりの”ハラリズム”。

波の国の任務（エロ）は氷也のやる気を熱く駆り立てる。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第七章

副業のはずでありながらも、官能小説家として世界に名を轟かせる自来也は現在、とある人物から”口寄せの術”を介して送り届けられた原稿用紙に目を通していた。

達筆な字で原稿用紙に書き込まれたエロの数々に、自来也は鼻の下を伸ばし、鼻息も荒く興奮気味である。

「さすがは儂の息子と喜ぶべきか…。

絵の才能だけではなく、文才まであるとは…氷也、まったく大した奴だ」

世界的に有名な官能小説家である自来也にここまで言わせるのは、自来也の息子しかいない。

心に傷を負った美しい未亡人と、その美しい未亡人と出会ったとある男による官能小説――イチャイチャソレイス・ワンナイト。

とある理由で、美しい未亡人の実家に滞在することとなった男と、美しい未亡人が繰り広げるエッチなトラブル（寄宿ある）の数々。風呂上がりの未亡人と脱衣所での遭遇から、巻いていたバスタオルが落ちたことで美しい裸体が露になるハラリズム。トイレの鍵がかけ忘れられていたことで、未亡人のトイレ現場に遭遇するラッキースケベ・トイレ。未亡人の父親や息子に隠れて少しずつ近づいていく2人の距離。そして、心に傷を負った美しい未亡人は男に心を癒され、徐々に心を開いていき、ある日……未亡人の方から求める一夜限りの激しい交わり。

物語の締めくくりは、その一夜限りの交わりをきっかけに、未亡人が自身も1人の女であること、女であることの喜びを思い出したことで悲しい過去を乗り越え、彼女の止まっていた時が再び動き始め、女としての新たな人生が始まるというものだ。

「まだ表現の甘さは所々にあるが、未亡人のエロさと美しさが実に際立っておる。挿絵も…ハッ！　ま、まさかこれは氷也の実体験か!?

あ、あやつッ――任務で美しい未亡人と出会ってイイ思いしておるん

じゃないだろうのォ!?　うらやまけしからん!!」
　ただ、この官能小説がフィクションなのか、それともノンフィクションなのか……それはこれを書き上げた本人しか知らない。

　一方、自来也が官能小説を読み終わった頃、その官能小説を書き上げた本人はというと…。
「ツナミさん？　どうかしましたか？」
　滞在先から少し離れた森にて、護衛任務の空き時間に氷也は修業していた。
　その氷也のもとに、滞在先の美しい未亡人であるツナミが夕食の支度ができたことを告げに現れ…。
「ッ……。
（す、凄い…これが忍の肉体…逞しくて…何だかエロい。目が離せない。ああ…体が火照って…だ、ダメよ私ッ！　理性を保たないと！　ああでもッ……疼いてきちゃう!!）」
　修業後の氷也の肉体美を前に、美しい未亡人は火を点けられる寸前……イチャイチャソレイス・ワンナイトへと突入しそうな状況と化している。
　絶世の美貌を持つ氷也だが、彼は忍。しかも、下忍最強と称しても過言ではない逸材だ。
　そんな逸材の肉体は無駄なく筋肉がついており、一見華奢に見えるが脱ぐと凄いのである。修業後の汗が光輝いてすら見え、逞しさにより一層拍車をかけており、未亡人となってしまったことで異性としばらく触れ合っていないツナミにとっては、その肉体美は媚薬の如く危険な代物だろう。
　何より、ここまでの肉体美を目にするのが初めてなのか、ツナミは生唾を飲み込んですらいる。
「ツナミさん…まじまじと見つめられると、さすがに恥ずかしいんで

すが…」
「ッ……。
(や、やだ…かわいいィ)」
そして、ツナミは激しく胸を高鳴らせてしまう。恥ずかしがる氷也に追い討ちをかけられてしまった。どうやら、氷也の恥じらいが火に油を注いでしまったらしい。
その言動、素振りが理性を失わせてしまったのか、ツナミは無意識のうちに氷也へと近寄り、剥き出しになった氷也の二の腕、胸板へと順に触れた後にすれすれの距離まで詰め寄り、氷也の汗の匂いすら逃すまいと深く吸い込んだ。
汗の匂いを不快に感じることもなく、ツナミは……雌としての本能を呼び起こされてしまう。
彼女は今、発情している。
氷也が任務で滞在するようになり数日が経過したが、ツナミにとって氷也という存在は、年下の少年ではなく立派な1人の男だった。
強く逞しく美しい。頼りになり、主夫としての腕前も相当なもので、女にとって理想的すぎる男。
こうなるのは、必然だったのかもしれない。
「氷也くん…
(欲しい…今すぐ…)」
ツナミは氷也の目の前で地に膝を突き、彼のズボンを脱がせようと手を伸ばし、ついに雄と雌が交わる時が…。

??

結果として、氷也とツナミが一線を越えてワンナイトすることはなかった。
そもそも、ツナミは夕食の支度ができたことを告げる為に、氷也のもとにやって来たのだ。ツナミが戻ってくるのが遅いと心配する家族と、それを怪しんだヤマトがやって来るのはお決まりの展開だろう。

「氷也…勝負しろ」
「断る」
第7班が任務で波の国を訪れもうすぐ1週間。氷也は今現在、不機嫌かと思いきや、かつてないほどの興奮状態にある。
あと少し、もう少しでイチャイチャソレイス・ワンナイトが完成するところだった。普通なら、それを邪魔されてしまい不機嫌になっているはず。
しかし、それすらも氷也にとっては、エロをより向上させる為の刺激的なスパイスだったのである。
対してツナミは、悶々とした状態が続いているようで、しかも正気を取り戻したことで羞恥心に駆られ、氷也を避けているようだ。ただ、避けつつも氷也を強く求めている。羞恥心に駆られ恥じらいながらも欲求に抗えなくなりつつある乙女(発情)状態のツナミの様子は氷也を興奮させるばかりなのだ。
「サスケェ、氷也がお前と勝負するわけないってばよ」
「…ウスラトンカチは黙ってやがれ」
そして、氷也は物語の締めくくりへと入ろうとしている。
乙女と化した未亡人をよりエロくする為の最終段階――焦らし作戦だ。
ツナミは今、羞じらいと欲求の狭間で葛藤している。だから、氷也はツナミの欲求が膨れ上がり、爆発するように仕向けるつもりでいるのだ。
その為に、氷也は勝負を挑んできたうちはサスケすらも利用するのである。
「うちは…お前がもし、ナルトに勝てたなら考えなくもない」
「ふ、ふざけんじゃねェ！
俺がドベと勝負して負けるとでも思ってんのか!?」
チラチラと見つめてくるツナミに気付かぬフリをしながら、氷也はうちはサスケを煽り、エロの為に話を進めていく。
「まあ、俺の一番弟子にはお前じゃあ勝てんよ」
「ヘッ、今の俺を忍者学校(アカデミー)の時と同じだと思ってたら大火傷するって

ばよ!!」
　ツナミの視線を敢えて無視する焦らし作戦は効果覿面のようで、彼女の視線は、私を見てと氷也に強く呼びかけている。
「ドベが調子に乗ってんじゃねェよ!!」
「ナルトがドベなのはもう過去の話だ。
　信じられないなら、その眼で確かめて見ることだな…ついてこい」
　外に出る氷也を物欲しそうな瞳で見ていることしかできないツナミと、そんなツナミの様子を背中越しでも理解しているのか、氷也は口角を上げて上機嫌である。
　一回り以上も年上の未亡人すら掌の上で操り、エロくしてしまう……まったく、大した奴だ。

　うちはサスケに恋する乙女――春野サクラにとって、それは悪夢以外の何物でもない。
「う…うそ…サスケくんがナルトなんかに…負けるなんて…そ、そんな…。
（あ！　も、もしかして幻術!?　そ、そうに違いないわ！
　これは恐らく…カカシ先生が私にかけた幻術”魔幻・奈落見の術”よ！なら…”解!!”）」
　彼女の視線の先で、無様にも地べたに倒れ伏し敗者と化したうちはサスケと、敗者を見下すうずまきナルト。
　恋い焦がれ、憧れ続けてきたうちはサスケが、これまで邪険にしていたうずまきナルトに負けたという現実を受け入れきれない春野サクラは、この現実が相手の心の奥底にある一番見たくないものを映し出し、相手に精神的大ダメージを与える幻術であると思い込み、”幻術返し”を試みる。
　ただ悲しいことに、これは幻術ではなく現実。
「！　幻術じゃ…ない…」

春野サクラは、これが現実であったことに絶望する。
うずまきナルトは忍者学校始まって以来の落ちこぼれだった。これは偽りない事実だ。
だが、ナルトはもう……万年ドベの落ちこぼれではない。
何があろうとも夢を絶対に諦めず、自分の言葉を曲げず、前に進み続けてきた落ちこぼれの少年は開花し、眩く輝いている。その光はこれからますます強まっていくだろう。
「くッ…う…
(こ、これが…あのナルト…だと!?)」
うちはサスケ以上の火遁忍術。うちは一族の代名詞でもある動体視力に優れた”写輪眼”ですら捉えきれない瞬身の術。
全てに於いて、うずまきナルトはうちはサスケを凌駕していた。
春野サクラにとっても、うちはサスケにとっても、この日の出来事は一生忘れることはできないはずだ。
しかし、絶望する2人とは対照的に、ナルトの師匠である氷也は誇らしげな表情を浮かべている。自身とは違う相手と戦っている姿を目にし、ナルトが思っている以上に成長していたことを知ることができたのもあるだろう。
「ふッ…さすがは俺の一番弟子だ。
ナルトが”黄色い閃光”の再来って言われる日も近いかもしれないな」
新しい伝説が今この瞬間から始まるのである。
そして、その瞬間を目撃していたのは氷也達だけではない。
「ミナト先生…
(こ、ここまで…成長していたとは。今のサスケじゃ、勝てるはずがない)」
うちはサスケと春野サクラの担当上忍であるはたけカカシは、火影の意志が脈々と受け継がれていることを目の当たりにしていた。
はたけカカシの瞳には、かつての恩師の姿がナルトに重なって見えていた。しかもそれだけではない。ナルトを鍛え上げた氷也に、カカシの師匠を育て上げた大師匠(自来也)の姿まで重なって見えたのである。

「テンゾウ…お前が羨ましいよ」
ただ、はたけカカシは懐かしさなどを感じると同時に、悔しさと、後輩であるヤマトに対する羨ましさを感じているようだ。
本心では、今は亡き恩師に代わって、次代の火影を自身の手で育て上げたかったはずだ。その役目が自身ではなく、暗部時代の後輩に委ねられたことを彼は羨ましがっている。
とはいえ、ナルトをここまで育て上げることができるかと聞かれたら、はたけカカシでも不可能だったかもしれない。氷也だからこそ、ナルトをここまで育て上げることができたのだ。氷也だからこそ、ナルトを黄色い閃光の再来と言わしめるまでに育て上げることができるのかもしれない。
ナルトを育て上げたのは担当上忍のヤマトでもなく氷也なのだ。
「俺に勝てないようじゃ、氷也に勝てるはずないってばよ。氷也はもっと強ェ」
そして、ナルト自身の努力の賜物だろう。
氷也に出会う前、ナルトはうちはサスケを一方的にライバル視していた。だが、今はもううちはサスケをライバル視などしていない。越えるべき壁でもない。
「火影になるには、氷也を絶対に超えなきゃいけねェんだ。こんなところで立ち止まってるわけにはいかねェ」
「ドベが調子に乗ってんじゃねェよ！　うおォォォ!!」
プライドの高いうちはサスケにとって、これまで見下していたナルトに負けたことは、かつてないほどの屈辱のはずだ。
それでも、ナルトとうちはサスケの間に大きな差があるのは事実だ。氷也に弟子入りしたことで成長し、下忍になり更に成長した。
「俺はもう…ドベのうずまきナルトじゃねェ。氷也の一番弟子で未来の火影…第7班のうずまきナルトだってばよ！」
――金剛封鎖・雷縛――
背中から伸びるチャクラの鎖がうちはサスケを雁字搦めにし、雷遁チャクラで麻痺させ完全に動きを封じる。
開花した才能は父親譲りでもあり、母親譲り。

ナルトもまた、氷也と同様に両親から多くの才能を受け継いでいる。

??

場所は移り…。

「氷…也…くん…ん…」

氷也達第7班が滞在する家の一室……ツナミの部屋から漏れる甘い声。

一族の特殊な力――血継限界”氷遁”によって作り出した氷遁影分身の氷也は、氷也を想い1人情事にふけるツナミの様子を、両面鏡のような特性を持つ分身を利用してリアルタイムで本体宛に送っていた。

今頃、本体の氷也は歓喜にうち震えているはずだ。

物語はついに佳境を迎えようとしている。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第八章

先の戦いから1週間。
鬼人・桃地再不斬とその仲間は予想通りに再びタズナを狙い襲撃してきた。
しかし、戦いの舞台は建設中の橋……第7班の領域だ。担当上忍のヤマトが何もせずに待ち構えているはずがなく、鬼人達は橋に降り立ったと同時に罠にかかり、捕らえられたも当然だった。
そもそも、鬼人に勝ち目など最初からなかったのである。
鬼人が得意とする”霧隠れの術”も、感知タイプでもある氷也と、敵の居場所を察知する方法を持ったヤマトには無意味なもの。
「お、霧が晴れた…ヤマト先生の方は終わったか」
「さすがヤマト先生だってばよ！」
鬼人はヤマトに捕らえられた。
残すは、霧隠れの里の追い忍部隊の仮面を装着した鬼人の仲間だと思われる人物のみ。
「こっちもさっさと終わらせるとしよう」
第7班が与えられた任務を失敗することはない。どのような状況に陥ろうとも必ず乗り切り、勝つ。
「この橋に手を出したのがお前達の運の尽きだ」
波の国にとって、建設中のこの橋は希望の架け橋……必ず完成させなければならない。
橋建設のリーダーであるタズナにとって、たとえ命に替えても成さなければならないことだ。
波の国で暮らす民の為。まだ幼い孫とその孫の未来の為。そして……愛しい娘の為。
橋の完成を阻止する為に命を狙われようとも、タズナは諦めるわけにはいかない。
全ては大切な者の幸せの為なのだ。
だが、タズナは決して死なない。

「死なせはしない。俺が守り抜く。何一つ不安に思うことはない…だから安心しろ、お義父さん」
――灼遁・赤龍の術――
何故なら、タズナには未来の火影と、火影を超える忍がついているのだから…。
その忍達がタズナを守り抜く。どんな敵であろうとも……たとえ、敵が氷の術を扱う忍であろうとも負けることはない。太陽の化身の如く赤く燃え上がる炎龍を操り、氷の鏡を溶かし、破壊していく。
「くッ…熱ッ
(僕の氷遁を溶かすほどの…何て凄まじい威力だ!)」
自身の術に絶対的な自信を持っていた敵は、氷を溶かすほどの威力を持つ炎に戦慄している。
そして、タズナを守る忍は1人だけではない。
「さァ、終焉だ…相棒」
「!
(は、速ッ、防御をッ!)」
眩く輝く黄色い閃光が敵の背後に現れ、その掌の中にある小さな台風のような塊をぶつけてきた。
「橋は壊させないってばよ!!」
――螺旋丸――
「がッ!」
氷の壁を背後に瞬時に作り出し防御しようとするも、炎龍の熱によって本来の硬さを維持できず、圧縮されたチャクラの塊を受けた氷の壁は脆く崩れ去り、敵はその術を食らい螺旋状の傷を受けながら吹き飛ばされてしまう。
「ごふッ…
(負け…た…再不斬さん…僕は…この子達に…)」
吹き飛ばされ、地面を転がり倒れ伏した敵に、もはや立つ力は残ってなどいない。
対して、倒れ伏した敵の前に降り立った白髪の忍と金髪の忍はまだ戦える余力を持っている。

「俺達の勝ちだ」
波の国の未来は第７班の３人によって守られた。
この戦いは後に、波の国の伝説として語り継がれるだろう。
そして、氷晶の紋様が至る箇所に印され完成したこの橋は、”なると大橋”と名付けられるのである。

『拝啓　あれから１ヶ月が経過しましたが、氷也くんはいかがお過ごしでしょうか？
会えない日が続くにつれて、まるで降り積もる雪のように、あなたを恋い慕い、求める気持ちは激しく、深くなっていくばかりです。
抑えきれない本能……私は毎晩あなたを想い、身体の疼きを自ら抑え込むしかありません。あなたに触れてほしい。
ああ…あなたに会いたい。
私はいつも、あなたを橋の袂でお待ちしております。
ツナミより』
届いた官能的な恋文を握りしめ、本能が熱く昂るのを感じ取りながら、氷也は１ヶ月前を思い返す。
１ヶ月前、氷也達第７班は波の国の建設中の橋で、鬼人・桃地再不斬とその仲間……白という名の雪一族の少年と死闘を繰り広げた。
ヤマトは鬼人・再不斬と戦い、”コピー忍者”の異名を他国に轟かせるはたけカカシですら一時は劣勢に追い込まれた鬼人を相手に、ヤマトは見事に勝利を納めた。
そして、氷也とナルトは雪一族の氷遁使いである白を相手に終始、圧倒してみせた。並の火遁使いでは対処できないほどの氷遁使いだったが、蝦蟇油や風遁で火遁の威力を底上げすることができる氷也とナルトは白にとって相性最悪の相手。２人が負けるはずなどなかった。
鬼人と白との戦いの決着後、黒幕であるガトーが大勢の部下達を引

き連れ、氷也達第7班と再不斬もろとも始末しようと現れたが、寄せ集めの集団では勝てるはずもなく、こうなるであろうことを予測していた再不斬自らの手でガトーは葬り去られたのである。
ただ、ヤマトとの戦いで満身創痍だった再不斬は己の命と引き替えに…。
再不斬という存在が生きる全てだった白は再不斬の死後、自ら氷也に殺してほしいと嘆願。氷也は白の願いを聞き入れ、その手で全てに終止符を打った。
こうして、ガトーという害虫が去り平穏を手に入れた波の国は、襲撃を気にすることなく橋の建設に集中することができるようになったのである。
「ツナミさん…
(こ、この恋文の滲みはまさか…ツナミさんが一人情事に勤しみながら書いてできた滲みなのか!?
くッ…何故、俺は波の国にいないんだ!?)」
だが、新たな問題が起きてしまった。主に、困ったのは氷也だけなのだが…。
再不斬達を討伐後すぐ、氷也達第7班は三代目火影・猿飛ヒルゼンが使者として送り込んだ暗部から新しい任務を言い渡されたのである。もちろん、氷也は異議を申し立てた。当然、その異議はヤマトに却下されてしまい、紐状の樹木で縛り上げられ波の国をその日の内にあとにすることになってしまったようだが…。
波の国で出会った美しい未亡人ツナミとの別れの挨拶もほんの一瞬のみ――氷也とツナミは引き離されてしまったのである。
しかしこれもまた、エロをより一層強く激しく、熱く滾らせる為の刺激的なスパイス。
『追伸
もうすぐ危険日なの。』
どんな困難が待ち受けていようとも、氷也は未亡人の為……エロの為に立ち上がる。
「続編…イチャイチャプレグナンシー(子作り)。決まりだな」

熱く滾った雄の象徴は今、波の国（ツナミ）の方角を指している。
はてさて、氷也の新しい物語はどのようなものになるのか…。

??

鬼人・桃地再不斬達との死闘後すぐに第7班に与えられた任務は、またしてもAランクの任務だった。正確には、Cランクの護衛任務がAランクに格上げされたという……波の国と似たような展開だ。
任務内容は、大人気映画”風雲姫”シリーズの最終作の撮影の為に雪の国へ向かう、主演女優――富士風雪絵の護衛任務である。
しかし、新米下忍に立て続けにそのような任務を与えるとは三代目火影・猿飛ヒルゼンも思いきった行動をするものだ。それだけ、氷也とうずまきナルトを信頼しているということか…。いや、信頼はしているのだろうが、狙いは別のところにあるのだろう。恐らく、三代目は難易度の高い任務を与えることで、超問題児である氷也とナルトの行動を制限するつもりでいるのだ。
三代目の思いきった行動は強ち間違ってはいない。
現に氷也は波の国にて、依頼人（未亡人）の娘（ツナミ）と一線を越えかけてしまっていたのである。その旨について、氷也を監視していたヤマトは三代目へと報告していたようだ。その報告を受けた三代目は、さぞ氷也を羨んだことだろう。半分はムッツリスケベ爺の嫉妬が混じっているかもしれない。とはいえ、新米下忍に有名女優の護衛を任せるということは、それだけ実力を信頼しているということでもある。何より、波の国での経験が大きく活きる任務と思ったのだろう。
そして、氷也とナルトならば必ず任務を果たしてくれると信じて疑っていない。疑いがあるとしたら、氷也が有名女優とも事を起こしかけないか……それだけだ。

??

第7班が任務で訪れた地は雪の国。

第７班と依頼人、護衛対象者御一行は最初の撮影場所にて、雪の国の忍達の襲撃を受けたのである。雪忍達の狙いは、女優富士風雪絵として身分を偽っていた雪の国の先代君主の娘である風花小雪と、彼女が持つ国宝”六角水晶”だった。

雪の国では１０年前にクーデターが起こり、先代君主風花早雪が実弟である風花ドトウに殺されたそうなのだが、実は１０年前……先代君主からの依頼で、ヤマトは当時まだ暗部に所属していたはたけカカシと風花小雪の護衛任務に当たっており、風花小雪を雪の国から脱出させたのだそうだ。ヤマトとカカシに救出された風花小雪はそれ以降は身分を偽り、富士風雪絵として生活していたのである。

つまりこの撮影は、風花小雪を雪の国に帰ってこさせるとともに、風花ドトウから国を取り戻す為に、彼女のマネージャーであり、実は風花早雪の部下であった浅間三太夫が仕組んだものだったのだ。

第７班はまたしても依頼内容を偽られ、忍との戦いに身を投じることになってしまったのである。

こうして、最初の襲撃を受けるも難なく退けた氷也達第７班は雪の国の中心地に到着。その後も映画の撮影をしながら風花ドトウ一派と激戦を繰り広げることとなった。撮影に関しては、監督がこの機を利用してノンフィクション大作を作りたいと申し出てきたそうだ。作品の為にならば命をかける……監督もまたプロということだ。

ただ、状況は多勢に無勢。第７班は浅間三太夫ら風花早雪の部下達を守りながら戦わなければならず劣勢となり、ナルトと小雪を捕らえられてしまった。唯一の救いは、”六角水晶”をヤマトが偽物にすり替えていたことだろう。六角水晶はヤマトの用意周到さのおかげで、ドトウの手に渡ることはなかった。

とはいえ、状況は芳しくない。ナルトはチャクラの制御装置を装着されてしまったのだ。その装置は装着された者のチャクラを吸い上げ、強固な壁を作り、さらにチャクラを練ろうとすれば体に電撃が浴びせられるようにできている代物で、取り外すことも破壊することもできないとドトウが豪語するほどのもの。ナルトは、自身の強味でもある強大なチャクラを封じられてしまったのである。

第7班にとって、これは波の国以上の危機的な状況だ。
だが、第7班はこのような危機的状況に怯むことはない。彼らは危機(ピンチ)を好機(チャンス)に変えることができるのだから…。
ドトウの根城へと侵入し、ナルトと小雪を救出した氷也とヤマトはナルトがチャクラを封じられたこの機を利用し、ナルトの内に封印された強大な力(チャクラ)――〝九尾〟のチャクラを引き出す方法を身に付けさせることを思い付いたのだ。
その結果、ナルトは自分の意思で初めて九尾が封印された世界へと入り込み、九尾と対面……九尾のチャクラを引き出すことに成功し、分け与えてもらったチャクラはほんの僅かなものではあったが、制御装置を破壊した。
九尾は言っていたそうだ…
『お前が本当に〝予言の子〟ならば、この程度のガラクタに制御されるな』
と…。
この事態に誰よりも驚いたのはドトウである。絶対的な自信があった故に、ドトウは大きく取り乱したことだろう。その反面、氷也達はドトウ一派の底を見たはずだ。並の上忍を凌いでこそいたが、九尾が渡したチャクラはほんの僅かなもの。そのほんの僅かなチャクラで制御装置は破壊された。それはつまり、そのナルトよりも多いチャクラ量の持ち主である氷也とヤマトには制御装置は通用しないということだ。
ドトウがこれまで遭遇したことのないチャクラ量の持ち主達が3人も存在している。
しかも、氷遁の本家本元……雪一族の氷也の前では、雪忍の氷遁など劣化版のようなものだ。波の国で死闘を繰り広げた白にも劣る溶けかけの脆い氷の術など、ただの火遁でも事足りてしまう。
一時は劣勢に追い込まれるも、本気を出した第7班からしたら取るに足らない存在だ。
このようにして、ドトウの野望はたった3人の忍によって粉々に打ち砕かれてしまったのである。

そして、今回の任務をきっかけに、氷也が一般男性と女優の禁断の恋に目覚めたのは当然のこと。
しかし、今回の主役は氷也ではない。
これは、未来の火影がお姫様を救い出す物語だ。

「ねェ、氷也…波の国の美しい未亡人に想いを馳せる天才忍者ってどういうことかな？」
波の国の任務を経て、第7班が雪の国を救ってから1ヶ月……第7班の活躍は、大人気映画シリーズ”風雲姫”の完結編にして、ノンフィクション大作として世界各国の映画館で公開されている。
監督が、この作品を早く世界各国のファン達に観て欲しいと急ピッチで準備を進め、公開に踏み切ったそうだ。
その結果、完結編であるこの作品は短期間で風雲姫シリーズの最高興行成績を更新し、最終的には歴代最高の興行成績を更新するだろうとすら予測されている。
そこまでの社会現象が起きると当然のことではあるが、意図せずしてこの作品に出演することになった3人の忍の身近な者達も劇場に足を運び、観賞したはずだ。
「ナルトくん…ナルトくんは、風雲姫様の忍になるの？　火影になるんじゃなかったのかな？　それとも、風雲姫様を娶るつもりなのかな？」
「ヒ、ヒナタ？」
そして、映画の感想を本人達に述べるはずである。
「世界制覇（各国に嫁1人）しようと思ってな」
「やっぱり去勢しとくべき？」
波の国、雪の国と立て続けにAランク任務を与えられた氷也とナルトは、その後も新米下忍とは思えぬ多忙な日々を送っているようだ

が、氷也とナルトの最大の敵は己か……それとも最愛の者か…。

ド根性（ドスケベ）　中忍試験編
ド根性（ドスケベ）忍伝　第九章

6月も残すところあと僅か……季節も次第に暑さが増し夏を迎えようとするなか、とある会議室に木ノ葉隠れの里を支える上忍、中忍達が集められていた。
「さて…では正式に発表する」
その中には、新米下忍小隊第9班の担当上忍はたけカカシなどもおり、錚々たる顔触れだ。これだけの面子を集めたのは里のトップである三代目火影・猿飛ヒルゼンである。その三代目火影が、目の前に並ぶ上忍他中忍達をゆっくりと見渡し、今回の議題について発表し始めた。
「今日より7日後…7の月1日をもって中忍選抜試験を木ノ葉で開催する」
今日、三代目火影が中忍以上の忍達を一同に集めたのは、1週間後に木ノ葉隠れの里で開催される中忍選抜試験の説明の為だ。
「まず、新人の下忍を担当している者から前に出ろ」
中忍選抜試験は、担当上忍の推薦と本人の志願によりエントリーできるようになっている。そして、これは下忍を受け持つ担当上忍が自分の部下を推薦するのかどうか……その意志を確かめる為の会議でもあった。
そして、三代目火影の言葉に従い、3人の上忍が前へと出る。
「カカシに紅にアスマか。どうだ？　お前達の教え子で今回の中忍選抜試験に推したい下忍はおるか？」
第八班担当上忍の夕日紅は、木ノ葉屈指の幻術使いと称される才色兼備のくノ一。第十班担当上忍である猿飛アスマは三代目火影の実子である。
第9班担当上忍はたけカカシに至っては言うまでもないだろう。
「三代目…1人足らないみたいですが…」

ただ、新人の下忍を担当する者はもう1人いる。本来ならこの場所に同席しているはずだが、その1人はこの場所にはいない。もっとも、尋ねたカカシはその1人が何故この場所に同席していないのか薄々気付いているようではある。

「はあ…そうじゃな。

ヤマトは任務で里外に出ておる。戻ってくるのは数日後じゃ」

「新人の下忍とは思えない躍動ぶりですね」

その1人とは、話題沸騰の第7班の担当上忍であるヤマトだ。

全世界にその名を轟かせた木ノ葉隠れの里の第7班には、新人の下忍でありながら、片や”木ノ葉の白い悪魔”と恐れられ、片や”黄色い閃光の再来”と強く警戒される2人の逸材がいる。

ヤマトはそんな2人を教え子に持つ木ノ葉屈指の上忍だ。

現在、第7班は数日前からBランク任務に就いており、里を離れているらしい。第7班はここのところ新人の下忍には本来なら与えられぬ任務を連続して与えられているようで、風雲姫シリーズ完結編の影響もあるのか、第7班を指定しての任務依頼が殺到しているのだそうだ。

「ちなみに第7班の2人は出るんですか?」

「出さないという選択肢がない…これがヤマトの言葉じゃ」

そんな第7班の下忍を中忍試験に推薦しないという選択肢はヤマトにはなく、里側からしても里の為に出てもらわねば困るといったところだろう。三代目火影は第7班を出場させてもいいものかと悩みに悩んでいるようだが…。実力はともかく、素行に難がありすぎるが故にである。

一方、暗部時代の後輩(ヤマト)の言葉にカカシは遠い目をしている。ヤマトがこの場所にいない時点で第7班が他の新人達とは別格の存在であることは容易に想像ができる。カカシはそれぞれ一度でこそあるが、第7班の氷也とうずまきナルトが戦う姿をその眼で見ていることもあり、自身が担当上忍でも同じ選択をしただろうと考えている。

とはいえ、カカシに第7班の担当上忍が務まるかどうか……カカシはそう考えたところで、逆に食われてしまいそうだと、自身には制御

できないと考え至っていた。
　ちなみに、蚊帳の外状態になっている夕日紅と猿飛アスマは、推薦する意向のようだったが、第7班の2人が出場するなら1年先送りにした方がいいのではないかと悩んでいるようである。同じ里の仲間であることが唯一の救いだが、強大な力は頼られる一方で恐れられるものなのである。その強大な力を目の当たりにすることで、自信を失ってしまう可能性は高い。同期であることがそれにより拍車をかけてしまいかねない。
「新人の下忍が中忍試験に出るのは5年ぶりのことじゃが…あの2人はもはや新人枠ではない。他の新人達には悪いがのォ」
「でしょうね。
（やれやれ…あの2人が出るならサスケが奮起するかと思ったけど、空回りしちゃう可能性もあるな。ウチはどうしたもんかな…同じ2人1組（ツーマンセル）でも格が違いすぎる）」
　カカシも似たような考えなのか思案中だ。
　どうやら、今年の中忍試験は第7班が出場することで盛り上がる一方で、騒がしくなりそうである。

　数日後…。
　氷也とうずまきナルトが下忍になり、早いことで3ヶ月ほど……彼らは現在、次の段階へと進むところである。
「君達を中忍試験に推薦することにした」
　Bランク任務を終えて木ノ葉に帰還した氷也とナルトは、その旨を担当上忍であるヤマトから突如告げられた。帰還して早々の急な知らせに、氷也とナルトは大層驚いるだろう。
「ふーん」
「わかったってばよ」
　そう思いきや、2人の反応は無関心に近しいものである。寧ろ、ヤ

マトの方が冷めた反応に少し驚いているくらいだ。
氷也はともかくとし、意外にもまったく喜ぶ素振りも見せないナルトに、喜びはしゃぐと思っていたヤマトは怪訝な表情まで向けている。
ただ、これは仕方がないことなのである。
氷也とナルトは、新米下忍でありながらもすでにＡランク任務を２回も経験している。その他にもＢランク任務を６回。Ｃランク任務を４回。Ｄランク任務に至っては１０回以上。
中忍試験の形式上では、最低８任務以上をこなしている必要があるのだが、すでに倍以上の任務数をこなし、高難度の任務も複数回。氷也とナルトは実力もさることながら、経歴も並の中忍を凌駕している。
鬼人・桃地再不斬や、氷遁使いの白といった強敵達との戦いを経験した氷也とナルトにとって、試験ではあるが下忍と争うなどＤランク任務に等しいだろう。その反面、高難度任務を経験したことによって生まれた余裕は弊害にもなりかねない。
「氷也の反応はわかりきってたことだけど、ナルトは嬉しくないのかい？」
「俺の夢は火影…中忍になるのなんて当然だってばよ」
しかし、自信こそあれど慢心はない。男子三日会わざれば刮目して見よ……この数ヶ月でナルトは精神的にも成長したのだ。高難度任務の経験は、決して悪いことばかりではない。それに、成長したのは精神だけではない。よく見ると、ナルトは下忍になったばかりの頃と比べても、身長がかなり伸びている。
「（成長したんだね）
そういえば…ナルトは身長もかなり伸びて忍服がかなり小さくなったね」
「そうなんだってばよ。
それで、氷也が新しい忍服買ってくれたから、今日受け取りに行くんだってばよ」
顔つきも幼さが少しずつ抜け始め精悍さが増しており、手練れの忍

らしくなりつつあるだけではなく、ナルトの父親を彷彿させており、最近ではナルトに見惚れる女の子も少しずつ増えたりしているくらいだ。
　もっとも、風雲姫シリーズ完結編が社会現象を起こすほど大ヒットしたのもあるだろう。そして、気付く者は気付いているはずだ。うずまきナルトの出自を…。
「中忍試験受けるんなら、丁度良いタイミングだったな。
　未来の火影様がつんつるてんの格好じゃあ…里の品位が落ちちまう」
　心身共に、氷也とナルトは木ノ葉隠れ里の看板を背負うほどの忍にまで成長した。
「とりあえず、受けるってことでいいね。
　まあ、僕から言えることは一つ…程々にね」
　そんな成長した2人を眺めながらヤマトは思う。
　今回の中忍試験に参加する下忍達が可哀想だと…。

??

　そして――中忍試験当日。
　木ノ葉隠れ里の忍者学校（アカデミー）の教室”３０１”には多くの試験参加者達が集っていた。
　試験開始前ということもあり、教室内の張り詰めた緊張感が漂っている。
　ただ、そんな雰囲気のなかでいつも通りといった様子……それどころか、歴戦の猛者が醸し出すような雰囲気を纏った木ノ葉隠れの里の下忍が2人いる。
「お、おい…あれって…木ノ葉の白い悪魔と二代目黄色い閃光じゃないか!?」
「う、うそ…だろ!?
　あ、あんなのが中忍試験受けるのかよ!!」
「い、いや…けど、あの映画が本当かどうか…」

風雲姫シリーズ完結編にて、その勇名を世界に轟かせた木ノ葉隠れの里の新時代を担う下忍――氷也とうずまきナルトだ。
木ノ葉で開催される今回の中忍試験には、近隣小国の隠れ里の下忍達の他、木ノ葉と同盟国でもある五大国の一つ、風の国の隠れ里”砂隠れの里”も参加する合同中忍試験となっているのだが、完結編が大ヒット長期興行（ロングラン）中なこともあり、今回の受験者のほぼ全ての下忍達が氷也とナルトを知っているようだ。
どうやら、ほとんどの下忍達がノンフィクション大作を観賞し、2人の実力をスクリーン越しとはいえ目の当たりにしたことで恐怖心を抱いている。
「スゲェ見られてるけど何でだってばよ？」
「だなァ。男からの熱視線なんて遠慮願いたいんだが…お、あそこに将来有望な躾がいのありそうな女2人発見。草隠れと音隠れか…しかも、どちらも気の強そうな赤毛。次回作はイチャイチャティーチング”レッド”で決まりだな」
もっとも、当の本人達はまったく気にした様子もない。そもそも、現在も上映中の完結編で2人が見せた実力は全力ではない。ナルトは敵の首領（ドトウ）と戦っていた為に本気でこそあったが、全ての手札を切ったわけではない。何より、雪の国の任務後、ナルトはさらに強くなっている。
氷也に関しても同じく……いや、ナルト以上に真の実力を隠しているだろう。
今の2人からしたら、あの程度で驚く程度の忍など底が知れているはずだ。
「私という女がいながら…他の女に手を出そうとするなんて相変わらずね。まったく、氷也の女好きは筋金入りで困ったものだわ。ナルトも大変ね…氷也に付き合わされて」
そんな2人に臆せず話しかけるのは、短い丈のチャイナドレス風の忍服を身に纏ったエロい美少女――テンテンである。
「俺は本能に忠実なんでね」
「知ってる…ッて、ちょッ、こ、こんなところでいきなり抱きしめ…

やぁん、も、揉まないで」
　氷也の唯一無二のお気に入りであり、現在進行中でエロく美しく進化し続けるくノ一だ。氷也は今、テンテンを後ろから抱き締め、数週間ぶりのテンテンを堪能しているようである。しかも、テンテンがこの中忍試験に合わせて忍服を新調していたのが、大変お気に召した氷也はお触りモードに入ってしまったようだ。
「も、もう…本当にエッチなんだから…せめて外から見えない結界くらい張ってからにしてよ」
　結界さえ張ればナニをされてもいいのか……さすがは、氷也が見初めた女だけはある。
「なら、試験が始まるまであと5分…数週間ぶりのテンテンを堪能させてもらうとしよう」
――忍法・雪魄氷心（せっぱくひょうしん）――
「ほ、本気なの!?」
　すると、教室内から忽然と姿を消す2人。
　氷也が結界を張ったことで、2人はチャクラだけではなく、匂い、音、気配すらも完全に消してしまった。
　これは、氷也が覗き目的の為に考案し、完成させた結界術による透遁術の極意である。
「安心しろ。
　俺達の姿どころか、声、匂い、チャクラすら感知することはできない。こちら側からは見え放題。あちら側からは一切見えない。スリル、解放感、羞恥心…そしてエロス、全てに於いて満点だ」
　その結界術をこのように使用するとはさすがの一言に尽きる。
　見えてないのに見られてるような感覚になり、羞恥心を昂らされるエロ。氷也はまた新たなエロスを開拓していた。
「だ、だからってッ、ほ、本当にッ――!?
（あ、やだ…まったく見えてないのに…私達からは丸見えだから見られてるみたいに思えちゃう！　けど、恥ずかしいのに…や、やだッ、ゾクゾクしてきちゃった！　わ、私って、もしかしてMなの!?　ってそうじゃなくって！　これから中忍試験なのにィ！）」

そして、そのエロを誰よりも真っ先に体験するのは、やはりテンテンなのである。これから先も決して変わることはない……これは、テンテンの特権かもしれない。

テンテンには、氷也から逃れる術がない。そもそも、本気で逃れたいとは思っていない。中忍試験が始まるという理性が、辛うじて彼女の雌の本能を抑えている。でなければ、テンテンは雌の本能に忠実になっていたはずだ。

しかし、いったいいつまで抗えるか…。

「テンテンがいない……どこに行った？」

「会いたい人がいると言ってましたが…」

これもまたこの術の恐ろしさの一つで、結界の内側の音は一切漏れることがないが、外側の声は氷也とテンテンに筒抜けという点だ。

「ネ…ジ…リー」

「ほォ、俺の前で別の男の名を口にするとは…イケナイ女だな、テンテン」

さらに、透視能力に優れている瞳術”白眼”ですら、この結界は視認することができない。

「や…あん…

（ネジとリーがチームメイトなの知ってるくせに…イジワル…でも…もうこのまま…）」

テンテンの班員である日向ネジとロック・リーが探しており、ネジは白眼を発動しているも本当に視認できていない。

白眼ですら視認できないことは、すでに日向ヒナタの白眼で実証済みなのだ。エロの為ならば抜かりなく、氷也は何だってする。ちなみに、最初こそこの結界術に対して怪訝そうにしていたヒナタだったが、ナルトの為……その一言でヒナタは氷也の実験に付き合ってくれたらしく、ヒナタの協力もあって白眼ですら視認できない結界術が完成したのである。

ヒナタは気付いていない。彼女の行動は、猿に大量の起爆札を与えてしまったに等しきことであることを…。

そしてこれこそが、三代目火影が危惧していることでもある。木ノ

葉の白い悪魔は存在が卑猥なのだ。
「あ、ヒナタ！」
「ナ、ナルトくん！
に、忍服…新しくしたんだね。　と、とっても似合ってて…カ、カッコいい…です」
「へへ！　ヒナタにそう言われっとメチャクチャ嬉しいってばよ!!」
もっとも、危惧されるべきは一部から狂気の再来とも恐れられる氷也のみ。かつて木ノ葉最悪のイタズラ小僧と蔑まれたナルトは、落ち着きを覚え緩和材になっている。ヒナタも一緒にいるのもあるが…。
緊張感が漂うこの場所を、ほのぼのとした陽だまりへと変化させている。
「お、ナルトとヒナタは順調に清純（プラトニック）な恋愛（クラブ）してるな。
なら、こっちは負けじと大人（アダル）の恋愛（ティラブ）だ」
中忍試験開始まで残り……

ド根性（ドスケベ）忍伝　第十章

氷也は強運の持ち主だ。
いや、強運という言葉では生易しい。世界は常に氷也を中心に廻っていると言っても過言ではないかもしれない。
それ程までに、氷也の身の回りで起きる現象は神がかっている。”ラッキースケベトリガー”然りだ。
「よろしく」
「よ、よろしく…でしゅ…あ、です！
（う、うわ…ち、近くで見れば見るほど綺麗…つか、何か…エロいし…めっちゃイイ匂いしてくらくらする！
あ、あれ…か、身体が火照って…え!?　ちょ、ぬ…濡れてる!?　ウ、ウチ…どうしちまったんだ!?）」
氷也が中忍試験会場で目を付けた内の1人である赤髪メガネッ娘が左隣に座ると、氷也は気さくに挨拶をした。その挨拶に緊張しながらも返す赤髪メガネッ娘だが、どうやら彼女も映画を鑑賞していたらしく、氷也のことを知っていたようだ。
現在、世界中にその名を轟かせた”白い悪魔”。その美しさは多くの女達を虜にしており、彼女もその内の1人のようである。
氷也の虜となってしまった赤髪メガネッ娘は、間近で氷也のフェロモンに当てられてしまい、試験が開始されるというのに発情状態に陥ってしまっているようだ。氷也から放たれるフェロモンはもはや、媚薬と言える。
「君もよろしく」
「ッ…あ、ああ…ッて、ウチに気安く話しかけんな!!
（コ、コイツは敵…大蛇丸様ですら警戒する”白い悪魔”…ッ、な、なんだ？　コ、コイツから凄く甘い…美味しそうな匂いがする。コイツの身体に…触れたい…触り…たい…ハッ！　ナ、ナニ考えてんだウチは!?）」
そして、右隣には氷也が目を付けたもう1人の気が強そうな赤髪美

少女が座っており、彼女もまた氷也のフェロモンに当てられてしまっているようだ。
目を付けた美少女2人が揃って両隣に配置されるなど、さすがの一言に尽きる。これぞまさにドスケベの所業。
しかも、意中の相手に向けて媚薬のようなフェロモンを垂れ流し発情させてしまうとは……まったく大した奴である。
その証拠に、本人達は気付いているのか、無意識なのか……少しずつだが、氷也と距離を詰めており、肩が触れ合うまであと少しの距離に迫っている。
ドスケベな氷也のフェロモンに当てられたということは、きっと彼女達はエロい女予備軍なのだろう。
しかし、これから行われようとしているのは中忍試験だ。
第一の試験は会場の状態、様子からして筆記試験のようだが、決して男と女が親睦を深める為の席ではない。とはいえ、すでに氷也の席の両隣だけは空気が全然違っている。
両隣の美少女達は頬を染め、火照る身体を必死に抑え込もうとしている。が、火照りを抑え込めるはずもなく…。
「はあ…当てられちゃってるわね。
(それにしても、氷也の好きな赤…しかも地毛よね？　狡くない？
私も赤髪にするべき？　けど、染めちゃったら負けた感あるし…なら、やっぱり私は中身(エロさ)で勝負するしかないわね!!)」
そんな2人の赤髪の美少女達の様子を、会場内で唯一理解できるであろうチャイナドレスの美少女テンテンは、ついさっきまで氷也にやりたい放題されていたにも関わらず回復しており、新たなライバル候補達に向けて少し後ろの席から闘志を燃やしているようだ。
氷也の女で在ることと、中忍試験……いったいどっちが大切なのだろうか…。
もっとも、テンテンは氷也のおかげでくノ一としても実力も開花させた。つまり、氷也のそばにいることこそが、彼女にとっては中忍になる為の一番の近道。
これから先も氷也の隣にいる為には、テンテンは女としての魅力と

エロさも磨き上げなくてはならない。
彼女は日々、氷也の為に努力を怠っておらず、今日の下着の色、種類も全てが氷也好みだ。
「見てらっしゃい。
(氷也…私がアナタにとって一番の女(エロス)よ)」
この中忍試験は、極一部の女達の間のみでは、氷也を巡っての戦いに発展しようとしている。

??

木ノ葉隠れの里で開催される中忍選抜試験。
第一の試験(筆記試験)がは現在……佳境を迎えていた。
「もう一度訊く。
今後の忍人生を賭けた選択だ。やめるなら…引き返すなら今だぞ」
試験官森乃イビキが、第一の試験最大の問題を問う。
筆記試験だが、最終問題だけは何やら趣旨が違うらしい。
経験豊富な忍から放たれる威圧感に、ほとんどの下忍達が怯え、畏縮してしまっている。
しかし、この少年は違う。
「まっすぐ自分の言葉は曲げねェ。
それがオレの忍道だってばよ。それに…オレの憧れる男は…いつか超えたいと思ってる男は下忍だ。それでも、火影のように強くてカッコいい男なんだってばよ。だから…下忍のままだろうと関係ねェ。意地でもオレは火影になる。そんだけだってばよ」
試験官森乃イビキに怯えることもなく、第7班のうずまきナルトは迷いなく答える。
中忍試験第一の試験は、各個人の情報収集能力を試すことを目的とされた、謂わばカンニングもありの筆記試験だ。
ただ、カンニングをするなら忍らしく、気取られずに速やかに…。
無様なカンニングをした下忍は班員もろとも失格となり、今この場所に残っているのは、忍らしいカンニングという第一関門を切り抜け

ることができた下忍達だ。
ちなみに、ナルトは氷也の施しによって９問目までの解答を終えていた。
――氷遁・氷眼の術――
第一の試験が筆記試験であることを最初から読んでいた氷也は試験開始前に、視界を共有することができる両面鏡のような効果を持つ無色透明な氷遁の片眼鏡をナルトに施しており、そのおかげもあって超難問の数々をどうにか乗り切ったようだ。
だが、それだけでは第一の試験を突破することはできない。
”中忍”という部隊長に求められる資質はもっと別のところにある。
第９問目までは、中忍になれる可能性を秘めているかどうか……それを確かめる為にすぎない。
本当に重要なのは最後の第１０問目。
これから出題される第１０問目を受けるか受けないか…。受けるを選べば、もう引き返すことはできず、問題に正解できなければ来年以降の中忍試験の参加資格を永久に剥奪される。
受けないを選べば、その場で班員もろとも失格となるが、また来年の参加資格は残る。
受験者達にとっては究極の選択だろう。
もっとも、”二代目黄色い閃光”と称えられるナルトと同じく、木ノ葉隠れの里の”白い悪魔”と恐れられる氷也は、まったくもって動じてはいない。
寧ろ、いつも通りすぎる。
「ッ!?
(あ…手…を握って…ウチを安心させようとしてくれてる?)」
それどころか、不安に駆られている左隣の赤髪メガネッ娘を安心させるべく、会場の試験官達に見えないように机の下で手を握っている。本当のところは、触りたいから触っているだけだろうが…。
「ッ――――!?
(え?　え?　手を揉んで…ナニし…あ、あれ?

か、身体が熱ッ――――ん…ど、どうし…て…き、気持ち…イイ…あ…も、も…っと…触…って…ウ、ウチ…おかしく…なっちゃい…そう）」

しかも、”合谷”、”労宮”といった手にある性感ツボを巧みに押すことで、第一の試験が佳境だというのに、まったく別の刺激を与えるという……ドスケベここに極まるである。

「ッ!?

（コ、コイツ…何してやがる？　まさか、ウチがこの程度でビビってるとでも思ってやがんのか？　ハッ！　だとしたら木ノ葉の忍はマジで甘ちゃ――――んッ!?　な、何だ？　い、今…身体に電流みたいな…あ…ま、また…な、何だ…これ…ど、どんどん…身体が…1人でするより…凄いのが…ッ!!）」

もちろん、右隣に座っている気の強そうな赤髪の美少女も同じセクハラを受けていた。いや、それを行っているのが氷也の場合、セクハラにはならない。これは施しだ。

そんなろくでもないことをしながら、氷也は問題の内容がまるで任務のようだと思っているようだ。受けるを選び正解できなければ来年以降の参加資格を永久に剥奪される。これを任務で例えたならば、成功すれば生き、失敗すれば死ぬ……常に死と隣り合わせな忍の任務そのものだと。

基本、下忍に与えられるDランクや、Cランク程度の任務なら命の危険はほぼない。しかし、Bランク以上の任務となれば常に命の危険がある。すでに何度もBランク以上の任務を経験したからこそ、氷也には第10問目の内容がそうとしか思えずにいるのである。

つまり、10問目の問題とは、受けるか受けないか……死ぬかもしれない選択を突きつけられながらも、受けるを選べるかどうか…。

どんなに危険な任務であろうとも、ここ一番で勇気を示し、苦境を突破する精神力。それを求められている。

氷也には簡単すぎる試験だ。

何故なら、氷也にはたとえどんな過酷な任務であろうと、受ける以外の選択肢がないのだ。寧ろ訊くまでもないだろう。

氷也の場合、スリル(危険)とエロスは紙一重で、危険にはエロくてイイ女が付き物……出会いがある可能性が高いというのが一番の理由だろう。

とはいえ、氷也が任務の傍らで女探しをしているなど、この試験官が知るはずもないが…。

「いい決意だ。

(さすがは”二代目黄色い閃光”…か。

ふッ、白い悪魔といい、とんでもないルーキーが出てきたものだ)」

そして、試験官はナルトの宣言をきっかけに、会場内……残る受験者達の不安と恐怖が払拭されたのを悟った。

これ以上の問答は必要なし。

「では、ここに残った者達に――――中忍選抜試験”第一の試験”合格を申し渡す!!」

中忍試験第二の試験の試験官である木ノ葉隠れの里の”特別上忍”みたらしアンコ。

鎖帷子の上に直接ジャケットを羽織るという、第一の試験会場で約1名から目を付けられること間違いなしな扇情的な忍服を着用した紫色の髪の巨乳くノ一である。

「みたらしアンコ…甘い名前だ。

ふむ、生クリームやチョコソースなどを塗りたくり、フルーツをトッピングして堪能したい身体だな。イチャイチャパラダイス・”スイーツ編(女体盛り)”。パラダイスでお腹一杯だとしても、スイーツは別腹…悪くないな」

そして、案の定……すでに氷也は目を付けていた。

第一の試験の合格が言い渡され、合格した者達が驚きの渦中にあるなか、氷也は受かって当然といった様子で、氷也の関心は試験よりもみたらしアンコに向いている。

ちなみに、両隣に座っている赤髪の美少女達は、氷也の性感ツボ攻めによって腰砕け状態のようで、氷也の言葉はまったく聞こえておらず、そんな余裕などない。絶頂を味わうも声（喘ぎ）を出さなかったことだけは評価に値し、下忍とはいえ一般人と違うだけはあるのかもしれない。

もっとも、声（喘ぎ）を出さないように必死に悶える彼女たちの姿は、氷也を更に興奮させていた。

「次行くわよ次イ！　私についてらっしゃい！」

それもあり、氷也の頭の中はエロいことしか考えていない。

「俺がイカせてやろう」

??

場所は移り、木ノ葉隠れの里にある演習場の1つ――”死の森”。

中忍試験第二の試験は、第一の試験よりもより過酷な試験である。

第一の試験も覚悟を示さなければならなかったが、今度はその覚悟を実戦で示さなければならない。

第二の試験は、殺しもありの巻物争奪戦。

つまり、これまでの任務経験が大きく関係する試験でもある。

「え？　第7班のみの特別ルール？」

「何だってばよそれ？」

ただ、すでに並の中忍を凌ぐ任務経験のある第7班は、特別ルールのもと第二の試験に臨まないといけないようだ。

「ええ。

この試験はさっき皆の前で説明した通り、天の書と地の書を巡って闘ってもらう殺しもありの巻物争奪戦」

今現在、第7班の2人は各チームごとのスタート地点へと案内されたところだが、第7班のみの特別ルールの内容を、第二の試験の試験官みたらしアンコから説明されている。

第二の試験は、第一の試験と同様にチーム戦。

計26（7人）チームが出場しており、半数に天の書、もう半数に地の書が

手渡されている。合格条件は、天の書と地の書……両方の書を揃えて、ゴール地点である中央の塔に5日以内に到着すること。
「あなた達2人には、1時間遅れて試験を開始させてもらうわ。それから、あなた達には天の書も地の書も渡さない。どちらの書も…奪い取りなさい」
その特別ルールとは、すでに下忍を遥かに凌駕する実力を持つ氷也とナルトに、ハンデを背負って試験に臨んでもらうことである。
これは、有名になりすぎてしまった弊害だろう。
その上、この特別ルールは本人達が知らないだけで、木ノ葉の第9班を除いた他のチームには伝えられているようだ。
「ハンデありなのは何となくわかってたが…どこが特別ルール？」
「簡単だってばよ」
とはいえ、本人達はハンデを背負うことなどまったく気にした様子もなく何のその。
「ええ？　もうちょっと驚いてくれない？
可愛げのないルーキーね」
「可愛げがあるのは女だけで十分。
それよりも…試験が終わったら俺とお茶でもいかがですか？」
ちなみに、同じ2人1組（ツーマンセル）体制でも、天と地の差程の実力差がある第9班は、ハンデを背負うのではなく、ハンデをもらって試験に臨んでいるようだ。
両方の巻物を与えられていない第7班とは違い、第9班は両方の巻物を最初から所持しており、合格条件は両方の巻物も3日間死守すること。
もしどちらか片方でも奪われてしまったら、その瞬間に他のチームと同じ合格条件となり、両方の巻物を揃えて中央の塔にゴールすればいいとのことだ。
第7班に比べたら、圧倒的に優位ではないだろうか…。いや、氷也とナルトからしたら、この程度のハンデはDランク任務相当のものだろう。
「女好きってのは本当みたいね。

けど、私は自分の目で見たものしか信じないの。だから、アンタが白い悪魔と恐れられるだけの実力が本当にあるかどうか…私に示してくれたら…考えてあげる」

そして、みたらしアンコの挑発的な発言がどのような影響をこの試験に及ぼすか…。

「全チームから巻物奪うつもりで」

「それはやめて。

せめて、５チームくらいは残ってもらわないと困るわ」

第二の試験……見物である。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第十一章

　中忍選抜試験第二の試験が開始され1時間が経過し…。
「手っ取り早く終わらせる為に二手に分かれたけど…さーて、どちらに向かいますかね」
　ハンデを背負う形での参加となった第7班の氷也とナルトは、開始時刻が1時間遅れている上に、天の書と地の書のどちらの巻物も手渡されずに、両方の巻物を奪い取らなければならない。
　下忍とはいえ一応は忍だ。1時間という時間はトラップを仕掛けるには十分なもので、普通に考えたならば氷也とナルトはかなりのハンデを背負わされた状態だろう。
　しかし、氷也は焦ることも、トラップに引っ掛かる様子もまったくなく第二の試験の会場である〝死の森〟内を悠然とした様子で駆け抜けていた。
「ナルトは…」
　しかも、ナルトの状況をチャクラ感知で探りながらと、かなりの余裕さが伺える。
「！」
　いや、余裕さを見せたのはほんの一瞬で、氷也はたった今感知した禍々しいチャクラの方向……ナルトがいるであろう方向へと険しい表情を向けていた。
「何だ…この禍々しいチャクラは…いったい何者だ？」
　それと同時に深いため息を吐き、舌打ちまでしている。
「死の森に入った瞬間に思い付いた大自然を舞台とした最新作〝イチャイチャリベレーション〟…執筆するにあたり、野生的で、人間の本能の〝解放（青姦）〟について深く研究しようと思っていたのに、それどころではなさそうだな」
　死の森と恐れられるこの場所ですら、氷也にとっては野生、本能――エロスを解放させるスパイスでしかなかった。だが、禍々しい強大なチャクラを感知してしまったことによって、事態は急変してしま

う。
その身から漲る性への強き欲求が絶対零度の雰囲気へと変貌し、邪魔をされたことによる激しい怒りの矛先が禍々しいチャクラへと向く。
「まったく…どうしてくれようか」
木ノ葉隠れの里の若き狂気――〝白い悪魔〟は、美しくも背筋を凍りつかせる冷徹な笑みを浮かべていた。

同時刻。
場所は変わり、第二の試験会場である死の森の外側にて、顔のない死体が3体発見され、受験者達が知らぬところで慌ただしい……緊急事態へと発展していた。
そして、この事態を誰よりも重く見た第二の試験官である木ノ葉隠れの里の特別上忍――みたらしアンコは、部下達に指示を出し、自身は単身、死の森へと足を踏み入れていた。
みたらしアンコが向かう先は無論……顔を奪った者のもと。
「はあ、はあ…ッ――大蛇丸!!」
この第二の試験に、招かれざる客がいる。
事態は唐突に、誰も予想できぬ方向へと進んでいた。

??

一方その頃、中忍試験第二の試験試験会場となっている〝死の森〟では、もう1組の2人1組（ツーマンセル）〝第9班〟に所属するうちはサスケは最悪の敵と遭遇してしまい、かつてない窮地へと追い込まれてしまっていた。
強い憎しみを宿した紅き瞳（写輪眼）ですら捉えきれなかったその敵は圧倒的であり、理不尽すぎる強大な力を持ってしてエリート一族（うちは一族）の最後の

末裔であるうちはサスケを赤子のように扱い、戦意を喪失させてしまったのである。
「まさか君が現れるとはね」
だが、うちはサスケの絶体絶命の窮地に、眩い金髪と青空を思わせる碧眼を持った少年が駆けつけた。正確には、駆けつけたのではなく、本当にたまたまその場に居合わせてしまっただけなのだが…。
「〝二代目黄色い閃光〟うずまきナルトくん」
「お前…何者だってばよ?」
大蛇に乗る禍々しいチャクラの持ち主と大蝦蟇に乗ったナルトが向き合うことで、緊迫した雰囲気がその場を支配している。
強者同士の睨み合いと、身から迸るチャクラの衝突によってまるで大気が揺れているかのように錯覚すらしてしまう。いや、実際に強大なチャクラ同士の衝突によって大気が揺れてしまっており、その場にいる第9班の2人――うちはサスケと春野サクラに重力のように重く乗しかかっている。
「ぐッ…
(ナルト…お前はいったいどこまでッ!?)」
そんな緊迫した状況のなか、うちはサスケは己の無力さにまたしても苛まれていた。
一度目は波の国で第7班の戦いを見た時だ。
そして、二度目が現在。
強大なチャクラの重圧に耐え兼ねて膝を突いた己の現在の状況に、うちはサスケは実力の違いを感じずにはいられないでいた。対して、うちはサスケの現在の心境など気付いていないどころか、目の前の敵にのみ集中しているナルトは、ただ単に木ノ葉隠れの里の仲間を守るべく攻撃を仕掛ける。
「ガマケンさん!油ァ!!」
「自分、不器用ですが…やりましょう」
――火遁・蝦蟇油炎弾――
ナルトが口寄せ契約を結んでいる蝦蟇の秘境〝妙木山〟の特殊な蝦蟇油を併用した灼熱の火遁は、火遁を得意とする忍が多い木ノ葉で

も屈指の威力を誇るだろう。
敵を大蛇もろとも葬り去るどころか、死の森の一部を火の海にしかねない勢いだ。
「なッ!?
(あの落ちこぼれがこれほどの火遁までッ!?)」
その威力、範囲の広さは、木ノ葉の忍一族の中でも取り分け火遁を得意としたエリート一族(うちは一族)出身のうちはサスケですら驚愕するほどのもの。ナルトが忍者学校(アカデミー)時代に落ちこぼれだったことも、その驚きようにより一層拍車をかけているだろう。
「カエルに油に火遁。おまけに金髪碧眼。
あなた…忌々しいわね」
ただ、敵は桁外れの火遁を前にしても瞬き一つせず、それが見慣れた光景なのか、はたまた懐かしい光景なのか、寧ろ嫌悪のこもった表情を向けている。
とはいえ、打つ手もなく灼熱の火遁に包み込まれる敵と大蛇は丸焦げになってしまった。
「やったってば――ッ!?
ガマケンさん後ろだっでばよォ!!」
「ぐうッ!だ、脱皮!?」
しかし、丸焦げとなってナルトの目の前に残っていたのは大蛇の脱け殻で、本体は地中へ潜り、背後から襲いかかってくる。背後からの攻撃をガマケンがどうにか盃の形をした盾で防ぐも、敵はナルトの戦い方に対して、明らかに手慣れた様子だ。
「そ、そんなのアリかってばよ!?」
――金剛封鎖・雷縛――
それでも、ナルトは背後からの予想外の奇襲に動揺しながらも、背中から雷遁を纏わせたチャクラの鎖を発動させて大蛇を縛り上げてしまった。
「――ッ、こ、これはッ…!
(うずまきクシナと同じ!!)」
これには、今度は敵が激しく驚愕することとなった。ただそれは、

ここまでナルトが戦えることへの驚きか…。それとも、うずまき一族特有の封印術をナルトが扱えることへの驚きか…。

それは定かではないが、一つだけ言えることは、ナルトの強さはこの敵にとって想定以上のものだったということである。

そして、雷遁によって痺れさせられ、大蛇が身動きをとれなくなった隙を突き、ナルトは瞬身の術で大蛇の懐へと潜り込むと同時に影分身を作り出す。

「くらいやがれッ!!」

──大玉螺旋丸──

「ッ!?

(こ、これじゃあまるで本当にッ──黄色い閃光(四代目火影)!!)」

すると、巨大化させた螺旋丸を大蛇の腹へと叩き込み、上空へと打ち上げた。続いて間髪入れずに、影分身の一体を足場に、今度は敵の背後へと瞬身の術で先回りし、トドメの螺旋丸を放つ。

「木ノ葉に手を出すヤツは俺が絶対に許さねェってばよ!!」

──螺旋丸──

敵の脳裏に過るのは、かつて10年に一度生まれるかとどうかと言われたほどの天才にして、歴代最年少の若さで火影になった全忍最速の忍の姿だ。

その黄色い閃光の後継者が、敵に迫っている。

「調子に乗ったガキは嫌いよ!

〝潜影多蛇手〟!!」

だが、敵も悪名を世界に轟かせる極悪人。簡単に終わるはずがない。

服の裾から蛇を大量に口寄せし放つことで螺旋丸の直撃を回避する。

「す…凄い…」

そんな激しい攻防を目の当たりにし、うちはサスケと共に強大な敵の襲撃を受けた第9班の春野サクラは、ただただ唖然とするしかなかった。そして純粋に、無意識に、ナルトの強さに称賛の声が漏れる。

「く…そ…

（どうしたら…俺はどうしたら強くなれる!?
あの落ちこぼれがこんなにも強くなれて、俺が弱いままなんてありえねェ！何かの間違いだ!!）」
そのような、春野サクラの無意識な称賛の声を耳にしてしまったうちはサスケは、劣等感を感じると同時に、強い焦燥感に駆られてしまっていた。
かつては、落ちこぼれと見下していた存在にこれほどの勇姿を見せつけられたのだから当然だろう。波の国での決闘（敗北）もまた、うちはサスケの心情により拍車をかけているはずだ。
「くッ、この蛇――邪魔すんじゃねェェェ!!」
大量の蛇を螺旋丸で撃退していくナルトを、うちはサスケは鋭く睨みつけている。
きっと、うちはサスケにとってこの激闘の結果はどうでもいいものなのかもしれない。上には上がいた。それを下忍になり痛感させられたうちはサスケにとって、里や仲間など関係なく、ただ強さを求めるだけとなってしまっている。
今のうちはサスケでは介入できないこの戦いもまた、彼を無力感に苛ませ、その身に受け継いだ力を負の感情によって増大させてしまうものとなっているはずだ。
「どいつもこいつも…ふざけやがってッ！
（俺は栄華あるうちは一族出身――うちはサスケだ！
こんなところで立ち止まってられるかよ!!）」
すると、その負の感情がうちはサスケの瞳に変化を及ぼす。
それは紅く染まった瞳――うちは一族の代名詞である〝写輪眼〟だ。開眼当初は一つ巴だったうちはサスケの写輪眼は、修行を経て二つ巴へと変化し瞳力が増していたのだが、それでも襲いかかってきた敵には一切通用しなかった。しかし、己の無力さに苛まれたうちはサスケの写輪眼はここにきて三つ巴へと変化し、真の写輪眼へと至った。
心を写す瞳とも言われる写輪眼……その写輪眼の瞳力の増大が意味するものは、力への強い渇望だ。

「…!
(ふ…ふふふ、ああ、素晴らしい。素晴らしいわ、サスケくん。恐らく、うずまきナルトの力を目の当たりにしたことがきっかけで写輪眼が完成に至ったのね。
それに、私には分かる。あなたの瞳は憎悪と殺意に満ちている。私好みに成長して…たまらないわ)」
そんなうちはサスケの変化を、ナルトと戦いながら目にした敵は、歓喜に打ち震えながら歪な笑みを浮かべている。
思えば、この敵の目的は最初からうちはサスケだった。
たまたま、偶然にもその場所にナルトが居合わせたことで、第9班の2人の窮地を知り、ナルトが助太刀に入る形となっただけで、敵は第9班から巻物を奪うでもなく、殺すでもなく、うちはサスケ個人を目的としていたのである。
「よそ見してんじゃねェ!!」
「ああ…ごめんなさいね。
君にはとても感謝してるわ…うずまきナルトくん。それに、久々に楽しい戦いだったわ。けど、ここまでよ。
〝風遁・大突破〟!」
もちろん、たまたま居合わせてしまっただけのナルトは、敵の目的についてなど知るはずもない。第二の試験は殺しもありであるが故に、殺すことになんの躊躇もない敵……そのようにナルトは思っているはずだ。
「ぐッ、うわあァァァ!!」
だからこそ、ナルトも敵を殺すつもりで本気で戦っていた。だが、ナルトに対する興味など敵には最初から一切なかったようで、想定外の強さに戦っていくうちに興味を抱いたようだか、敵の興味は常に変わることなくうちはサスケに向き続けており、飽きたと言わんばかりの様子で放たれた風遁忍術は完全にナルトの虚をつき、ナルトを大きく吹き飛ばしてしまう。
「さて…これで邪魔者はいなくなったわ。
サスケくん、二回戦といきましょうか。君の写輪眼の真の力を私に

見せてちょうだい」
「ヘッ、上等だ!!」
まるで、うずまきナルトなど最初からこの場所にいなかったかのように、敵は熱のこもった視線をうちはサスケに向け、うちはサスケは不敵な笑みを浮かべながら写輪眼で敵を見据えていた。
「改めて、名乗っておこうかしら。
私の名は大蛇丸」
この敵こそ、招かれざる客である。

??

その後……
「なるほど…あの禍々しいチャクラは〝抜け忍〟の大蛇丸だったのか。納得だ」
敵は目的を果たして去り、その場所には首筋に〝呪印〟らしきものを刻まれ気絶したうちはサスケと、泣きじゃくる春野サクラ……それから、中忍試験に大蛇丸が侵入したことを察知して駆けつけた第二の試験試験官・みたらしアンコが残されていた。
「まァ、あの大蛇丸が相手ならどう足掻いてもアンコさんじゃ勝てるはずがないですね」
そんななか、この場所に遅れて到着した忍が1人――〝白い悪魔〟氷也がいた。
状況から見て、氷也が到着したのは大蛇丸が立ち去ってからと見ていいだろう。
みたらしアンコについては、彼女の様子から見て、戦わずして身動きを封じられたようだが…。
「ぐ…は、はっきりと言ってくれるじゃない。
って、ちょっと!?ど、どうして私の服を脱がせようとしてるのよ!?」
「これから、あなたに刻まれた呪印を封印するので動かないで。大人しく脱がされてください」
殺伐とした状況下で、手馴れた様子でアンコの忍服を脱がせ、瞬く

間に上半身裸の状態にさせる氷也は、さすがの一言に尽きる。ただ、彼が口にした〝呪印〟が気になるところである。アンコに刻まれているというその呪印は、うちはサスケと同じ箇所（首筋）に浮かび上がっており、模様も同じなのだ。

「じゅ、呪印を封印って…あなた封印術も使えッ――ひゃん!?ちょ、ちょっと、い、いきな…やぁ、ま、待って！

術…式…て、手つきが…いやらし…あん！」

恐らく、アンコの呪印とうちはサスケの呪印は同じ人物に刻まれたものなのだろう。つまり大蛇丸に…。世界に悪名を轟かせる大悪人にして、木ノ葉隠れの里の抜け忍である大蛇丸が侵入していたことにすぐに気付けたことからも、アンコと大蛇丸には何かしらの接点があるはずだ。たとえば……かつての弟子と師であったり。それならば、アンコが大蛇丸に呪印を刻まれていたことにも、戦わずしてその呪印を介してアンコを無力化したことにも納得ができる。

そして、アンコが勝てるはずもない大蛇丸を相手に刺し違える覚悟だったことも…。

「さァ、どんどん俺の術式をあなたの心身に刻みつけてやるから、遠慮なくこの大自然の中で喘ぐといい」

もっとも、アンコが大蛇丸を相手に刺し違えるなど不可能だろう。彼女の実力から考えてもそうだが、そのようなことを氷也がさせるはずもない。

氷也の目の前で、何があろうと美女は死なない。

「術式ッ、刻みながら胸…揉ま…やァん！

あひッ、ま、待ッ――あァん!!

（な、なんて…テクニック…なの!?

こ、このまま…じゃ…手で触れるだけでイッ…ちゃ…）」

どんな状況だろうとも、氷也は変わらない。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第十二章

　中忍試験第二の試験が開始されてから一夜明け、何事もなかったかのように、第二の試験は2日目に突入した。
　1日目に、草隠れの里からの受験者が殺害されていたことが発覚し、殺した草隠れの忍に成り代わった犯人が木ノ葉隠れの里のとある下忍を襲撃するという前代未聞の事件が起きたが、ほとんどの受験者がそれらの事件を一切知らず、試験は中止されることなく執り行われている。
　死の森で行われる第二の試験も、2日目に入りそれなりのチームが脱落しているはずだ。その反面、すでに第二の試験を通過した優秀な下忍達もいるはずだ。
　そして、〝白い悪魔〟と〝二代目黄色い閃光〟擁する第7班は、開催里の贔屓目抜きにしても、第二の試験を一番最初に通過すると予想されていた。
「ふッ、やはりテンテンは朝に水浴か、予想通りだな」
　──氷遁・氷眼の術　〝遠景〟──
　しかし、周囲の予想は大きく外れ、第7班は未だに死の森に滞在しているようだ。ただ、第二の試験を通過する為に必要な二つの巻物は1日目の内に早々と確保しているようで、あとはゴール地点の中央の塔に向かうのみ。
「鬱蒼とした木々の隙間から射し込む太陽の光を受け、水浴びした女体がキラキラと美しく輝く。素晴らしい。まるで人魚が水浴びしているかのような──〝イチャイチャマーメイド〟…たまらんな」
　だが、第7班が……主に氷也ではあるが、早々と第二の試験を通過するつもりはないようだ。
「お、多由也も水浴中か！
　強気な女の子だが、実は年頃の女の子らしく、汚れや体臭などを気にしている…そこがまたイイ」
　どうやら、この死の森は氷也にとって〝エロスの宝庫〟のようなも

のらしい。
なんでも、氷也はエロスの為にオリジナル忍術を改良したとのことで、それの実験も兼ねているのだそうだ。
氷也が改良を加えたのは、視界を共有することができる両面鏡のような効果を持つ無色透明な氷遁の片眼鏡――〝氷遁・氷眼の術〟である。どう改良を加えたのかというと、氷也は氷眼の術に、水晶玉などを媒体とすることで自身が記憶している人や場所などを映し出す〝遠眼鏡の術〟を複合させたのである。
これによって、氷也は無色透明の氷遁の眼鏡越しに、記憶した場所であったり、自身が把握しているチャクラを感知することで、かなり距離が離れていようとも視ることができるようになったのだ。無論、視ることができる距離に限界はある。
とはいえ、氷也は自力で、エロスに対するとてつもない執念によって、極めて広い視野を持つとされる血継限界〝白眼〟を擬似的に再現させてしまったのである。
本来、遠眼鏡の術も超高度のチャクラコントロールが必要とされる会得難易度〝Sランク〟の術。そんな術を、エロスの為に他の術と複合させてしまうとは…。現在の木ノ葉隠れの里で遠眼鏡の術が使える唯一の存在である三代目火影・猿飛ヒルゼンと、白眼を持つ日向一族がこれを知ったら、きっと開いた口が塞がらないだろう。寧ろ、これをエロスの為に使っていると知ったら怒りどころが殺意まで湧いてしまうかもしれない。もしかしたら三代目は、手持ちの眼鏡でも可能かどうか試そうとするかもしれないが…。
「くくく、この術は素晴らしい。
エロスを極めし者である俺にこそ相応しい術だ!!」
言っておくが、日向一族の男達は覗き目的の為に白眼を使用したりはしていない。思春期故の暴走で使用してしまったことがある者もいるかもしれないが、名誉ある日向一族の為にもう一度言っておく。白眼が真価を発揮するのは決して、覗きを犯す瞬間ではない。
そもそも白眼とは、忍術、体術、幻術に分類される全ての術を視認するだけで見抜き跳ね返すとされ、瞳術の中でも静止視力、深視力に

優れ、視ることに秀でた性能を持つとされている。その上、第二胸骨の真後ろ以外のほぼ全方向と広い範囲を見渡せるほどの極めて広い視野、透視能力を持っている。
氷也が元々有している感覚的なチャクラ感知術とは違った、視る感知術だ。
視角情報として得ることができるそれは忍にとって、とてつもなく重宝される危機感知能力と言えるだろう。
それ故に、白眼を持つ日向一族はどのような任務であろうとも重宝され、白眼を欲して日向一族の者を狙う他里はあとを絶たない。
「テンテン、多由也、ありがとう。
さて、お次は香燐だな。香燐も水浴中だろうか――――な…何だ…アレは!?」
そんな、重宝され、喉から手が出るほど求められる瞳術を擬似的に再現してしまった氷也は、お気に入りの赤髪メガネッ娘が水浴している光景を視てしまった。
ただどうやら、氷也の瞳に映り込んだのはそれだけではないようだ。
水浴中の香燐の身体にはいったい何が…。氷也はいったい何をその瞳に映したのか…。

??

そして、水浴中の姿を離れた位置から覗かれていることに気付いていない香燐はというと…。
「はぁ…
(こんな身体、あの人に…氷也に見られたらきっと幻滅されちゃうよな。そうなったら、ウチ…けどもしかしたら…)」
自身の身体にくっきりと残るおびただしい数の噛み跡を確認しながら、深いため息を吐き出していた。香燐が心に思い浮かべる男には決して見られたくないものなのだろう。
その噛み跡は、香燐が特殊な体質の持ち主であることを表している

証拠でもあるが、彼女にとってのそれは忌むべきものであり、願わくば失いたい力だ。
香燐は今、この力を失うことを強く望んでいる。
それは、香燐が恋をしてしまったからなのだろう。しかし、その能力は香燐にとって亡き母との大切で、唯一の繋がりでもある。己が心から大切に想い続ける母の娘である証でもあるのだ。この能力を強く失いたいと思うことはあっても、本当に失いたいとは心の奥底では思えずにいるのかもしれない。
だから、香燐は脳内で妄想する。もし、想い人が己の身体にあるおびただしい数の噛み跡を見ても、決して幻滅することがなく、寧ろそれすらも含め己を受け入れてくれることを…。
『ッ!?
(え?こ、この…チャク…ラ…ど、どうして…)』
『俺も一緒に水浴させてもらおうかな』
香燐の脳内では今、想い人が香燐の心情などお構い無しといった様子でいつの間にか、どうやってかは知らないが、彼女の広大なチャクラ感知術すらも掻い潜り、何の前触れもなく彼女の背後に現れていた。
すると、想い人は現れると同時に香燐にそっと優しく触れ、背後から優しく抱き締めるのである。
『ひょ…氷…也?
(ま、まったく感知…できなかった。どうやって?
あ、あれ?つーか…服着てない?え…え?)』
『君の身体は美しいな。
あまりにも美しく…触れたくなってしまったよ』
それから、想い人は香燐の素肌へと口づけを落とす。
念の為に言っておくが、今は第二の試験真っ只中だ。唯でさえ危険な死の森で、しかも殺しもありの試験中に水浴するなど危険極まりない。ただ、香燐を含め試験に参加しているくノ一達は年頃の女の子ばかり。何日も身体を洗えないサバイバル生活など堪えられないのだろう。現に、香燐以外に水浴しているくノ一はいる。

それはともかく、水浴すら危険だというのに、水浴しながら淫らな妄想をするのは如何なものか。
もっとも、彼の想い人は嬉々として、もっと淫らな妄想をしろと口にするだろう。
『あ…やぁ…』
『安心していい。
結界は張ったし、香燐の仲間は幻術で眠らせてある。
絶対に気付かれることはない』
香燐の妄想はどんどんエスカレートしていき、過激になっており、ここから先いったいナニが起きるのだろうか…。
想い人は香燐の肌を優しく撫でながら、首筋へと唇を寄せ、深く吸い付いている。
『ひゃ、ま…待っ…ああ…
(あ、そ、そんな…私…氷也に触られて、肌にキス…されてるの？今まで…触れられるのが嫌で仕方なかったのに…氷也に触れられると…幸せ)』
『香燐、これから俺は君に印をつける。
絶対に消えることのない…俺だけの印だ。今後、君は絶対に俺以外の男に触れさせるな』
もし、この場に想い人がこの場におり、香燐の妄想を知ったならば、きっとその妄想を基に、一つの作品を描き上げるだろう。その身に消えない印を……所有の証を刻み込むことから、〝イチャイチャマーキング〟といったところか…。
香燐は妄想で、己の全てに想い人から印を刻まれている。それを強く望んでいる。
ただ、これはあくまで香燐の妄想であり、願望だ。彼女の望み通りになるかどうかは別の話だ。
「ひひひ…氷也にだったらウチ、ナニされても…なーんて、叶いもしないことをなに考えてんだか」
「ふッ、ならお言葉通り香燐の身体を余すことなく堪能するとしよう」
「へ？」

だが、香燐は知らない。
香燐の想い人――氷也という男が、エロい女が大好物だということを…。
エロい女を求めてあっちへ行ったりこっちへ行ったり。エロスを求めて三千里。果てには、空の彼方まで行ってしまいかねないほどにエロスを求めているということを…。
「ひょ、氷也？
（は？え…え？
な、なんで…本物？）」
「お前の身体に俺だけの印を刻ませてくれ」
エロい女がそこにいるならば、氷也は神出鬼没。
「あ…そ、そんな…ウチの身体…穢…れて…あん…
（ああん…身体が火照って…まるで、豪火に包まれて滅却されそうな…けど、ウチ…もっとォ）」
「お前の身体は綺麗だ。穢れてなんかない。
それでも穢れてると言うなら…とことん俺が染めてやる」
第二の試験2日目早朝。
1人の女の子が、1人の男に染められる。

それからほんの少し時間は経過し…。
「むゥ…どうして来ないの？
氷也なら、水浴中の私を襲いに来てくれると思ったのに…もしかして、すでにゴールしてる？」
水浴を終え、着替えているのは、木ノ葉隠れの里の美少女くノ一――テンテンだ。
彼女は敢えて、死の森という危険な場所で、殺しもありの危険な第二の試験の真っ只中、それでも己の想い人が駆けつけてくれると願い、求め、危険を覚悟して水浴へと踏み切った。

「まったく、氷也以外の男はお呼びじゃないってのに…」
しかし、想い人は来ることはなく、変わりに別の男達が襲いかかってきたようだ。
無論、その男達はテンテン自ら返り討ちにしたようだが…。
「それより、何か嫌な予感がするのよね。
まさか…あの赤髪の女達のどっちかに行ってる?その可能性はあるわね」
それにしても、いやはや女の勘とは恐ろしいものである。
「氷也を呼ぶにはどうしたら…この大自然に相応しい解放的で露出の多い格好」
「葉っぱ服か。たまらんな。
敢えて綴り方を粗くすることで、隙間をたくさん作るのもイイな。テンテンの葉ブラをぜひ見てみたい」
そして、この男は本当に神出鬼没。
「ひゃあ!?
ひょ、氷也!い、いつの間に!?」
氷也がテンテンの呼びかけに応じないはずがない。
今回はテンテンよりも先に会いに行った女がいるが、それはご愛嬌のようなものである。
「水浴中に来れなかったのはすまない。詫びに今度、触れ合いながら水浴しよう」
「あ…ど、どうして…服脱がせて…」
いったいどこが詫びなのだろう。それから、当然のように氷也はテンテンの忍服……チャイナドレスを脱がせている。
「俺の為に大自然に相応しい解放的で露出の多い格好をしてくれるんだろう?」
ちなみに、葉っぱ服とは文字通りに葉っぱを裸の上に衣服のように纏ったものである。基本的には、ジャングルで衣服を失った時の間に合わせに使ったり、小説や絵画などの作品では野性的な雰囲気を表す為に使われたりする。過激なものだと、ビキニぐらいの面積だったり、胸の突起部分だけや、陰毛を隠すのみだったりと、大自然での解

放的な姿をより強調していたりもする。
「見たい…の？」
「ああ」
テンテンの解放的な姿を……新たなエロスの扉を氷也は開く。
??
氷也が朝から解放的な女体を堪能してからそれなりの時間が経過し…。
「氷也！
遅いってばよ!!」
氷也はナルトと再び合流した。
ちなみに、大蛇丸と激闘を繰り広げ、虚をつかれて吹き飛ばされてしまったナルトとは一度合流していたのだが、みたらしアンコを苦しめる呪印を封印したり、そのついでに大人の女体を堪能したり、駆けつけた暗部達にみたらしアンコを嫌々ながら引渡したり、ナルトはその間に大蛇丸のせいで行動不能状態に陥っていたうちはサスケと春野サクラの第９班の２人を護衛したり、ナルトに護衛を任せている間に氷也が巻物を揃えたりと別行動を取ってたりしていた。
その合間に、氷也はテンテンや香燐と逢瀬を重ねていたのだが、さすがの一言に尽きる。
「悪い悪い！
そう睨むなよ…頼むから写輪眼で睨んでくれるな」
ただ、今回の大蛇丸襲撃によって起きた数々の事象の中で、氷也が何よりも驚いたことはナルトの身に起きた変化だろう。
ナルトが大蛇丸に吹き飛ばされた後、急いでうちはサスケ達のもとに戻ると、大蛇丸に呪印を刻まれ苦しむうちはサスケと、何もできずに泣くだけの春野サクラが待ち構えていたのだ。その他にも、大蛇丸の侵入に気付き駆けつけたみたらしアンコが同じく呪印によって苦しんでいたが、それは氷也が処置をしていた。
そして、ナルトは大蛇丸を倒すことができなかった己に怒りが湧く

と同時に、己の弱さを痛感し失意に暮れたのである。その感情が、ナルトの瞳に変化をもたらしたようだ。
ナルトの内に封印された〝九尾〟曰く、ナルトの身に起きたそれはとある人物の先祖返りとのことである。
「音隠れの変なのが襲いかかってきたってばよ。
…ブッ飛ばしたけど。そしたら今度はサスケが暴走するしよ…さすがに疲れたってばよ」
「お疲れ。
とりあえず、うちは達も大丈夫そうだから、さっさとゴールしちまうか」
とにもかくにも、第7班は一難あったものの第二の試験を突破するのである。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第十三章

〝コピー忍者〟の異名を忍界に轟かせるはたけカカシと並び、木ノ葉隠れの里屈指の実力を持つ上忍――〝木遁のテンゾウ〟ことヤマト。彼は、第7班の担当上忍でもある。

そのヤマトが担当上忍を務める第7班は、〝白い悪魔〟と〝二代目黄色い閃光〟を擁しており、現在の木ノ葉隠れの里で最も活躍するチームとして有名だ。

「は？」

ただ、活躍する一方で第7班は大きな問題を抱えていた。それは、ヤマトが受け持つ下忍の2人があまりにも優秀で、それと同時に……それ以上に問題点が多いからである。

「ナルトが…何だって？」

「だから、ナルトが写輪眼を開眼したって話…」

短くもなく、長くもないヤマトの人生に於いて、恐らく第7班の2人の教え子は人生最大の悩みの種だろう。彼らを受け持って数ヶ月……ヤマトはたった数ヶ月で、彼ら以上の悩みと苦労は、これから先の人生で絶対に起きず、現れることがないだろうと強く確信すらしていた。

「誰が…写輪眼を開眼したって？」

「だからナルトが写輪眼を開眼したって…ヤマト先生、大丈夫か？」

そして、ヤマトに降りかかった今回の問題は、現実逃避したくなるほどに大きな問題だったようだ。

「ナルトが何だって？」

「だからッ――――」

この後、話は3回振り出しに戻った。

木ノ葉隠れの里の三代目火影・猿飛ヒルゼンが深いため息を吐き出すと、気持ちを察したヤマトは内心、うんうんと頷いていた。それはきっと、ヤマトも三代目と同じ気持ちを味わったばかりだからだろう。

氷也とうずまきナルトが所属する第７班が第二の試験を通過して数時間が経過したが、氷也、ナルト、ヤマト、三代目火影の４人が集った部屋は現在悩ましげな雰囲気が漂っている。

ただ、悩みの根源達は能天気な様子で、ヤマトと三代目の悩みなどまったく気にした様子など見られない。子供は元気に過ごして問題を起こし、大人はそれに悩まされる……それは世の常であり、平和である証拠なのだろう。

「ナルトが写輪眼を開眼し、氷也が白眼の能力の一部を擬似的に再現した…と。

儂はいったいどこからどう突っ込めばいいんじゃ？」

しかし、何事にも限度というものがある。

三代目火影にも許容範囲がある。

ただでさえ火影としての業務に忙殺される毎日なのだ。そこに来て、里抜けした元弟子が中忍試験に侵入し、木ノ葉のとある下忍を襲撃したのもある。そんな前代未聞の事件も起きたというのに、日向一族でもうちは一族でもない者達が、一族の証ともされる瞳術を開眼し、尚且つ擬似的に再現した。理解不能である。

しかも、ナルトの写輪眼に至っては、うちは一族の更にその上――全ての忍の祖の〝先祖返り〟による開眼だろうと九尾が言っていた。もちろん、この話に関しては、面倒な事態になるからと氷也がナルトに箝口令を敷いていた。もっとも、ナルトは話の内容を今一つ理解できていなかったのもある上に、長い話が苦手なこともあり途中で眠ってしまっていた。きっと、明日にはすっかり忘れているだろう。

唯一の救いと言うより、何も言わずして三代目とヤマトが勝手に解釈してくれたのには、氷也も安堵を通り越して万々歳といったところだろう。

「とりあえず、今はナルトの写輪眼については後回しにするべきか…。

まずは大蛇丸についてじゃ。
じゃが、ナルトが写輪眼…後回しにするには大きな問題すぎる」
「そうですね。
考えられるものとして、ナルトのご両親のどちらかの先祖に〝うちは一族〟の者がいたとしか…ただ、恐らくは木ノ葉設立前の時代まで遡ってしまうでしょう」
そこまで話し合ったところで、三代目とヤマトは深いため息を吐くと同時に、胃に痛みを感じた。
「あ！俺、ちょっとアンコさんの様子見てきますね」
そして、真実を知る唯一の者である氷也は、自身が開発してしまった氷遁瞳術（白眼擬き）は、些細な問題どころかまったく問題視されていないと判断し、その場をあとにする。

??

「あッ――――」
室内に響き渡る艶やかな女の声。
「封印術に問題はなさそうですね。
確認はこれくらいにしておきましょう」
今度は、耳触りのいい男の声が響いた。
男は冷静な様子でそう呟きながら、一糸纏わぬ女の素肌から手を放し、背を向ける。
「あ…」
すると、背を向けた男の背後から、残念そうな女の声が響く。男は振り返らないが、背後では女が一糸纏わぬ格好で物欲しそうな瞳を向けている。
そんな彼女の様子を、まるで背中に眼がついてるかのように把握している男は、気付かれないように口角を上げていた。
「ま…待って…も、もう少し…見てくれない？」
「どこか悪いところでも？
なら、俺ではなく医療忍者に見てもらうべきです。呪印と封印術に

関してならある程度は対応できますけど、それ以外は畑違いですよ」
それでも、男は敢えて突き放すように、これ以上は己にやれることなどないと告げ、女のもとから立ち去ろうとする。
「お、お願い！待って！
調子が悪いとかじゃないの！アンタじゃないとダメなのッ！アンタに触られて…それからずっと…そのせいで…私ッ、アンタといると身体が疼いちゃうの！我慢できないの！」
だが、そんな男に対して女は、手で隠していた乳房を露にしてしまいながらも、己の欲望を我慢することができずに、男に思いの丈を伝える。これが男の作戦の内だと気付くこともなく…。
これもきっと、男が二度も中途半端なところで行為を止めてしまった効果なのだろう。女の身体は今、これまで味わったことがないほどに昂っているのである。その昂りと疼きを、女はこれ以上我慢できずにいるのだ。
「やれやれ…俺は医療忍者ではないんですけどね。
けど、俺にしか対処できないのなら、責任を持って対処するとしましょう。
（今の俺は医療忍者…いや、ドクター・氷也。
このどこまでも甘美な女体を我が手で治療する。これぞ――――
〝イチャイチャドクター〟）」
男が振り返ると、それまで切ない瞳を向けていた女の瞳が歓喜に震えている。
伸ばされた男の手に、女の昂りと疼きは更に増す。
「は、早く…来て」
「そう焦らないで」
そして、男の手が軽く触れただけで、女の身体は強烈な刺激を受け、これまで抑えつけていた全てが爆発してしまう。
室内に響き渡る甲高い声。一回り程も歳の離れた男女が今、この部屋にて…。

それから、時間は幾分か経過し…。
「ぐぬぬ」
「氷也？どうしたんだってばよ？」
みたらしアンコの経過観察という名のお楽しみを堪能中の氷也ではあるが、実は堪能しているのは氷遁・氷分身の術の分身であり、本体はストレスと胃痛によって疲れ果てた三代目とヤマトがいる部屋に待機させられていた。
しかも残念なことに、氷也のこの術はオリジナルと分身が情報を共有できる特性を持っており、つまりはお楽しみ中の状況（イチャイチャドクター）が、分身からオリジナルに即時配信されているようなものである。
「自分自身に嫉妬するっていう稀有な体験中。
あと、俺の分身術の恐ろしさというか万能性を身を持って体験中」
氷也は今、己の分身に激しく嫉妬していた。
それと、術を解除した後に情報を得ることができる〝影分身の術〟と、常に情報が共有できる〝氷遁・氷分身の術〟の性能の差を意外な形で、改めて痛感させられているようである。
慣れとは恐ろしいもので、氷遁を扱える氷也は何も意識することなくこの術を使っていたが、まさかこのような形で凄い忍術であったことを知るとは複雑な心境だろう。
ただそれはともかく、今は別の問題だ。
「君達…事の重大さを理解してるかい？」
「はあ…ナルト、おぬしは写輪眼を開眼したことを今は絶対に公にしてはならぬのじゃぞ？」
疲れ果てた様子のヤマトと三代目が、いつになく疲労困憊といった様子で氷也とナルトに視線を向けている。
九尾から真実を聞かされた氷也とナルトと、真実を聞かされていない三代目とヤマトに温度差があるのは当然。ただ、三代目とヤマトが真実を知った場合は、きっとそれどころではなくなるだろう。
とはいえ、氷也も自身にも深く関わってくると九尾から聞かされて

いる。普通なら、動揺していてもおかしくはない。その内容は、あまりにも壮大すぎるものだったはずだ。
それなのにここまで興味無さげな様子なのは、元々知ってたのか気付いていたのか、はたまた興味がまったくないのか……それともただのバカなのか…。九尾から聞かされたのは、ナルトが写輪眼を開眼した理由と、写輪眼がどのようにして生まれたのか、何故それを九尾が知っているのかである。
おまけに、ナルトは写輪眼のその先にある瞳術を開眼する可能性を秘めていることまで告げられている。九尾曰く、この世で最初に写輪眼を開眼したのは、〝六道仙人〟なのだそうだ。その六道仙人が写輪眼から〝輪廻眼〟へと行き着いた。それが伝説の始まりだ。
ただその後、写輪眼が世代を経ることで血が薄れてしまった。つまり輪廻眼の成れの果てが現代の写輪眼ということである。
九尾はそれ以外にも氷也達に教えてくれた。九尾含む尾獣の集合体が存在したことと、その集合体と写輪眼や輪廻眼の関係性。さらには尾獣を生み出したのが六道仙人であったことまで。
その六道仙人の先祖返りが起き、ナルトは写輪眼を開眼してしまったのだ。
「わかってるってばよ！」
写輪眼はもしもの時以外は使わねェ！」
だが、氷也もそうだが、ナルト本人に至っても本当に理解しているのか、できていないのか…。
「頼むから本選で使わないようにね」
「おぬしらは本当に毎度毎度…」
とにもかくにも、父方か母方かはともかくとして、ナルトの祖父母よりも上にうちは一族出身の者がおり、それによる先祖返りによってナルトは写輪眼を開眼した可能性が高いということで話は落ち着いた。先祖返りという答えそのものは、強ち間違いではない。だが、木ノ葉隠れの里設立時に起きたとある事例を考えたらば、人柱力であるナルトが写輪眼を開眼してしまったことは、他の者達に知られたならば大きく問題視されてしまうだろう。もし、ナルトが人柱力でなけれ

ば、三代目とヤマトがここまで悩むことはなかったはずだ。
そして、三代目とヤマトが可哀想なのは、ナルトの瞳力が増し、完全に六道仙人の先祖帰りが起きる可能性があることである。もっとも崇高とされる輪廻眼だが、2人からしたらもっとも凶悪な瞳術となるかもしれない。
「あ、でも俺が結界張れば、修行くらいいいだろう？
もしもの時に使えない代物ってのもな。ちゃんと鍛えとねェと」
「まァ、それくらいであれば…じゃが、写輪眼を鍛えるとなると、これまでとは勝手が違ってくる。どうするつもりじゃ？」
その質問は、三代目にとって悪手。自ら地獄へと足を踏み入れたのも同然だ。
「そこは大丈夫！俺達に任せときなさい!!」
自信たっぷりな様子の氷也を見たことで、三代目とヤマトは背筋が震え冷や汗を流している。触れぬが仏。聞かなければよかったと後悔しても後の祭りだ。
氷也とナルトのそばには……正確にはナルトの内側にだが、写輪眼を忌み嫌うと同時に、誰よりも写輪眼を知っている存在がいるのだ。六道仙人の写輪眼を知る九尾がいる。
ナルトの写輪眼を鍛える存在として、九尾以上の適任者はいないだろう。
今後もし、ナルトが写輪眼を発動して戦う姿を三代目とヤマトが目にする機会があったとしたら何を思うか…。
二代目黄色い閃光として、うずまきナルトの名は忍界に広まり始めているが、まさか忍の祖の先祖返りを起こし、何れは二代目六道仙人と呼ばれる可能性もあるなど想像するだけで恐ろしい。それが知れ渡れば、忍界は大きな衝撃を受ける。
もっとも、一番大きな衝撃を受けるのは木ノ葉隠れの里だろう。本来なら、忍の祖の後継者が己の住む里から誕生することは喜ばしいことなのだが、それがナルトとなれば話は変わってくるのだ。木ノ葉の住民達のナルトに対するこれまでの行いを考えたならば当然のこと。さすがに、謝罪もなく掌を返す愚かな真似をする者はいないだろう。

そう思いたいところだ。
だからこそ、ナルトが今後どのように成長するかも含め、写輪眼の開眼についても冷静に対処せねばならない。
そう、冷静に対処せねばならない……のだが、ナルト本人が天下のイタズラ小僧ときた。隣には、ナルト以上の問題児〝エロスの伝道師〟氷也がいる。
事は、三代目が願うようには進んでくれないだろう。
「とりあえず、ナルトは幻術はからっきしだし、写輪眼開眼してもそこは変わんないだろうから、〝見切り〟を重点的に鍛え上げようぜ」
「おう！」
氷也とナルトが木ノ葉にとってすでに大きな戦力であることは間違いない。その一方で、大きな力故に更なる災いを呼び寄せる存在であることも事実。
三代目の火影人生に於いて、間違いなく過去最大の事案だ。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第十四章

第二の試験真っ只中のなか、開催里である木ノ葉隠れの里から少し離れた森の中で、とある事件が起きていた。

事の発端は、班員を1人失ったことで第二の試験を失格してしまった草隠れの里の忍達が、草隠れに帰還中の時のこと。草隠れの忍達は、何者かの襲撃を受けてしまった。そして、瞬く間にもう1人が惨殺され、赤い髪のくノ一だけが生かされたのである。

襲撃者の目的は最初からそのくノ一だったようだ。

くノ一の名は香燐。強い生命力と封印術に長けた〝うずまき一族〟の血を引く数少ない末裔である。

「香燐は俺の女だ。

テメエにゃ渡さねェ」

しかし、窮地に陥った香燐のもとに救世主が現れた。

「ひょ…氷…也？」

美しく長い白髪を靡かせる絶世の美貌を持った男。

「あらあら…この前は二代目黄色い閃光。

今度は里の狂気（白悪魔）の再来。立て続けに、なにかと縁のある子供達と出会すものね」

木ノ葉最強の下忍と呼び声高い逸材――氷也。

「大蛇丸だな？」

第二の試験を通過し暇を持て余していた氷也は、お気に入りの女達のチャクラを感知してみたところ、香燐が置かれた状況を知り、担当上忍や三代目火影の制止を振り切り、駆けつけたようだ。

「あら…私を知っているのね」

対して、氷也と相対するのは木ノ葉の抜け忍にして、氷也の父親である自来也と同じく〝三忍〟に数えられる大蛇丸だ。

中忍試験に侵入し、木ノ葉（うちはサスケ）の下忍の1人を襲撃し、その場に居合わせたうずまきナルトと激闘を繰り広げた超危険人物である。

「そりゃあな。

俺が誰の息子か知らんアンタじゃないだろ」
「……ええ、そうね。
顔は悪くない…それどころか、素晴らしい。それなのに、自来也の息子なのが残念で仕方ないわ」
その大蛇丸が一瞬で間合いを詰め、氷也に向けて殺意の籠った一撃を容赦なく振るってきた。大蛇丸が持つ名刀の一振りは、屍と化してしまった草隠れの忍と同様に、氷也の命を確実に奪いにきている。
「その程度の速さで俺は殺られねェよ」
──口寄せ・雷光剣化〝首斬り包丁〟──
「…!
へェ、やるじゃない」
とはいえ、香燐を助けにきた氷也が簡単に殺されるはずがない。最初から大人しく殺されるつもりで来るはずもない。
身の丈以上もある大刀が氷也の手に握られている。それは、氷也が波の国で激闘を繰り広げた敵の忍刀だ。
墓標にするなど勿体ないと、口寄せ契約を上書きし、新たな使い手となったのである。
「それに、その忍刀は〝鬼人〟再不斬の首斬り包丁。
あなた達（第7班）が討伐したというのは本当だったのね。戦利品ってとこかしら？」
「そんな大それたもんじゃねェよ。
俺は便利な物はとことん使う主義なだけだ！」
──乱獅子髪の術〝氷夜〟──
大蛇丸の強力な斬撃を防いだ氷也は、腕にありったけの力を込めて大蛇丸を弾き飛ばすと、髪の毛にチャクラを流してさらに伸ばし、大蛇丸を捕縛する。
「く…これは自来也の術ッ!?
親子揃って忌々しい──────ッ！
（し、しかもこれは…ただの乱獅子髪の術じゃない。とてつもなく…寒い！）」
すると、氷也に捕縛された大蛇丸は、彼の髪の毛の心地好いほどの

肌触りを感じると同時に、急激な寒さに襲われる。
「こ、これは氷遁!?」
氷也は髪の毛にチャクラを流し伸ばしただけではない。そこに加えて、氷遁チャクラも流すことで、冷気によって大蛇丸の体力を奪い身動きを封じているのだ。この術の恐ろしいところは、最終的に眠るように凍死させることも可能なところだろう。
「安心しろ、殺しはしねェ。
アンタは木ノ葉で色々やらかしてくれたからな、このまま連れて――ッ!?」
だが、相手は彼の大蛇丸だ。
大人しく捕まっているなどあるはずがない。
「ひッ、きゃあァァァァ!!」
目にしてしまったあまりにも恐ろしい光景に、香燐が恐怖のあまり叫び声をあげてしまう。
捕縛された大蛇丸の口が大きく開き、そこから手が出てきたのである。恐怖以外の何物でもないだろう。そして、大蛇丸の中から大蛇丸が姿を現した。
「おいおい…まるで蛇の脱皮じゃねェかよ」
そう、まさに蛇の脱皮のように、大蛇丸が自身の皮を脱ぎ捨てて粘液まみれの大蛇丸が現れたのだ。
忍はチャクラを使用することで、一般的にはあり得ない忍術を駆使して戦うが、それでもこれは常軌を逸しており、人間の為せる術ではない。
「厄介な術を持ってるじゃない。
(私の一太刀を防いだあたり、剣術も相当な腕前。術も多彩で氷遁の血継限界持ち。自来也の息子じゃなかったら私のモノにしたのに…勿体ないわね)
〝万蛇羅の陣〟!!」
そして、氷也から距離を取るように後退した大蛇丸は、今度は口から夥しい数の蛇を吐き出した。
氷也も含め、忍は忍術を使用する際に口から吐き出すことが多い。

火遁然り、水遁然り…。ただ、大蛇丸のこの術は何かが違う。
「い、いやぁぁぁ…」
香燐は腰を抜かし、恐怖で震えている。まるで大津波のように蛇が押し寄せてくるのだから当然ではあるが、それだけではない。
「口からゲロゲロ気持ち悪い奴だな。
香燐が怯えちまってるじゃねェか!!」
大蛇丸が蛇を吐き出す姿は嘔吐しているかのような光景なのである。大量の嘔吐物が大津波の如く押し寄せる光景など身の毛がよだつ。
氷也は迫りくる大量の蛇を消し去るべく、素早く印を結ぶ。怯える女は氷也の趣味ではない。それに、怯えているのが自身のお気に入りであれば尚のこと。その気持ちが印を結ぶ速さにも現れている。氷也にとって、女は喘ぎ狂わせてこそなんぼ……なのだ。
「かッ消す!!」
──灼遁・五右衛門〝燎原〟──
チャクラを変換した油を吐き出すと同時に火遁で着火するだけではなく、そこに風遁チャクラも混ぜ合わせることでただの水遁ではかき消すことのできない灼熱の炎を放つ。性質を混ぜ合わせることに於いて、氷也は群を抜いている。以前までは分身を利用することによって、風遁と蝦蟇油の後押しで火遁の威力を底上げするという不完全な術だったが、今は分身を必要とすることなく、自身の繊細なチャクラコントロールで完璧にそれが可能となったのだ。
!?
(氷遁だけでなく灼遁まで!?
こ、このガキッ、血継限界を2つも扱えるなんてッ!!)」
さすがの大蛇丸も、〝血継限界〟を2つも使用する氷也の才能に驚愕している。大蛇丸の情報網でも、血継限界を2つも使用できるのは氷也の他にたった1人だけで、実際に目にするのは初めてのことだ。
対となる極寒の氷遁と灼熱の灼遁……厄介極まりない。
「す…凄い…」
恐怖で怯えていた香燐も、様子は一転して唖然としている。威力も

さることながら、範囲も広大な灼遁はほぼ一瞬にして大量の蛇を燃やし尽くしていたのだから無理もないだろう。
忍び五大国の隠れ里ならともかく、小国の隠れ里にこれ程の忍術を扱える者はまずいない。いたとしても数十年に1人現れるか現れないかで、突然変異のような確率だ。
だからこそ、香燐の驚きの度合いは凄まじいものである。
「大人しく捕まれ」
「九尾のガキといい、自来也のクソガキといい…アンタ達は親子共々本当にどこまでも癪に障るわね!!」
逆に、大蛇丸の驚きは激しい怒りへと変貌していた。
額に青筋を浮かべ、先程までの余裕さはまったくと言っていいほどない。
またしても口から蛇を口寄せし、しかし今度はその蛇の口から刃が急速に伸び、しかもあろうことか香燐へと襲いかかってきた。
「え?」
「ッ――――おっと!
香燐に指一本触れさせねェよ!」
咄嗟のことではあったが、氷也が香燐に傷一つ負わせるはずがなく、首斬り包丁で鋒の方向を変えるように受け流し、そしてそのまま大蛇丸へと突進し首斬り包丁を振るう。
「チィッ!
(ミナトのガキではないけれど、自来也のガキが〝うずまき一族〟の女を助ける光景も本当に忌々しいったらありゃしない!)」
氷也の鋭い斬撃を辛うじて躱した大蛇丸。ただ、大蛇丸の表情はよろしいものではない。氷也がうずまき一族出身の香燐を助けるその光景に、盛大な舌打ちをしている。
かつて、雲隠れの里の忍達に拉致されたうずまき一族出身のくノ一をたった1人で救出した木ノ葉隠れの里の忍がいた。大蛇丸にとって、きっとその人物は因縁ある忍なのだろう。
「香燐、俺が絶対に守ってやるから安心しろ」
「う、うん!

（か、カッコイイイイ！
ヤ、ヤバいって！氷也のこんな姿見せられちゃったら、こんな状況なのに濡れてきちゃったじゃん!!）」
大蛇丸を相手に、香燐をお姫様抱っこした状態で不敵な笑みを浮かべ、彼女を安心させるように声をかける氷也の姿が、大蛇丸の目には因縁ある忍と重なって見えている。
赤髪の女が氷也に見惚れるその様もまた、苛立たしいことこの上なしだろう。
「さて…と、香燐もいることだから一気に決めさせてもらうぞ、大蛇丸。俺の通り名（白い悪魔）の所以……雪一族の秘術を味わって逝くといい」
──氷遁秘術・白魔〝天牢雪獄（てんろうせつごく）〟──
そして、氷也はどんな状況だろうと女を魅了する。
瓢箪らしきものを口寄せした氷也が、ニヤリと口角を上げながら瓢箪を開けると、瓢箪から空間一帯を覆い尽くさんばかりの大量の雪が放出（口寄せ）された。
瞬く間に辺り一面が白銀世界である。
時季ではなく、季節外れ。
しかし、季節外れの雪も悪くはない。それどころか、どこまでも美しい。
「綺麗…」
そこには観る者を魅了する絶景がある。
だがその一方で、綺麗な花は棘があるもの……とでも言うべきだろうか。
大蛇丸に大自然の極寒の猛威が襲いかかっている。
雪は熱に弱い。ただ、氷也の操る雪の秘術は規模があまりにも大きすぎる。瓢箪の内側に、口寄せの印が刻まれているのだろう。瓢箪から止まることなく雪が放出され続けており、その雪を手掌で自由自在に操ることで、大蛇丸を追い詰めている。
「こ、この──ッ、クソガキ！」
「捕まえた。
脱皮する変わり身の術も、雪の圧力でぺしゃんこにされたらどうな

るかな？」
　見るからにプライドの高そうな大蛇丸にとってこの上ない屈辱。年下に追い込まれていることもだが、氷也が自来也の息子であることが、その屈辱により一層拍車をかけている。
　氷也に捕獲されてしまったのも、大蛇丸が怒る大きな要因だ。
「自来也のガキ如きが……ふん、まァいいわ。うずまき一族のその小娘は今回は諦めてあげる。
（写輪眼を持たないガキに……イタチ以外のガキに……この私が追い詰められるなんてッ！）」
　何より、大蛇丸にとって氷也に負けるということは、自来也に負けたも同然。
　それだけは我慢ならないのではないだろうか。
　それでも、真の目的がある大蛇丸は、潔く香燐を諦め撤退する様子を装っていた。
「逃がすかよ！」
――氷遁秘術・白魔〝紅雪〟――
　無論、大蛇丸を逃がすつもりなど一切ない氷也は、雪を握り潰すように拳を握り、大蛇丸を圧殺する。
　白く美しい雪が紅く…。

「二億両…た、確かに」
「では、この娘――――香燐は正式に木ノ葉隠れの里の下忍として迎え入れさせてもらいます」
　氷也は現在、三代目火影・猿飛ヒルゼンから密命を受け、草隠れの里を訪れている。
　正確には、密命を受けたのではなく、無理矢理密命扱いにさせたと言うべきだろう。そもそも、中忍試験に出場している氷也が他里にいること自体がおかしいのだが…。

いったい、何故このような事態になっているのか…。
ちなみに、たった今のことだが、氷也がお気に入りの香燐を娶る為にポケットマネーから二億両支払い、香燐を買ったところである。
さすがは超人気エロ挿し絵画家。二億両を現金一括払いとは、月にいったいどれだけ儲けてるのだろうか…。
「ひょ、氷也……こ、これってどういう？
（え？え？
ウ、ウチ、氷也に買われたの？ってことは、身も心も全てが氷也のモノ？所有物？
氷也に縛り付けられて束縛されちゃう？私の身体にある忌まわしい噛み跡全部、氷也に上書きされて、氷也の印刻まれて、それからそれから……嬉しすぎて濡れ濡れじゃんか!!」
そんな超人気エロ挿し絵画家に見初められ、買われた赤髪のくノ一――香燐は、今後の展開を妄想することで鼻息荒く興奮していた。妄想の内容は言うまでもないだろう。氷也からのイヤらしい言葉責めの数々。目隠しをした状態で性感帯を弄られ、全身性感帯に開発されてしまう恥辱プレーなどなど。
香燐の願いを一言で語ったならば、氷也に〝犯されたい〟といったところだろう。見た目にそぐわないムッツリさ全開の妄想で興奮してしまっている。
「香燐、お前は大蛇丸に目をつけられた」
それはともかく、いったい何故このような状況になってしまっているのか…。
事の発端は言うまでもなく、うずまき一族の血を引く香燐が大蛇丸に狙われた一件だ。
「お前を狙って大蛇丸がまた襲撃してくる可能性がある」
今回の事件は、香燐の危機を察知して駆けつけた氷也が大蛇丸を撤退させ事なきを得たが、たまたま運が良かっただけだ。氷也が気付かなければ、香燐は間違いなく連れ去られていたことだろう。
そして今後、今回は氷也によって失敗してしまったが、大蛇丸が再び香燐を狙う可能性もある。

それを危惧した三代目火影・猿飛ヒルゼンは、当事者であり香燐を守り抜いた氷也と大蛇丸を誰よりも知るであろう自来也との間で話し合いを行ったのだ。
「そうだのォ。
大蛇丸は執着心が強い。簡単に諦めないどころか、ますます執着するタイプだ。大蛇丸が香燐を狙って草隠れを襲撃したらどうなるか――明白だのォ」
その結果、小国の隠れ里である草隠れの里に所属する香燐を木ノ葉隠れの里へ移籍させるべきだと判断したのである。と言うより、氷也が強引に押しきった。それにより、氷也が自来也と共に草隠れの里を訪れているのである。
ただ、草隠れの里が回復能力と広大な感知術を持つ香燐を理由はどうあれ簡単に手放すのだろうか…。
「ま、まさかあの自来也殿にご子息がおられたとは…。
(くッ、香燐の能力は惜しいが、今の我が里に〝三忍〟の1人に数えられる大蛇丸を抑えられる忍はいない！里を滅ぼされる可能性もある！香燐を売って得た二億両を里の強化に充てるのが懸命か!?)」
その為の自来也の存在だ。
自来也は、香燐を手放した場合と手放さなかった場合で、草隠れが得られる利益と大蛇丸によって受ける被害を語ることで、香燐1人と里を天秤に掛けさせたのである。
香燐を狙うのは大蛇丸。さらには自来也程の大物が出てきては、草隠れも決して無視できない内容だ。
いや、草隠れの里からしたら選択肢は一つしかない。
「か、香燐をよろしくお願い致します」
こうして、氷也は新たなエロくてスケベな女を手に入れたのであった。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第十五章

短いようで長かった5日間……死の森で行われた中忍試験第二の試験も終了した。

ただ、本当の試験はここからなのだろう。出場者の誰もが中忍を目指し試験に参加しているが、本選に出場できるのはごく僅か。しかも、そのごく僅かな下忍達でも全員が中忍になれるわけではない。そのごく僅かな下忍達の内から、中忍になれるのは果たして何人いるか…。もしかしたら、1人も中忍になれないかもしれない。

実際に、中忍昇格者が1人もいなかった年もあるのだ。

それだけ、狭き門なのである。

ここからが、中忍昇格をかけた本当の戦(試験)いだ。

「今日こそ勝たせてもらうぜ、サスケくんよォ！

〝擬獣忍法・四脚の術〟!!」

しかし、第二の試験を突破した下忍達は本来、中忍試験本選についての説明を受けた後に、くじ引きによって本選の組み合わせを決めることになっているのだが、見るからに第二の試験を突破した出場者達はくじ引きを行っている様子などまったくなく、どういうわけか個人戦が行われている。

今現在執り行われているのは、本選出場をかけた予選試合。その第一試合が行われていた。

木ノ葉隠れの里で開催中の此度の中忍試験だが、例年にも増して優秀な下忍達が多く、その証拠に第一の試験、第二の試験と続いて想定を上回る人数が残っていたのだ。

その結果、主催里である木ノ葉は本選出場者を絞るべく、規則に従って予選を執り行うことを決定したのである。

ちなみに、予選が執り行われるのは5年ぶりとのことだ。

予選、本選とここからの試験はこれまでのチーム戦とは違い、個人戦が行われる。それはつまり、同じチーム同士で戦う可能性もあるということだ。

そして、この予選に至っては単純なもので、ただ己の強さを証明すればいい。強い者が勝ち、勝った者が本選へと駒を進めるのだ。
もっとも、戦うまでもなく最初から本選出場が決まっている下忍が何名かいるのだが…。
「へへッ……なッ!?」
「この程度でか?
お前じゃ相手にならないな。負け犬は大人しく鳴いていろ」
その内の1名は第一試合からさっそく実力の高さを披露している。それどころか、試合開始と同時に先手必勝とばかりに正面から突っ込んできた相手の攻撃を足一本で軽く受け止め、負け犬の遠吠えすら吐かせずに格下だと宣告し、尚且つ実力の違いをその身に叩き込むのである。
第一試合――――ウチハサスケ　ＶＳ　イヌヅカキバ
一試合目から木ノ葉隠れの里の下忍同士……しかも、同期対決となったわけだが、大きな実力差が明らかになってしまうこととなったようだ。
「く、くそ!
けど、まだ――――ッがはッ!!」
馬鹿正直ながらも、犬⊠キバの攻撃は素早い体当たりだった。それを、写輪眼を発動することもなく足一本で簡単に受け止めたうちはサスケは、一旦距離を取って次の攻撃に移ろうとする犬⊠キバの真下付近へ入り込み、顎に強烈な一撃を与え蹴り上げる。
「は…速いッ!
(し、しかもあの動きはボクの表蓮華!!
ま、まさか、動きをコピーしていたのか!?)」
そんななか、うちはサスケの速さに誰よりも驚愕している者が1人いた。正確には、速さにではなくうちはサスケの一連の動きに対してである。
その者は、中忍試験第一の試験が始まる直前、名門エリート一族と称されるうちは一族出身のサスケが気になり、決闘を申し込んだ一期上の下忍――ロック・リーだ。

その決闘では、ロック・リーが体術使いとしての実力の違いをサスケに見せつけたわけだが、どうやら第二の試験で大事件に巻き込まれたサスケは、それがきっかけとなりロック・リーの予想を遥かに上回る成長を遂げていたようだ。

おまけに、決闘の際に見せた一部の動きをうちは一族の代名詞である〝写輪眼〟でコピーされていたらしく、ロック・リーの驚きの度合いは相当なものだろう。

「ここからはオレ流だがな。

〝火遁・豪龍火の術〟！」

とはいえ、全てをコピー出来ていたわけではないらしく、サスケはそこから彼なりのオリジナルへと繋げていく。

「ぐわあァァァ!!」

素早く印を結んだサスケは、身動きの取れない空中へ蹴り上げた犬⊠キバに龍を象った火遁を複数放って着弾させ、更にはそこから追撃する。

「サ、サスケくん！これ以上はッ――!?

（は、速いッ!!）」

ただ、見るからに勝負はついており、サスケの追撃は過剰なものだ。

これには、試験官も止めに入ろうとするが時すでに遅し。

いや、サスケの速さが下忍レベルを遥かに凌ぎ、それどころか試験官すら上回るものだったのだ。

焦る試験官や担当上忍達を他所に、凶悪な笑みを浮かべながら飛び上がったサスケは、火遁の直撃をくらって重傷を負い、もはや意識すらない犬⊠キバに次々と体術を叩き込んでいく。

「これで終わりだ。

〝獅子連弾〟!!」

同期であろうと、サスケには関係ない。最後にサスケが放った蹴りは無情にも、犬⊠キバを地面へと叩きつけてしまった。

勝者は一目瞭然。

「い、医療班！

急いでください！」

しかし、会場は歓声に包まれることなく……恐怖に包まれている。
「氷也…ナルト…首を洗って待ってやがれ」
最初から、サスケは対戦相手(犬☒キバ)に興味など一切示してなどいない。サスケが見据える先にいるのは、同じ木ノ葉の忍でありながらサスケの前を進む2人――〝白い悪魔〟と〝二代目黄色い閃光〟と、サスケがその手で殺したいと強く思う憎き仇のみだ。
「ふふ…。
(ああ…素晴らしいわ、サスケくん。
〝呪印〟に打ち勝ち、馴染むどころか、ますます闇に染まって増していく力。私と戦った時よりもまた一段と強くなっている。あなたなら本当に――あのイタチを超えることが出来るかもしれないわ)」
そんな状況で、ほとんどの者達が見たこともないサスケの姿に恐怖する一方、内心歓喜に打ち奮えている者がいる。
もしかしたら、この予選でもまだ一波瀾起きるのかもしれない。
一つだけ言えることは、白い悪魔と二代目黄色い閃光だけではないということだ。木ノ葉には〝うちは〟もいる。

??

天才エリート一族の末裔の実力の高さに驚愕すると同時に、同期相手にもかかわらず情け容赦ない姿に恐怖させられた後味の悪い第一試合とは打って変わり、第二の試験は非常に熱く白熱した試合展開となっている。
「ぐッ!?
(こ、これが〝二代目黄色い閃光〟!
重りを外したのに、それでもボクより速いなんてッ!!)」
「ゲジマユ!全力で挑んで来いってばよ!!」
第二試合――――ウズマキナルト　VS　ロック・リー
続いての試合も同じ木ノ葉の下忍同士の戦いだ。
オカッパ頭に全身緑のタイツと、一見ふざけた格好をしている下忍ではあるが、ロック・リーは木ノ葉で一番の体術使いと称されるマイ

ト・ガイの愛弟子であり、師匠譲りの体術使いである。
ただ、一期上の体術使いのロック・リーを相手に、ナルトは二代目黄色い閃光と謳われる所以である瞬身の術を駆使し、ロック・リーの体術を躱し鋭いカウンターを叩き込んだ。
ロック・リーの体術は下忍レベルを遥かに超えるものだが、ナルトはかつて忍界最速と謳われた〝黄色い閃光〟の後継者と称される速さを持っている。
先の戦いとは違い、圧倒的な力の差こそないが、ナルト優位で試合は進んでいる。
とはいえ、一見してナルト優位でこそあるが、簡単に終わるような試合ではないだろう。
「さすがは二代目黄色い閃光…。
(ですが、ボクもこのままでは終われない。終われるはずがない！そうですよね…ガイ先生!?
だから、今こそがボクの忍道を貫き守り通す時!!)」
何故なら、ロック・リーはかつてない強者を前にしたことで全力を出すことを決意し、己の全てを拳に乗せて勝負を挑むのだから…。
「これがボクの全力です。行きますよ――ナルトくん！
〝八門遁甲　第三　生門〟開!!」
次の瞬間、試合会場の地面の石版を割ってしまう程のチャクラが、ロック・リーの身体から溢れ出る。
まるで沸騰しているかのように、ロック・リーの身体は赤く染まっている。
八門遁甲。それは、体を流れるチャクラの量に制限をかけていると される〝八門〟と呼ばれる経絡系上にあるチャクラ穴の密集した体内門を開くことで、制限を外して本来の何十倍もの力を引き出す術だ。
だが、現在の木ノ葉の忍で八門遁甲を扱える忍はたった1人……だった。
「す、すげェ…すげェってばよゲジマユ!!」
その認識が今、下忍によって改められた。

八門遁甲を扱える下忍が存在するなど、前例がないわけではないが、非常に稀なことだ。しかもまさか、予選でこのような試合展開になるなど誰が想像できただろうか…。

これが本選だったならば、大いに盛り上がっていたはずだ。

「ゲジマユ、オレもお前の全力に全力で応えるってばよ！」

――雷遁・八色雷公（やくさのいかづち）　壱――

しかし、本選でなくともこの予選は大いに盛り上がっている。

「な、なんと…

（あ、あれは〝雲隠れの里〟の雷影達が代々継承してきた〝雷遁チャクラモード〟か!?

ナルトはどうやってあの術を…まさかこれも氷也が？）」

その一方で、三代目火影・猿飛ヒルゼン至っては盛り上がるどころか、かつて忍界大戦で激しい勢力争いを繰り広げた強敵の姿がナルトの姿に重ねて見え戦々恐々だろう。

幼き日から気に掛けていたナルトがここまで強く逞しく成長しているのを目の当たりにしたのも、三代目の驚きようにより拍車をかけているはずだ。

そして改めて、ナルトをここまで育て上げた白髪の少年――氷也の指導力の高さに感服する。素行に問題がありすぎるが、親子揃って末恐ろしさを感じずにはいられない。しかも、自来也がナルトの父親を育て、氷也がナルトを育てるという数奇な運命に特別な何かを感じずにはいられないでいた。

とはいえ、先の試合（第一試合）では不安を感じずにはいられなかった三代目も、かつての強敵を彷彿させつつも大きく成長したナルトと、下忍で八門遁甲を扱えるロック・リーという若き忍達の姿に木ノ葉の未来は安泰だと感じている。

「新しい時代の到来じゃな」

三代目は予選開始前、第二の試験を突破した下忍達の前で中忍試験の真の目的を語った。そもそも何故、同盟国同士が中忍試験を合同で行うのかを…。

友好、忍のレベルを高め合うのが目的ではあるのは事実だが、その

本当の意味を履き違えてもらっては困るのだと…。この試験は言わば、同盟国間の戦争の縮図なのだと口にした。
三代目が話す内容を、ほとんどの下忍達は理解できなかっただろう。
この忍の世界の歴史を紐解くと、今の同盟国とは即ち、かつて勢力を競い合い、争い続けた国同士であること、その国々が互いに無駄な戦力の潰し合いを避ける為に敢えて選んだ闘い場……それがこの中忍選抜試験のそもそもの始まりなのだと…。
厳かな声で語る三代目は、かつての大戦で起きた壮絶で悲惨な出来事の数々を思い出しているかのようだった。
無論、三代目の話に疑問を持つ下忍はおり、三代目に問いかけた。
ただ中忍を選ぶ為にやっているのではないのかと…。
三代目はその問いかけに、もっともだと頷きながらこのように答えたのである。
この試験が中忍に値する忍を選抜する為のものであることに否定の余地はないが、その一方でこの試験は国の威信を背負った各国の忍が命懸けで闘う場であるという側面も合わせ持っているのだと…。
国の威信。
それがいったい、この中忍試験とどう関係しているのか、ほとんどの下忍達が理解できていなかっただろう。
当然、国の威信とはいったい何なのかと問いかける下忍もいた。
ここに残った下忍達のほとんどが経験が浅く、国の威信などと、大それたことを言われても理解し難かっただろう。
そもそも、ほとんどの下忍達は与えられた任務ですら、ただこなしているだけにすぎない状況ですらあったはずだ。国の威信もだが、依頼人達からの里に対する信用、信頼などと考えたこともないはずである。
だからこそこの機会にと、三代目は下忍達に国の威信を背負っているとはどういうことなのかを説明した。恐らく、この場に残った下忍達の中でそれを理解していたのはほんの数名のみだったはずだ。
現在行われている予選……その1ヶ月後に行われる本選には、忍に

仕事の依頼をすべき諸国の大名や著名な人物が招待客として多勢招かれることとなっている。そして、各国の隠れ里を持つ大名や忍頭もその闘いを見ることになっている。本選では、出場者達が中忍昇格を懸けて血眼になって戦う。即ち、下忍達は里……延いては、国の代表として戦うわけだ。これから里、国を支える下忍達の勇姿は、国力を示すのにまたとない機会だろう。

国力の差が歴然となれば、強国には仕事の依頼が殺到し、弱小国と見なされれば、その逆に依頼は減少する。それと同時に他国に対し、己の里はこれだけの戦力を育て有しているという脅威……つまり政治的圧力をかけることもできる。

国の力は里の力。里の力は忍の力。そして本当の力とは命懸けの闘いの中でしか生まれない。

今この場に残った下忍達が如何に大きなものを背負っているのかを三代目は告げた。

きっと、ナルトとロック・リーの試合を眺める下忍達のほとんどが三代目の言葉を思い出し、改めて実感しているだろう。いや、下忍達だけではなく、上忍達も同じかもしれない。

ナルトとロック・リーは、知らず知らずのうちに木ノ葉の威信を背負い、そして木ノ葉の力を他里に示しているのだ。

「ゲジマユ、勝負だってばよ!!」

いったいどちらが勝つのか、それは誰にも予想がつかないが、ナルトとロック・リーは間違いなく脅威として他里に認識されているはずだ。

元々、ナルトは二代目黄色い閃光と称され、すでに他里からも警戒はされていただろうが…。そのナルトと張り合える存在が白い悪魔の他にも存在したとは想定外だったかもしれない。

もっとも、それはナルトにとっても同じくである。

ナルトも八門遁甲の凄さを肌で感じ取っているようで、頬を一筋の汗が伝っている。それでも、絶対に負けないと表情を引き締め……いや、かつてない強敵（ライバル）に向けて不敵な笑みを向けながら強大なチャクラを放出した。

本当の試合はこれからだと言わんばかりに、ナルトの全身から雷遁チャクラが溢れ、けたたましい雷鳴が鳴り響く。
ロック・リーの八門遁甲とは違い、ナルトの八色雷公は雷遁チャクラを身に纏い、身体を活性化させる術だ。体内に迸る雷が神経の伝達スピードを底上げすると同時に、全身を覆う雷はどんな術にも耐えられる強固な鎧ともなる。
「望むところです!!」
そして、実力ある若き木ノ葉の下忍2人がその場から姿を消した。
果たして、ここから先の戦いを目で追える者はいったい何人いるだろうか…。
「ったく、冗談キツいぜ。
(これで下忍?どっちかが予選落ち?ありえねーだろ。
カカシのとこのサスケといい、ガイのとこのロック・リーといい、ヤマトのとこのナルトといい…オレのとことは大違いじゃねェかよ。張り合える可能性があるとしたらシカマルの頭脳だけか…)」
上忍ですら、何人いるか…。
ナルト達と同じ新米下忍を担当する第10班の担当上忍・猿飛アスマは、自身の受け持つ教え子達とナルト達の実力の差に冷や汗を流している。それどころか、猿飛アスマは2人の動きを完全に捉えきれておらず、自身すら食われ兼ねない下忍達の実力の高さに愕然としていた。
しかし、猿飛アスマの心情などお構い無しに試合はさらに激化していくのだ。
「ぐふッ…ま、まだまだここからです!
〝八門遁甲　第四　傷門〟開!!」
ここまではナルトが速さで勝っていたが、ここに来てロック・リーがさらに門を開けたことで、拮抗した戦いへと発展している。
「ぐッ…こ、この…うおらァ!!
(ゲジマユの速さが増した!?これじゃあ、壱でギリギリ…もう一段階上げるしかないってばよ!)」
いや、どうやら状況はロック・リーが優位に立ちつつある。

八門遁甲は、有り体にいえば火事場の馬鹿力を意図的に発揮させる術だ。爆発力はナルトの八色雷公よりも上なのだろう。
ただ、第四　傷門まで開いたロック・リーとは違い、ナルトはまだ一段階目。そして、ナルトの八色雷公も八門遁甲と同様に、身体能力を意図的に向上させていくことが可能で、八段階増すことができる。
『ナルト…前にも言ったが、成長しきってないお前の身体じゃ、弐が限界だ。次できっちり決めとけ』
唯一、懸念があるとしたら、ナルトの身体が成長しきっていないこともあり、これ以上の段階はナルトの身体が術に堪えきれない可能性があるという点だろう。
どうやらそれについては、ナルトの良き相棒になりつつある九尾から口を酸っぱくして言われているようだ。
「（わかってるってばよ！）
ゲジマユ！勝たせてもらうってばよォ!!」
──雷遁・八色雷公（やくさのいかづち）　弐──
「負けません！
〝八門遁甲　第五　杜門〟開!!
（ぐッ…これ以上は…これで決めなければ！）」
もっとも、身体に負担がかかっているのはナルトだけではないが…。寧ろナルト以上の負担が、ロック・リーにかかっている。
決着の刻は近い。
「勝つのはボクです！
〝裏蓮華〟!!」
ナルトの真上に回り込んだロック・リーの渾身の一撃がナルトに迫る。
「ゲジマユ！
お前は強かったってばよォ!!」
だが、ロック・リーの渾身の一撃はナルトに当たることなく、ナルトは空中で身体を回転させながら攻撃を躱し、ロック・リーの身体を軸に背後へと回り込む形で上に昇り、右掌にチャクラの球体を作り出した。

そしてそのまま、ロック・リーの背中に叩き込む。
「オレは絶対に火影になる！」
――螺旋丸――
才能ある若き忍達の激突――ついに決着。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第十六章

第一試合は〝うちは〟。
第二試合は〝うずまき〟。
予選開始早々立て続けに、現在は滅亡してしまった木ノ葉隠れの里の名門一族の末裔達の登場となり、その両家出身の下忍――うずまきナルトとうちはサスケがそれぞれ圧倒的な力を見せつけ本選へと駒を進めることとなった。
しかし、第一試合と第二試合が下忍離れしすぎていた影響もあってか、それ以降の試合があまりにも御粗末な試合に感じずにはいられない状況となってしまっている。
第三試合は木ノ葉と砂隠れの里の対決だったが、砂隠れの名物ともされている〝傀儡使い〟の勝利となった。ただ、傀儡の術は砂隠れの名物でこそあるが、華やかさや派手さは一切なく、地味の一言に尽きるものだった。
続いて第四試合。木ノ葉のくノ一による同期対決。結果は引き分けである。
内容はあまりにも御粗末なちょっと強い子供の殴り合い。途中、秘伝忍術の発動によって金髪のくノ一が勝利したかに思えたのだが、秘伝忍術が破られ、最後は真正面からの殴り合いにて両者気絶。
やはり、第一試合と第二試合の盛り上がりが与えた影響は、良い意味でも悪い意味でも大きかったようだ。
とはいえ、意外なことにこの第四試合に大きく触発されていた者が1人だけいる。
「なるほど、キャットファイトか。
次の作品は、性的嗜好を変えてみて〝女の子同士（レズビアン）〟というのもアリかもしれないな」
意外でも何でもなく、忍とはまったく関係ない方向に触発されていたようだ。
言うまでもなく氷也だが、彼の場合はエロ小説家アシスタント兼エ

口挿し絵画家が本業なのだから仕方ない。本人曰く、忍は副業なのだそうだ。
「テンテン、香燐とヤッてくれないか？」
「はあ!?女の子同士で!?
というか！いつの間に新しい女!?
（香燐ってあの赤髪の…どっち!?）」
思い立ったが吉日。やはり、その眼で見てみたい欲求に駆られており、氷也は隣に立つ愛しき女へとおねだりする。
「ムッツリな赤髪メガネッ娘だ。
頼む。俺をこれまで以上に興奮させてくれ」
「あ…そ、そんな眼で…お願いしないでよ…」
氷也はテンテンの腰を抱き寄せ、熱く滾った瞳で彼女を見下ろしており、彼女はたったそれだけの行為で身体が火照ってしまっていた。
きっと、この予選が終わったらさっそく……そこから更に氷也を交えて３人（３Ｐ）で激しく淫らになるのが容易に想像できてしまうが、氷也のお願い事が成就したかどうかは想像だけに留めておくとしよう。
それはともかく、中忍試験本選の予選の結果について話を戻すとしよう。
第五試合。少し退屈気味になってきてしまったところで、満を持して――木ノ葉の〝白い悪魔〟の登場だ。
正直なところ、氷也の試合は最後が望ましかっただろうが、こればかりは致し方ない。電光掲示板に名前が表示されてしまったのだから、拒否権もなければ変更するわけにもいかない。何より、氷也が心から望んだ展開になってしまったことで、彼はこの試合を心から楽しもうとしている。たとえ、楽に勝てようとも時間をかけてじっくりと試合を進行（女体を開発）するつもりでいるのが手に取るようにわかる。
「まさか君と戦うことになるとはな…多由也」
「う、うっせェ…。
（ッ…よ、よりにもよって、どうしてコイツなんだよ!?勝てる気がしねェし、それどころか戦うのが怖いんだよ！）」
試験官を挟んで立つ氷也と多由也の様子は対照的で、どうやら音隠

れの里のくノ一である多由也も、氷也から何かされることを薄々感じ取っているのか、戦々恐々の様子である。
（快感を与えられる）
しかし、何もせずに引くわけにはいかない。多由也にもくノ一としてのプライドがあるのである。
「そ、そんな眼で見るんじゃ…ねェ…。
（な、何でだ？何でなんだ？
コイツを前にすると…それだけで身体が火照って…ウチの身体…ウチの身体じゃないみたいに…ッ…）」
もっとも、己の身体に起きた変化の正体にまったく気付いてない多由也に勝ち目など……いや、氷也に見初められてしまったその瞬間から、見初められた女は勝ち目など一切ない。
現に、この会場内には氷也に見初められ、開発され続ける女が２人もいる。
１人目は言うまでもないだろう。
「ぐぬぬ…。
（氷也のあの眼…また新しい技（フィンガーテクニック）を披露するつもりだわ!?
どうして私が最初じゃないの!?今すぐ味わいたい！ああ、けどそしたら本選に出られない！けど…氷也に弄られたい！）」
今や、木ノ葉隠れの里の若手で一番の美貌とエロさを持つくノ一と言えばこの美少女しかいない。
氷也の弟子の１人でもあり、氷也に開発され続ける従順なエロい美少女――テンテンである。
そしてもう１人。
木ノ葉隠れの里で一番の甘美で魅惑的な女体の持ち主と言えばこの美女しかいない。
氷也にセクハラされた結果、絶頂を味わい新たな扉を開いてしまった美女――みたらしアンコだ。
「むぅ…。
（あの眼…あの関節の動かし方…何かヤるつもりね。
いいなァ…ハッ！ナ、ナニ考えてるのよ私は！ダメダメ！
でも、あの指でまた…あぁんもう！思い出したら濡れてきたし、疼

いてきちゃったじゃない!!)」
テンテンもアンコも、試合の結果など気にもしていない。そもそも、氷也が勝つのは絶対。そこは信じて疑ってなどいない。ただ、彼女達の興味関心は常に、どんな時だろうと氷也の〝超絶性技(フィンガーテクニック)〟にのみ向けられている。
どうして私はあの場所にいないのだろうと……たとえ、大勢の前で犯されようとも己が味わいたい。彼女達は強くそう思っているはずだ。
もっとも、内からは丸見え、外からは見えないという、外的興奮を彼女達に与えることはあれど、氷也は見初めた女の裸体を己以外に見せることなど絶対にしない。その点に関して、氷也は一貫している。
つい先日、ポケットマネーから二億両という大金を迷いなく支払い草隠れの里から買い取った香燐に対しても間違いなくそうだ。彼女が如何に稀少な体質(回復能力)の持ち主といえど、今後一切、氷也は己以外には指一本触れさせないはずだ。
氷也とはそういう男なのだ。
父親に似てドスケベで無類の女好き。だが、見初めた女は必ず守り抜き、大切にする。
その氷也に対し、この中忍試験中に見初められた美少女の1人である多由也は、いったいどのように応えるのか…。いったいどのような痴態をさらけ出してくれるのか…。
「さて…では始めよう」
女が羨む美貌の持ち主でもある氷也が、妖艶な笑みを浮かべながら試合開始(性感開発)を多由也に告げる。
「ッ…か、覚悟しやがれ」
冷や汗を流しながら、身体を火照らせた多由也は、自ら伏線を張ってしまう。

試合開始から数分間。
最初は意外なことに、至って普通の試合展開だった。
第四試合のくノ一達が2人まとめても勝てない程度には、多由也の体術レベルは高く、木ノ葉の上忍達も感心していたところ。
そんななか、それまで受けに徹していた氷也がついに動き出す。
「手の内を晒すつもりはないらしいな。
なら…そろそろ俺が攻めるとしよう」
「ッ――――!?
(く、来るッ!!)」
何かを仕掛けようとする氷也に、最大限の警戒心を向ける多由也。
ただ、多由也の表情はどこか……待ち望んでるような…。
「そう焦るな」
それを見抜いているのか、にこやかな笑みを浮かべながら、氷也は静かに告げ、独特の構えを取る。
「むッ!?
(あの構えは、日向一族の〝柔拳法〟奥義か!?
何故、氷也が!!)」
その独特の構えは、ごく一部の者のみが知る構えにどこか似ており、この会場で知る者は三代目火影・猿飛ヒルゼンとテンテン。その他だと、今は会場にはいないが第二試合で敗北したロック・リーと担当上忍のマイト・ガイだろう。
「あ、あれは…そ、そんな…ッ!?
(ど、どうして氷也くんが!?)」
日向一族宗家の嫡女である日向ヒナタはその中でも、その〝体術〟を詳しく知っているはずだ。
「!?
(ま、まさかッ…ありえない!
な、何故、〝日向一族〟でもないアイツが――――〝八卦六十四掌〟を!?)」
そしてもう1人。
テンテンとロック・リーと同班である日向ネジは、日向ヒナタ以上

に詳しい。
本来なら、氷也の構えを見て彼らが連想した体術は日向一族の宗家にのみ伝承されるもので、宗家当主の甥っ子に当たるネジや、里長であるが故に三代目火影が拝見したことがあるのはともかく、里の上役でもなければ、況してや日向一族出身でもない氷也が知るはずもない体術だ。
恐らく、テンテンは日向ネジから見せてもらったことがあるのだろう。そのテンテンは氷也を誰よりも知っていることもあり、氷也がヤろうとしている体術と日向一族の体術の違和感に気付いたようだ。
「アレは…ッ！
（ネジが独力で習得した〝八卦六十四掌〟と同じ。
だけど…違う。構えは一緒でも絶対に違う。だって――――――
あの氷也（ドスケベ）だよ）」
だがその一方で、三代目火影やヒナタやネジは氷也をまったく理解できていない。ネジに至っては、氷也が男に興味がないという理由で、テンテンを介しての接点がまったくないというのも要因の一つではあるが、ナルトを介して接点のあるヒナタと、父親の師匠と弟子の息子という間柄にあるはずの三代目火影は、氷也の〝ドスケベ〟が天性であることを理解できていない。
「まずは性感帯を活性化させる」
――快感法・絶頂十四掌――
そう、氷也にとって中忍に昇格することは、どうでもいいことなのである。失礼極まりないが、この中忍試験もエロい女を探す場に過ぎない。現に氷也は、草隠れの里から香燐を買い取り、試験官のみたらしアンコにまで手を出し、現在は多由也にまで…。
「性感二掌！」
――三陰交（さんいんこう）――
初手は身を屈めながら多由也の真下へと素早く潜り込み、足の内側、くるぶしから測って、自身の指４本分だけ上にいったところにある性感帯のツボを、チャクラを放出させた指で突いて刺激する。
「あァッ！

（な、何…で…一瞬で身体が熱く…）」
　このツボはホルモンバランスを整えるだけではなく、冷えの予防といった、女体そのものを健康に導いてくれるが、子宮や卵巣を活性化させ、感度を高めてくれる。
　三陰交を突かれた多由也は、不思議と身体全体が熱くなり戸惑いを覚えているはずだ。
「ここからだ。
　性感四掌！」
　腎愈（じんゆ）
　多由也が急激な身体の火照りと昂りに戸惑うなか、氷也は背後へと回り込み次の一手を打つ。
　今度は、おへその真裏から親指一本ほど離れた左右にある性感帯のツボだ。免疫力を高めると同時に、性のエネルギーを発する場所でもあり、性的パワーを強める効果がある場所だ。
「あんッ！
（か…身体がどんどん敏感に…だ、ダメ…ダメだ…これ以上されたら…）」
　このツボは絶頂に達する際に働く交感神経が集まっており、効能はそのものずばりで〝イキやすくなること〟。子宮の血液循環が良くなる為、感じやすくなるのである。
　無論、多由也がかつてない快感を与えられ、戸惑いと快感という欲求の間で揺れていようと氷也は手を止めない。
「ここからが真の快感だ。
　性感十二掌！」
　八☒穴（はちりょうけつ）
　さらに氷也は、仙骨と呼ばれる平べったい骨の辺りにある８ケ所の性感帯のツボを素早くほぼ同時に突く。この性感帯のツボは骨盤の血液循環をうながし、陰核を超敏感にさせる作用がある。
「んあッ！
（や…やば…い…もう…ダメ。ウチ…このままコイツに…やァん…気持…ちイイ…も、もっ…とォ…）」

八⊠穴は、性感とは切っても切れない関係にある副交感神経が密集してる場所でもある。男性の勃起不全に有効とされており、つまりは女の陰核も勃起させることができるということだ。骨盤で循環した血液が集中的に流れ込むことで、そこでの性的絶頂も感じやすくなる。

「トドメだ」

背後からの強烈な突きを食らった多由也は、忍としてはあまりにも致命的なほどに身を仰け反ってしまう。

そんな多由也に対し容赦なく……いや、これは男から女に捧げる最高の施しだ。

「性感十四掌!!」

──衝門(しょうもん)──

最後に氷也が突いた性感帯のツボは、乳頭の先端からまっすぐ下におりた鼠径部、足の付け根にあり、性欲の減退に抜群に効果を発揮する。多由也が身を仰け反らせていたことで、氷也は衝門を難なく突くことができた。

この性感帯のツボの恐ろしいところは、即効性が高いことだろう。下半身のリンパを流すツボでもあり、あっという間に性欲が回復、増幅し、その気がない時でも、ここを突けば一発である。

「はァん…ん…はァ…はァ…氷…也ァ…。

(大蛇…丸…様…ウチ…もう…氷也に…逆らえる気が…も、もっと…メチャクチャ…に…されたい…)」

ただ、いくら性感帯のツボを押そうと、普通はここまで一瞬で女体を骨抜きにすることなどできない。

ならば氷也はどうして…。

「これこそが、俺の〝快感法(フィンガーテクニック)〟だ」

奇しくも、日向一族の宗家にのみ伝わる奥義と同じ構えから放たれるソレは、突く場所こそ違えど、効果は似ている……ようで、似ていないような…。

女体を発情させ、絶頂へと導き、チャクラなど練れる状態にさせない点は似ているかもしれない。

何より、指先から絶妙にコントロールされたチャクラを放出し、突いた瞬間に性感帯のツボにチャクラを送り込むことで効能をより高める点はどこか通ずるものがあり、性感帯を活性化させる氷也の〝快感法〟と、チャクラを停止させる日向一族の〝柔拳法〟はある意味では真反対の代物と言えるだろう。

「多由也…降参か？」

「あ…やぁ…も、もっと…」

氷也は内からは丸見え、外からは見えない結界を素早く張る。

どうやら、まだまだ試合は続くようだ。

ここからが真の本番（エロス）なのか…。

??

木ノ葉隠れの里の上忍達は頭を抱えていた。

とくに、担当上忍であるヤマトは手摺に項垂れるように踞っている。

無論、三代目火影・猿飛ヒルゼンもである。

たった今、木ノ葉の狂気の再来が元祖・木ノ葉の狂気を超えたかもしれない瞬間だ。

ただ、頭を抱える大人達とは別で、第五試合に大きく触発された者が数名いる。

第六試合。木ノ葉隠れの里の同期で、しかもチームメート同士の試合となったのだが…。

「まさかヒナタと戦うことになるとは…。だが、一切手を抜くつもりはない。

何故なら、お前に対する侮辱となるからだ。

…？ヒナタ？…聞いているのか？」

日向一族宗家の嫡女であるヒナタと、これまた名門一族出身者で、自身の体を巣として体内に様々な蟲を寄生させ、自らのチャクラを餌として与えて戦う〝油女一族〟の油女シノの試合が開始された。だが、真剣な油女シノとは打って変わり、ヒナタはまったく試合に集中

できておらず、寧ろ何か他のことに気をとられている。
「(ま、まさか…氷也くん…ナルトくんにさっきの体術(快感法・絶頂十四掌)を教えてないよね?ど、どうしよう…ナルトくんが私にあの体術使ってきたら…。わ、私もあの音隠れのくノ一さんみたいに…ハ、破廉恥になっちゃうのかな!?
うう…で、でももし…ナルトくんから迫られたら…)
ッ――――断れないよォ!け、けど、私達にはまだ早いよナルトくんッ!!」
結果的に、ヒナタは考えすぎてしまったことで、自身の性知識と経験値の限界を超えてしまい暴発してしまった。
「ぐふッ!?
(こ、これは――チャクラの真空衝撃波か…ヒナタ…い、いつの間に…これほどの…体術を…)」
もっとも、先の試合のおかげもあり、ヒナタはチームメートだろうと気にかける余裕もなく、本選へと駒を進めることになった。無意識に中距離体術(〝八卦空掌〟)で急止の点穴を突き、油女シノを昏倒させてしまうとは……さすがは、木ノ葉最強を自ら謳う一族である。
そして第七試合。
ヒナタとは違い、第五試合の影響で完全に発情している者がいる。
「わ、私の〝カマイタチの術〟を…風遁チャクラを纏わせた刀で…斬った…だと!?
(あ、ありえない!?
こ、こんな生温い里に!わ、私を超える風遁使いがいるなんて!?)」
その発情した者は、風遁使いが多い砂隠れの里では代名詞的な〝カマイタチの術〟を同じ風遁で斬るという荒業を披露した。己の風遁忍術に絶対的な自信を持っていた砂隠れのくノ一にとって、屈辱以外の何物でもないはずだ。自身が砂隠れの長〝風影〟の娘であることも、味わった屈辱により拍車をかけているはずだ。
「ふう…ふう…悪いけど、アナタとゆっくり戦ってる暇はないの。
(は、早く…この試合を早く終わらせて私もアレ(絶頂)を味わってみたい!見てるだけでこんなに昂るなんて…氷也ってばもうッ――――私の

身体をどうしたいのよ!?）」
　しかし、木ノ葉隠れの里にはいるのだ。天性の性質変化の使い手である〝白い悪魔〟から直々に風遁忍術を習った……白い悪魔に見初められ、熱い寵愛を受けるくノ一が…。
「ッ!?
（は、速いッ…し、しかも…この殺気…本気だ!!）」
　白い悪魔と恐れられる氷也直伝の〝瞬身の術〟で、砂隠れのくノ一最強を自負するテマリの背後へと回り込み、刀を喉元に当てるのは木ノ葉屈指の風遁使い（エロい女）――それがテンテンだ。
「ッ…こ、降参だ。
（ク、クソッ！この私が生温い木ノ葉の風遁使い負けるなんて！）」
　もし、テンテンが一秒でも早く〝快感法〟を試して欲しいが為に、足早で試合を終わらせられてしまったと知ったらどうなるだろうか…。もしかしたら、屈辱どころではなく、自信喪失してしまう可能性もある。
　この結果を、木ノ葉隠れの里はどう受けとるべきなのだろうか…。喜んでいいものなのだろうか…。
　もし、喜ぶべきことがあるのだとしたら、それは木ノ葉隠れの里の将来が安泰ということだろう。
　ドスケベによって、子孫が繁栄する。

　その頃、予選会場の扉を出て少し歩いたとある場所――女子トイレでは…。
「ん…んあッ！
（わ、私が…我慢できなくて1人でシちゃうなんて！あ、あんなの見せられたら当然よね!?で、でも氷也なら…私が発情したことに気付いてるはず！だから…早く来て氷也！）」
　試験官みたらしアンコは、職務を放棄し1人情事に勤しんでいた。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第十七章

トイレに響き渡る卑猥な水音。
「はあ、はあ…あん…ん…んあ！」
荒い息使い。
激しさを増していくよがり声。
今、女子トイレの一室で、1人の女が自ら情事に勤しんでいる。誰か来てしまった時のことなど、今の彼女には考えられない。滾った性欲と火照った身体には抗うことなどできないのだ。
「ああん！
氷…也…は、早くゥ…来てよォ…」
ただ、彼女はもう己自身では満足などできない。
本物の快感を知ってしまったからだ。いや、そのように開発されてしまったから…。
彼女が求めるのは、ただ1人の年下の男のみ。
しかし、発情した女――みたらしアンコは、隣に先客がいることにまったく気付いていない。
「――――え？
（え？・え？・えェ!?
予選真っ只中にトイレでいったいッ…な、ナニしてるんですかッ…アンコさん!!）」
その場に居合わせてしまったのは、アンコの後輩で〝暗部〟に所属している優秀なくノ一だ。中央の塔で護衛任務に就いていた彼女は、交代時間にたまたま用を足していたらしく、そこにアンコがやって来て今に至る。
不運に見舞われてしまった彼女の名は卯月夕顔。彼女は今、アンコのよがり声と淫らで卑猥な水音に顔を赤く染めていた。
「ふっ…隣に人がいるのに気付かずに自慰に勤しむとは…エロい女になったもんだな。
いいぞ、アンコ。もっとエロく、もっとスケベになれ」

「……え？」
そして、卯月夕顔が用を足していたトイレには、いつの間にかさも当然の如く男がいた。
「!!」
まるで時が止まってしまったかのような、それと同時に驚愕しすぎて固まってしまったかのような、なんとも形容し難い表情を彼女が浮かべてしまっているのも仕方がない。
それともこの場合は、暗部に所属する優秀なくノ一である卯月夕顔に気付かれることなく、同室に潜伏していたドスケベ――氷也を褒めるべきなのだろうか…。
「おっと、驚かせてしまったかな？
これは失礼。だが、怪しい者ではない」
「!?
（こ、この子は――〝白い悪魔（超問題児）〟!!）」
いや、己の周囲に結界術を施すことによって、姿だけではなくチャクラ、匂い、音、気配を消せる氷也にとっては、これくらいは造作もないこと。
かつて、〝無人〟と恐れられた岩隠れの里の二代目土影を超えるのも不可能ではない。寧ろ、近いうちに超えているだろう。
「…ッ。
（こ、これが白い悪魔！カカシ先輩とヤマト先輩を超える近年稀に見る逸材にして里の狂気！）」
それよりも、叫び声を一切上げずに、ズボンと下着を下ろし女体の神秘（下半身）を露にした状態ですぐに冷静さを取り戻し状況を把握しようとしている夕顔の胆力と状況に応じての切り替えの早さを褒めるべきか…。はたまた、ごくごく普通の女のように、この状況で叫び声を上げれないくノ一である彼女を憐れむべきか…。
悲しいかな……夕顔は今、氷也に手入れされ整った花園と用を足したばかりの奥の院を見られているにも関わらず、彼女はまったく気付いてはいない。どのような状況に陥ってしまおうと、瞬時に冷静さを取り戻すのは訓練された証拠でもある。忍あるあるだ。

「さて、イイものも拝見できたし、そろそろイクとしよう」
無論、氷也の言う〝イイもの〟とは、夕顔のあられもない魅力的な姿のこと。そのおかげで、氷也の準備はすでに整い万全の態勢だ。
「ッ…！
（な、何を…え!?
ア、アンコさんの方に行った!?）」
そこから始まる男女の場外戦。
さすがの夕顔も、己の先輩と一回り近い年下の下忍による色事に言葉も冷静さも失うのである。

嵐が去ったトイレ。
たった今まで繰り広げられていた壮絶な色事の影響で、卯月夕顔は茫然自失状態にあった。
暗部に所属する者としては、今のこの状態は暗部失格の烙印を押されてしまうだろう。
しかし、こうなってしまうのも仕方がない。
「す…凄かった。
（ア、アンコさん…別人だった。
あ、あんなによがり狂って…でも…物凄く気持ち良さそうだった。私…あ、あんなこと一度も…されたことない。そ、そんなに気持ちイイの？）」
繰り広げられていた色事はそれ程までに凄絶で、夕顔の常識を覆してしまったのである。
「あ…んん…わ、私…こんなに濡れてる」
それどころか、夕顔まで発情させてしまった。彼女の手は無意識に己の秘部へと向かい、触れた瞬間に甘い蜜が指に絡みつく。
そして、己の蜜にまみれた指を目の当たりにした夕顔は衝動を抑えきれず、抗うこともできず、今度はその奥へ入り込み、禁忌（ナカ）を犯して

いくのである。
「はあ…はあ…はぁん…ふ…ん…んん！
（だ…だめェ…こ、こんなこと…だめなのにィ…ど、どうして…指が止まらないの!?）」
暗部に所属する卯月夕顔には恋人がいる。
いつ死んでもおかしくない環境に身を置いているが、いや……置いているからこそ、彼女はその恋人と清い関係を築き上げており、互いに不満など一切あるはずもなかった。
だが、卯月夕顔は見てしまった。
己の知らない世界を…。男と女の――雄と雌の真の〝まぐわい〟を…。
「ふう…ふう…あ…あ…あッ――――あァ！」
果たして、卯月夕顔はこれから満足できるのだろうか…。本物を見てしまった彼女はモノ足りるのだろうか…。

??

乱れた衣服を整えながら歩く男女。
男は飄々として、それでいて色気が駄々漏れ。
女は高揚した頬と乱れた衣服、肌に張りついた髪がこれでもかとエロさを溢れ出させている。
「本当に来てくれるとは思ってもなかったわ…しかも本体が来てくれるなんて」
「同じ過ちは繰り返さないさ。
それにしても、本当にトイレで1人でシてるとはな」
欲望に忠実。
快感を味わったであろう男女がそこにいる。
「お、お願い、それは忘れて…」
女は男が来るよりも前から、自らの手で情事に勤しんでいたようだが…。
「そ、それはともかく！氷也は受験者。しかも主催里の。本選出場を

決めたからって…」
「安心しろ。氷遁影分身からの情報だと誰も気付いてはいない」
〝白い悪魔〟と恐れられる氷也は、他の受験者の試合を観戦するよりも中忍試験試験官の1人である特別上忍・みたらしアンコと奏でる快感のハーモニーを選んだのである。
いや、寧ろ快感を選ぶ以外に選択肢は存在しなかったのだろう。それに前回、アンコとお楽しみだったのが氷遁影分身だったのもあり、次は必ず本体で行くと決めていたのだ。
しかし、まさか本当にアンコの異変に気付いてしまうとは。いや、寧ろ初めから彼女を発情させることが目的で、先の試合であのような行為(快感法)に及んだのか…。
目の前の女だけではなく、それを目にした女すらも発情させてしまう二段構え。
おまけに、相変わらずの〝ラッキースケベ・トリガー〟によって、自ら手を下すことなく新たに別の女(卯月夕顔)を開発してしまうとは……さすがの一言に尽きる。
これぞまさに白い悪魔の所業。清純(白い)な女を淫らに染める。
故に、氷也は白い悪魔と恐れられるのかもしれない。
「さて、そろそろ戻ると――――ん?」
そんな氷也だが、試合会場に戻ろうとするなか、何やら異変を感じ取るのである。
「どうしたの?」
…って、あら?この音…カカシの〝雷切〟?」
「それにこのチャクラ――大蛇丸だな」
氷也の表情がドスケベから忍のものへと変わる。

??

中忍試験第三の試験の予選が行われる中央の塔。
現在、才能ある若き下忍達が本選出場を懸け、死に物狂いで試合に挑んでいるわけだが……そんな状況のなかで別の場所では、とある下

忍――うちはサスケを巡り、担当上忍であるはたけカカシとS級犯罪者の大蛇丸が殺意を撒き散らしていた。
正確には、うちはサスケを狙う大蛇丸を排除するべく、はたけカカシが臨戦態勢に入っている状況だ。
その一方で、大蛇丸ははたけカカシにまったく興味を示していない。大蛇丸が興味を示すのは……欲しているのは、うちはサスケだけなのだ。
「サスケくんにとって復讐は生きる糧であり、忍道。担当上忍がそれを抑え込むのはどうかと思うわよ…」
カカシは、大蛇丸の登場によって最近のサスケに対する自身の危惧が間違いではなかったことを悟った。
「サスケの復讐心…そこに付け込んだのか!?」
第二の試験の最中に大蛇丸の襲撃を受け、〝呪印〟をその身に刻まれたうちはサスケは、呪印の影響を受けてしまっているのもあるのか、精神が不安定な状態に陥っている。
いや、不安定と言ったら語弊があるのかもしれない。サスケは己が掲げる復讐に取り憑かれてしまっている。復讐を果たす為に、更なる力を追い求め、力に溺れている。
とくにここ最近の教え子の精神状態、力への渇望を危惧していたカカシは、予選で見せたサスケの強さが闇に染まったもので、これ以上は危険であると判断し、呪印に封印を施そうとしたのだ。
しかし、カカシの行動に対してサスケが見せたのは激しい拒絶。全力の抵抗だった。
カカシですら、〝写輪眼〟を使用しなければ抑え込めないほどにサスケの力が増大していたのである。その結果、カカシはサスケを気絶させるしかなく、封印術も施すことができず、しかもその場に大蛇丸が現れ、担当上忍としての在り方を指摘され今に至るのである。
「ふふ、私は付け込んですらいないわ。
サスケくんが自ら望んだことよ。復讐を果たす為には、あの2人より強くないといけないのだから」
ただ、サスケの力の増大は大蛇丸だけが原因ではない。寧ろ、比率

としてはそちらからの影響の方が大きいだろう。大蛇丸は付け込んですらいない。サスケが己の無力感に苛まれ、闇に染まるのを見守っていただけだ。
「ッ…まさか！」
どうやら、カカシも思い当たる節があるのか、その脳裏にはとある下忍2人の顔が浮かんでいる。
その2人は、直接的な絡みこそ多くはないが、カカシにとって強い縁がある。
「さすがは里の狂気の再来と二代目黄色い閃光だわ。
木ノ葉にとって眩い光。でも、光が強ければ強いほど…闇もより一層深くなるのよ」
そう……今や里内外で知らぬ者はいないであろう木ノ葉の若き英雄達。恩師の息子（ナルト）と大師匠の息子（氷也）だ。
「忌々しいガキ達だけど、サスケくんを私好みに変えていってくれていることだけは心から感謝してもいいわ」
氷也とナルトの強さを目の当たりにし、2人に助けられたカカシは、大蛇丸の言葉を否定することができずにいる。
サスケが波の国の任務で氷也とナルトの強さを目の当たりにしてしまったことをきっかけに、焦りを抱き、嫉妬し、今まで以上に力を求め、渇望するのは当然の結果。無論、氷也とナルトに悪意があるわけでもなければ、2人が悪いわけでもない。これは、若気の至りのようなものだ。可愛げが一切ない若気の至りではあるが…。
一つだけ問題点を挙げるとしたならば、うちは一族の性質上か、はたまたエリート一族に生まれ落ちてしまった弊害（プライド）なのか……他者よりも嫉妬心が強いのはあるかもしれない。
「どこまで闇に染まってくれるのかしら…」
少なくとも、あの大蛇丸が強く惹かれるほどに、サスケは闇に魅了され、染まりつつあるということだ。
「あなたじゃサスケくんの力は伸ばせないわ」
「く…」
カカシは今になりようやく、自身のサスケに対する教育が間違って

いたことを猛省する。
サスケの自主性を重んじていたつもりだが、カカシの指導は他者から見たら放任主義ともとれる指導内容だった。カカシ本人の経験なども相まってのものかもしれないが、サスケに対して良かれと思っての行動が、まさかこのようなことになろうとは…。
カカシは、サスケの為に時間を割き、サスケと共に行動するべきだった。付きっきりで指導すべきだった。初めての教え子ならば尚更に…。
戦争という究極の実戦経験をサスケと同じ歳の頃に積んだカカシ世代と、戦争とは無縁な時代に生まれたサスケ世代では大きく違うのだから…。
もっとも、カカシと同等の実力であったであろう〝鬼人〟桃地再不斬や氷遁使いの白などを相手に、戦争とは無縁な時代の生まれでありながら死闘を繰り広げることができ、それどころか打ち倒した氷也とナルトという例外がおり、サスケはそれを目の当たりにしてしまったのだから焦りを覚えてしまうのも致し方ないのかもしれない。
普通なら、実力の違いを目の当たりにして自信を失くしてしまうところだろうが、失うどころか激しい嫉妬から対抗心を燃やしてしまうのは力に固執しているからこそのものなのだろう。
とにかく、サスケの精神状態と身の周りの環境はあまりよろしくないということだ。
「私なら伸ばせる。サスケくんなら、あの2人なんて目じゃないわ。それどころか…イタチを超えるでしょうね。
サスケくんに必要なのはあなたじゃない」
だからこそ、大蛇丸は断言する。
サスケに必要なのは己なのだと。
少なくとも、〝伝説の三忍〟の1人に数えられる大蛇丸ならば、カカシよりもサスケを強く鍛え上げることは可能だろう。禁術も多く含まれるが、ありとあらゆる多くの術に精通しており、忍術の扱いにおいては、千の術をコピーしたとも言われているカカシですら比ではないはずだ。

大蛇丸にとって忍者という存在はその名の通りで、忍術を扱う者を指している。
力を渇望するサスケにとって、師としてはお誂え向きのはずだ。
だが、大蛇丸がサスケを弟子として迎え入れようとしているのも、それもこれも全ては自身の為。サスケが望んでいるであろう力を与え、そして力を手にし、大蛇丸が望む成長を遂げたその瞬間に、サスケを食らう為に。
大蛇丸の目的、それは――若く逞しい才能ある身体（うちは一族）を手に入れることなのだ。
「ふッ、復讐しか興味のないつまらん男が俺やナルトを超える？老化（ボケ）が早いようだな大蛇丸」
とはいえ、全てが大蛇丸の思い通りに事が進んでいるわけではない。いや、進むわけがないのだ。
「ッ…ただエロいだけのクソガキじゃない。
（わ、私が気付けないなんて…忌々しい！）」
その要因は音も気配もなく、突如としてその場に現れ、忍界全体に名を轟かせる大蛇丸とカカシですらも驚愕させた。
「ひょ、氷也!?
（い、いったいいつの間に!?
気配も匂いもまったく感じ取れなかった…〝時空間忍術〟か？）」
今の木ノ葉隠れの里には、他里にとって脅威となる狂気がいる。木ノ葉にとっても狂気ではあるが…。寧ろ、里に対してこその狂気なのかもしれない。
「うちはを狙って何をするつもりか知らんが、俺とナルトにはそいつじゃ勝てんよ」
「ふん…女の尻ばかり追いかけてる性欲の塊なんて、サスケくんならすぐに超えるわ」
木ノ葉の抜け忍で、S級認定（最上位）された犯罪者である大蛇丸からも散々な言われようだ。
ただ、氷也が生まれつきのドスケベであることは嘘偽りなき事実だが、大蛇丸が残忍さと狂気を持ち合わせた危険人物であることも事

実。方向性は違うが、ある意味では似た者同士。
「禁欲の果てに辿り着く境地なんてたかが知れてるんだよ。女の尻ばかり追いかけてる？ハッ、俺は朝も昼も夜もなく、食前食後も追いかけてるぞ。嬉しいことに、俺の惚れた女達は〝飽きる〟とは無縁なエッロい女達だ。いくら喰らおうと、喰らい尽くせぬ程な」
そんな2人が揃った今、事態はどうでもいい方向へと向かってしまおうとしていた。
氷也はいったい何をしにこの場に現れたのだろうか…。
「真の強者とは、忍を駄目にすると言われている〝忍の三禁〟を平然と三つ同時に破れる豪傑さを持ってこそだ。性欲の欠片もないガキ（童貞）じゃ話にならん」
一つだけ言えることは、氷也は忍の三禁を平然と三つ同時に破れるどうしようもないドスケベだということだ。ちなみに、氷也の父親も三禁破りの常習犯である。さすがは元祖里の狂気。
「これだから野蛮人（ドスケベ）は嫌いなのよ。
私色に染まったサスケくんがアンタ達2人まとめて殺してくれるから覚悟しなさい」
氷也と大蛇丸はある意味では似た者同士。
しかし、決して相容れない。
事態はどうでもいい方向に向かってはいなかった。氷也と大蛇丸が向かい合った時点で、殺し合いに発展するのは当然。
「ならその前に…木ノ葉に仇なす前に、お前とうちはを葬り去るとしよう」
――灼遁・灰滅――
氷也の手が、まるで焼け焦げたかと勘違いしてしまいそうなチャクラに覆われ、瞬く間に辺り一帯の水分を失わせ、異常乾燥を発生させる。
「！
（コレは…食らったらヤバいわね）」
すぐに異変に気付いた大蛇丸は表情を曇らせた。見ただけでこの術の危険性に瞬時に気付くとは、さすが〝三忍〟に数えられる忍なだ

けはある。
この術は一見、チャクラ性質の違いこそあれど、カカシの〝雷切〟と同系統の術に見えなくもないが、似て非なるものだ。カカシの雷切が対象を貫く〝突き〟であるのに対し、氷也のそれは灼遁の炎全てを右手を覆うチャクラに集中、圧縮し、その熱によって触れるもの全てを跡形もなく消し飛ばす術だ。
凄まじい熱量は骨すら残さないだろう。
「ッ…！
(唇が切れた…おまけに、ほんの少しの間で喉まで乾きだすなんて、なんて熱量だ！
周囲に与える影響も、威力もオレの雷切とはまったく違う。桁外れすぎる！相変わらず恐ろしいヤツだ！)」
木ノ葉一の技師と讃えられるカカシですら驚愕と同時に絶賛するのだから、この術の恐ろしさと、編み出した氷也の才能の高さは言わずもがな。
大蛇丸を相手に見劣りしていない。
「ふふふ…私よりも、あなたは気に掛けるべき相手がいるんじゃない？
大丈夫かしら？死んでないかしら？」
とはいえ。相手はあの大蛇丸だ。今回もまた、このまま大人しく殺られるはずがない。
人質を取る三忍。
人質を取られる下忍。
三忍らしからぬ行いではあるが、氷也を相手には形振り構ってられないのだろう。
「ふ…俺を相手に人質でも――――ッ!?
(多由也のチャクラが弱まってる！)」
先の試合で医務室送りになってしまった多由也の安否は如何に…。

ド根性（ドスケベ）忍伝　第十八章

その忍術――〝時空間忍術（飛雷神の術）〟を単独で扱えた忍は、この広い忍界でもたった2人のみとされていた。

1人は、術の開発者でもある〝二代目火影〟千手扉間。この術の他に、〝影分身の術〟など多くの術を開発し、忍術の発明家とも讃えられ、現在の木ノ葉隠れの里の基盤を築き上げた偉大な火影である。

もう1人は、歴代最年少で火影になった〝四代目火影〟波風ミナト。〝飛雷神の術〟の扱いに於いては、開発者の千手扉間よりも優れていた天才忍者だ。悲しいことに、歴代最年少で火影になった波風ミナトの就任期間は歴代最短。火影になり僅か1年ばかりで他界してしまった彼を惜しむ声は、10年以上経った今でも絶えない。

だが、波風ミナトがこの世を去ってから10年以上経過した現在、また新たに飛雷神の術を単独で扱える者が現れた木ノ葉隠れの里はきっと安泰だろう。

「大蛇丸――――またな」

――飛雷神の術――

いや、木ノ葉は安泰どころではなく、不安しかないかもしれない。

「!?

（こ、これは飛雷神の術!!

あのクソエロガキッ……どこまでも私を虚仮にしてくれるわね!!）」

新たな使用者は木ノ葉の〝白い悪魔〟――氷也。

時空間忍術の極意を、行きたい場所に行きたい時に使用するような問題児（ドスケベ）だ。

そもそも飛雷神の術とは、あらかじめマーキングした場所まで瞬間移動する習得難易度〝Sランク（最高難易度）〟の時空間忍術の極意なのだが、あろうことか氷也は、飛雷神の術のマーキングをお気に入りの女（スケベする為）の下腹部付近……決まって子宮の上あたりに施している。

マーキングの模様は使用者によって違うらしく、氷也の場合は雪の

結晶の模様となっており、誰が見ても誰のマーキングなのか一目瞭然。〝俺の女〟だと強く主張されたソレはまさしく氷也の〝姪紋(マーキング)〟だ。

ちなみに、氷也の姪紋(マーキング)を刻まれた女は、テンテン、波の国のツナミ、アンコ、香燐、そして先の試合でいつの間にか刻まれた多由也の5人である。恐らく、〝姪紋持ち(スケベな女)〟はこれからも増えていくだろう。

この世界でもっとも飛雷神の術を教えてはいけない奴に教えたのはいったい誰だと声を大にして批判したいところだが、悲しいかな……波風ミナト亡き今、飛雷神の術についてもっとも詳しい人物は波風ミナトの師匠しかいない。即ちそれは、氷也の実父――自来也のことである。

ただ、飛雷神の術を受け継ぐ後継者としては正当だ。二代目火影から続く由緒正しき師弟の系譜なのである。

使い手として、氷也と波風ミナトに違いがあるとしたら、飛雷神の術をエロスに用いるか、戦闘に用いるかだろう。

「アンタだけは確実にこの手で殺す!!」

とはいえ、忍術の扱いに於いて氷也は類を見ない天才だ。その群を抜いた才能で、自来也ですら〝妙木山〟の蝦蟇の助力を得てようやく放てる火遁を1人で行ったり、氷遁以外の血継限界(灼遁)を習得してしまっている。

本人の気持ち次第では、波風ミナトを超える使い手にもなれるはずだ。

これは冗談ではなく事実だ。

その証拠に、この場に残された大蛇丸の表情が怒りで満ち溢れている。

マーキングこそ付けられてはいないが、今の氷也の行動を大蛇丸はこのように解釈したはずだ。

――お前程度いつでも殺せる

そして、その氷也は優先順位が高い方に飛んだだけ。

大蛇丸からしたら、今この場所で氷也との戦いを避ける為の作戦が、たまたま仇になってしまっただけだ。

氷也にとって大切で優先すべきなのは、いつ如何なる時も〝エロい女〟なのである。
大蛇丸からの恨みなど何のその。
「ッ!?
(こ、これが…三忍の本気の殺気なのか!?)」
その一方で、蚊帳の外状態だったカカシは自身ではなく氷也に向けられたものではあるが、大蛇丸の身から溢れ出る本気の殺意を浴び身震いしていた。

??

時を同じくして…。
「あぐッ――――き、君麻呂…て、テメエ…う!!」
先の試合にて、これまで味わったことのない快感を味わい何度も絶頂してしまった多由也は、快感のあまり気絶してしまい医務室へと運ばれていた。
しかし現在、多由也は四肢に骨でできた鋭利な短剣を突き刺され、壁に張り付けにされている。
まるで、拷問を受けているかのような光景だ。
「〝音の五人衆〟ともあろう者が…。
だが、君が五人衆でいられるのも今この瞬間まで。君は今ここで、ボクが処刑する」
いや、拷問ではなく処刑である。
しかも、音隠れの里の忍同士によるものだ。
音隠れの里。
実はこの里、大蛇丸と密接な関係にある。それどころか、音隠れの里の里長は大蛇丸なのである。事のきっかけは、小国である〝田の国〟の大名が実体に合わない軍備増強を目論んだことだ。そこを大蛇丸に付け込まれる形で、音隠れの里は設立されたのである。
つまり、名目上は田の国の隠れ里になるわけだが、実態はどこの国にも属さない独立勢力のようなもので、事実上は〝大蛇丸一派〟とい

う認識の方が正しいだろう。
無論、この君麻呂と呼ばれた青年も大蛇丸の部下で、音隠れの里の忍だ。多由也との違いは、君麻呂は担当上忍としてこの中忍試験に参加しているという点で、そのことからも相当な実力を持ち、大蛇丸からの信頼も高いことが伺える。
その君麻呂だからこそ、多由也の失態を赦すはずもなく、彼女の粛清に当たっている。
それは同時に、大蛇丸にとってもはや多由也は役に立たない存在だということを意味している。
「クソ…野郎が…。
(けど…これも仕方ねェ。ウチ自身の責任…敵であるはずの氷也に…惚れちまったから…。
後悔は…ない。ただ――――最期に、氷也に触れて欲しかった)」
彼女自身もそれを強く理解していた。
ただ、多由也にはできてしまったのだ。仕える主君よりも遥かに大切で何よりも変えがたい……氷也という愛しい男が。
もはや、多由也は大蛇丸の部下ではない。身も心もすべてが氷也のものとなってしまっている。その身に消えることのない姪紋(マーキング)まで刻まれているのだ。
「死ね」
迫り来る凶刃は人生の終焉を意味している。
だが、今の多由也にとっては新たな始まりを意味している。
そう――多由也にとって未知の世界の始まり……旅立ちなのである。
これから、白い悪魔(ドスケベ)に見初められた多由也は、ドスケベ(エロい)好み(女)へと変わっていく。淫らである一方、エロスに対してどこまでも正直で純粋な道を歩んでいく。
その多由也の隣には、必ず氷也がいる。
「女を泣かせるのはクズ。殺すなど以ての外。
女をイカせてこその男…覚えておけ」
雪の結晶の模様の姪紋(マーキング)をその身に刻まれた女は、何が起きようと

も決して死ぬことはない。どのような窮地に立たされようと、絶体絶命の苦境に追い込まれようとも…。
氷也の加護(スケベに開発される)を受けるとはそういうことなのだ。
「あ…
(来て…くれた…ウチの為に…)」
多由也が歩み始めた道。知らない世界(快感)。味わったことのない日常(快感)。先の試合で味わった以上の興奮と快感が多由也を待ち構えている。
しかし、そこに不安など一切ないはずだ。
壊れ物でも扱うかのように大切に抱き抱えられた多由也は、肌から伝わる温もりと、ほのかに香る好きになってしまった男の匂いで身体が高揚(発情)する。
傷だらけになり、殺されかけていたというのに、身体は正直なものだ。
「ッ…もう来たのか――――木ノ葉の白い悪魔!!」
そんな多由也に向けて、氷也は安心させるように柔らかな笑みを浮かべ、彼女を抱き抱えた手に少しだけ力を込めた。
「この俺(ドスケベ)が…俺の女(エロい女)の危機に駆けつけないわけないだろう」
エロがあるところに氷也あり。
「ッ…。
(ああ…ウチ、氷也がたまらなく好きだ。
どうしようもないくらい好きになっちまったみたいだ。たったこれだけで…身体が熱くなって、こんな時ですら…)」
その程度の行為すらも女を発情させてしまう。たったそれだけの行為が女に喜びと快感を与える。
「さて…お前が多由也の担当上忍であろうと…俺の女を傷つけてただで済むと思うなよ」
そして、多由也に対する氷也の熱い想いが、骨の刃を一瞬で灰へと変えてしまう。

白く美しい雪が紅く染まり、その中から出てきたのは…。
「これで死なないとはな。
皮膚の下に骨の膜を作ったのか…」
全身に幾何学模様が浮かび上がり、皮膚の下の骨こそ露出しているが雪の圧力に潰されてなお原型を保った化物。
「さすが…理解が早いな。
大蛇丸様が仰っていた氷遁秘術…大した圧力だ。だが、もう捕まりはしない。
〝早蕨の舞〟!!」
滅亡したはずの〝かぐや一族（戦闘一族）〟の末裔――君麻呂。
有する能力は体内の骨を自由自在に操る体質型の血継限界〝屍骨脈〟。
「!?
(範囲が広いッ!!)」
君麻呂は大蛇丸の切り札。
氷也ですら驚く実力の高さからも、それが事実であることは明白だろう。
事実、氷也と君麻呂の戦いは医務室を破壊した後に、〝死の森〟へと移っており、辺り一帯が見るも無惨な悲惨な状態となってしまっている。
地中から飛び出し、辺り一帯を埋め尽くした大量の骨。
それを目の当たりにした氷也は…
「見た目は骨というよりも…まるで枯れ木だな」
ただし、生気がないのではなく、他者を突き刺すことで生気を奪う凶悪性を強く秘めているが…。
氷也は君麻呂から一旦距離を取り、まだ骨が地中から飛び出していない地面に手を突き、辺り一帯を埋め尽くした自身の雪を瞬時に熱で溶かし水へと変換し、その水を凍結させることで君麻呂の術に対処した。
「多由也。

お前は俺が絶対に守り抜く…安心しろ」
「ッ…わ、わかった。
(ウチ…もう骨抜きじゃねェかよ)」
ただこの戦い、攻める君麻呂に対して、氷也は多由也を抱き抱えながら戦っている。見るからに氷也が不利な状況だ。
「大蛇丸様に警戒される程の貴様が…多由也程度の女に現を抜かすなど腹立たしいことこの上ない。
このボクが…揃ってあの世に送ってやる。
〝早蕨の舞・再骸(さいがい)〟!!」
君麻呂は畳み掛けるように、規模も威力も先程を遥かに上回る術を発動した。それはまさしく骨の大木の群。まるで、死人の骨が生前よりも力を増して再生していくかのような…。
「お、おいおい…
(マジかよ。見た目が枯れ木とは言ったがこれじゃあ、本当に木遁みたいじゃねェか。ヤマト先生の本気の〝木遁・樹海降誕〟とも…いや、それ以上かも)」
これにはさすがの氷也も本日一番の驚きを見せ、それどころか冷や汗を流す。
あの氷也が冷や汗を流すなど、大蛇丸を相手に戦った時ですらなかったはず。
それはつまり、純粋な戦闘能力だけなら、この君麻呂は大蛇丸を上回っているということになる。
「ま、殺られるつもりはねェがな。
(にしてもコイツ…チャクラの根源がどこかヤマト先生と似てる。まさか…コイツもあの細胞を?)」
┃氷遁・氷柱昇天┃
だが、だからといって氷也に勝てるかどうかはまた別の話。
素早く印を結んだ氷也は再び地に手を突き、無数の大きな氷柱を発生させ、大木のような骨に次々と突き刺していく。
そして、最後に氷也が狙うのは無論、言うまでもなく…。
「!

（どこに…チャクラは――――ッ!?）」
しかし、氷也はある異変に気付く。氷也がほんの一瞬だけ目を放した隙に、君麻呂が姿を隠していたのである。とはいえ、チャクラ探知もできる氷也が君麻呂の場所を探知できないはずがない。
ならば、何が氷也をここまで驚愕させているのか…。
「あ、危…な…」
すぐそばの骨の大木から上半身のみを出現させた君麻呂が手に持つ骨の剣が、多由也の首筋近くで止まっている。
「骨を辿って移動までできるとはな…ッ!!」
氷遁・凍太刀（いてたち）
「これにも反応するか。
感知能力に於ても、ボクがこれまで殺した感知タイプ達を遥かに凌いでいる」
氷也は氷遁で作り出した刀で辛うじて骨の剣を防ぎ弾き返すも、肝が冷えた……そんな様子だ。
自身が作り出した骨から骨へと移動できるのは氷也にとっても想定外で、彼がここまで驚くのも仕方がない。時空間忍術とは違った移動方法で、しかも全てが君麻呂が作り出した骨である為に、当然ながら君麻呂のチャクラを宿しており、感知もし辛いときた。
明らかに感知タイプ殺しの術。これに対応するには相当な反射神経と危機察知能力が必要だろう。
氷也が対応できたのも、多由也に危機が迫っていたのが大きいはずだ。
「一度ならず二度までも…赦さん」
火遁・荼毘太刀（だびたち）
ただ、君麻呂の行動が沸点が高い氷也に火を点けてしまった。以前、大蛇丸に香燐を狙われた際も、怒りこそしていたが絶対に守り抜ける自信もあり、どこか余裕が伺えた。だが、多由也が二度も窮地に立たされてしまった今は別だ。
「この火遁はお前が死ぬまで消えることはない。痛みを与え続ける…楽に死ねると思うなよ」

火遁で作り出した太刀。
その太刀から放たれるのは氷也の怒り。
しかし、氷也が誰よりも赦せないのは君麻呂ではなく、きっと己自身だ。絶対に守り抜くと約束した多由也を危機に晒してしまった。だからこそ、己が赦せない。
とはいえ、己を赦せないきっかけを作った君麻呂へ手加減などするはずもない。
死は苦痛からの解放。故に、多由也の命を狙い、傷つけた者に安らかな旅立ちなど与えない。死ぬまで地獄の責苦を与え続け、エロスと女によって滾らせた熱き想い(火遁)によって葬るのだ。
怒りを乗せた火遁の太刀を氷也が一振りした瞬間……死の森の一角が爆炎に呑み込まれる。
中忍試験の予選真っ只中に勃発してしまったこの事件。本選出場を決めた木ノ葉の下忍(二代目狂気)が起こしたボヤ騒ぎ(大火災)を、木ノ葉はどのように鎮火(沈静化)するのだろうか…。

??

御年69歳。
歴代最長の就任期間を現在も更新し続ける三代目火影・猿飛ヒルゼン。
しかし、高齢である故か、多忙である故か、それともこれまでの無理が祟った故か、はたまたまったく別の要因か……現在の三代目火影・猿飛ヒルゼンは、全盛期どころか昨日の面影すらもなく、一気に白寿(九十九歳)を越えて紀寿(百歳)に到達してしまったかのような老け込み具合(哀愁漂う雰囲気)である。
「ってことで、香燐と同じように多由也も木ノ葉に迎え入れてほしい。大蛇丸の部下だったから、香燐みたいにお金は必要ないはず。あ、多由也が香燐よりも安いとかそういうことは絶対にないぞ。俺が一生をかけて幸せにしてやるからな(イカせ続けてやる)」
恐らく、まだ予選が行われているなか〝影分身〟を作り出してその

分身を予選会場に残し、本体は嫌な予感しかしないなか極一部の者にしか気付かれないように会場を後にして別室を訪れ、そこで死の森で起きたボヤ騒ぎ(大火災)含む大蛇丸や何やかんやらなどの事の顛末を一気に聞かされたからだ。

いや、聞かされたからではなく、三代目の頭痛、胃痛、心労の要因は常に氷也である。

「おぬしもう失格にするぞ」

そして、事の顛末を聞かされた三代目が辛うじて絞り出したかのような、口にした言葉はそれである。これは致し方なし。

しかし、木ノ葉にとってその判断が吉と出るか凶と出るか…。

普通なら、1人の下忍を失格にしたところで痛くも痒くもないのだが、氷也は普通の下忍ではない。里の未来どころか、現在進行形で里の状況を大きく左右する希望であると同時に時限爆弾だ。軍事面でも、何れは〝人柱力〟に匹敵する存在になるだろうと三代目は思っている。それどころか、超えてくるだろうとも…。

「はあ…大蛇丸と音隠れの里の情報、幹部の捕縛(多由也の保護)、撃退…これはAランク任務、下手したらSランク任務相当だ。

これにより此度の行いを…不問に付す」

それはともかく、大蛇丸が木ノ葉隠れの里に対して何か善からぬ事を仕掛けてくるであろう事は確実。音隠れの里が大蛇丸一派であることが掴めたのは大きい。その功績は大きく、問題行動が多すぎるが、氷也の実力が群を抜いているのは確か。今回の行動で、それがより明白となったことだろう。良くも悪くも…。

忍としてすでに一流。人間として超問題児。

コレを扱いこなすのは骨が折れるどころか命懸けだ。

場所は移り、中央の塔の薄暗い廊下の一角にて…。

「満身創痍ね――君麻呂」

「はあ…はあ…く…も、申し訳…ございません…大蛇…丸…様」
所々、身体に火傷を負いながらも、どうにか逃げ延びた君麻呂は、敬愛(崇拝)する主君の元へと帰還した。
想像を絶する爆炎からも、骨から骨へ移動し続けることで、どうにか逃げ延びていたようだ。
「まァ、よく生きて戻ってこれたわね。
これも〝柱間細胞〟のおかげかしら？」
そして、〝白い悪魔〟と恐れられる氷也を相手に善戦し、生き延びることができたのは、大蛇丸から強化されていたおかげだったようである。とある細胞を移植したことにより、君麻呂は身体能力やチャクラ量だけではなく、屍骨脈まで強化され、さらには傷の治りも常人を遥かに凌いでいる。
普通なら、致命傷になっているはずの火傷がすでに回復傾向にある。それどころか、見るからに完治しつつある。
「木遁は使用できなかったけど、まさか屍骨脈が強化されるなんて…あの時は本当に驚かされたけど、それでもやっぱりまだまだね。
まァいいわ。あなたなら今回の敗北を糧に、さらに強くなってくれるでしょ？今後に期待してるわ」
「有り難き…お言葉。
次こそは必ずあの男を葬り去ります」
その君麻呂を大蛇丸は叱咤激励し、奮い立たせた。
大蛇丸にとっても、君麻呂にとっても、最大の障壁は間違いなく氷也だ。